遊戯王ＧＸ 《蒼き幻を従えし者》

竜王＆竜姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》

【Ｎコード】
Ｎ６６２２Ｓ

【作者名】
竜王＆竜姫

【あらすじ】
遊戯王ＧＸの世界にトリップした主人公、聖　幻夜。
蒼い幻の精霊三姉妹と共に幻夜はデュエルする。
しかし、三姉妹はなかなか使うことが出来ないカードで…
※３枚だけオリカを出します。
また、シンクロ・エクシーズがあります。
更新は不定期です。

プロローグ

ｓｉｄｅ？？？

「ガッチャ！！楽しいデュエルだったぜ！！」

「「「「ワーーーーッッッッ！！！！！！！！！」」」」

先程、？フレイム・ウイングマン？の攻撃によって勝利した少年が顔面が白い教師に向かってそう言った。

［続いて１１１番、決闘場（デュエルフィールド）に上がってください］

っと俺の番か。

放送に従い俺は決闘場に上がった。

「ぬぐぐ…ワタ～シがドロップアウトボーイに負けるなんて…１１１番～で憂さ晴らしをするの～ネ」

決闘場に上がると先程の教師がぶつぶつと何かを言っていた。

……別に一軍じゃなくても良いよな？

『私達は今回はお休み？』

「まあな、使うほどでも無さそうだし」

『そう…』

『ｚｚｚ……』

話し掛けてきた少女の問いに答えるともう１人の少女が寂しげに呟いた。

最後の１人は寝ている。

しかし誰も気にしない…否、気付かない。

これで分かる通り3人は精霊だ。

「そんじゃ始めますか。受験番号１１１番、聖幻夜(ひじりげんや)だ」

「あなたのデュエルの相手をするクロノス・デ・メディチなノ～ネ」

俺が受験番号と名前を言うと教師が名乗った。

外人か？

……まあ、良いや。

「「デュエル！！」」

幻夜　ＬＰ４０００

ＶＳ

クロノス　ＬＰ４０００

「ワタ～シの先攻、ドロー！」

あ、先攻とられた…

クロノスがデッキからカードをドローするのを見て俺は思った。

「ワタ～シは？トロイホース？を召喚するノ～ネ」

トロイホース　ＡＴＫ１６００

クロノスの場に大きな木馬が現れた。

つーことはさっきのあれか？

「さら～にワタシは手札から？二重召喚(デュアルサモン)？を発動するノ～ネ。このカードの効果によってワタ～シはもう一度通常召喚が出来るノ～ネ。？トロイホース？を生け贄に？古代の機械巨人(アンティーク・ギア・ゴーレム)？を召喚するノ～ネ」

クロノスの場の木馬が消え地面から機械の巨人が現れた。
古代の機械巨人　ＡＴＫ３０００
１ターン目でこれか～…流石に教師なだけはあるか？
俺は自分の手札を見ながらそう思った。
「そしてカードを一枚セットしてターンエンドなノ～ネ」
クロノス　ＬＰ４０００　古代の機械巨人　セットカード１
ちらほらと『終わったな…』とか『不運な奴だ』とか聞こえてきた。
このデッキに関して言うなら最高の場なんだがな。
「俺のターン、ドロー！」
聞こえてきた声を無視して俺はデッキからカードをドローした。
引いたカードは……
「……勝ったかな？俺は手札からフィールド魔法？フューチャー・ヴィジョン？を発動」
俺がカードをセットすると周囲が歪み周りに青い亜空間が広がった。
そこに幾つか景色が映った『窓』が存在するフィールドを作りだした。
「そして？フォーチュンレディ・ライティー？を召喚」
俺の場に杖を持った際どい服装で黄色い髪の少女が現れた。

フォーチュンレディ・ライティー　ＡＴＫ？？？

「攻撃力が決まってない～ノ？」

「『フォーチュンレディ』と名のついたモンスターはレベルに応じて攻撃力を変化させる。ライティーの攻撃力はレベル×２００。そしてレベルは１よって攻撃力は２００だ」

フォーチュンレディ・ライティー　ＡＴＫ？？？→２００

「たかだか攻撃力２００のモンスターなん～て怖くもないノ～ネ」

ライティーの攻撃力を聞いてクロノスは笑った。

無知って哀れだよな。

「？フューチャー・ヴィジョン？の効果を発動する。召喚したモンスターを次の自分のターンまで除外する」

俺がそう言うとライティーは手を振り笑顔で窓に飛び込んでいった。

そしてライティーがいた場所に光球が残った。

「わざわざ召喚したモンスターを除外してどうするノ～ネ？これならオシリスレッドの方がまだマシなノ～ネ」

はあ…

もう一度俺は思った。

本当に無知って哀れだよな。

「ライティーの効果を発動する。このカードがフィールドから離れたとき、デッキから『フォーチュンレディ』と名のついたモンスタ

ーを特殊召喚する【光の道標―ライト・ガイド―】。来い？フォーチュンレディ・ファイリー？」

光球が大きく光を放ち俺の場に先程と同じ様な服装で赤い髪の少女が現れた。

フォーチュンレディ・ファイリー　ＡＴＫ？？？

「また、攻撃力が決まってない～ノ？」

「ファイリーの攻撃力はレベル×２００。そしてファイリーのレベルは2。よって攻撃力は2×２００で４００だ」

フォーチュンレディ・ファイリー　ＡＴＫ？？？→４００

「モンスターを除外し～テ呼び出したのがまた攻撃力の低い雑魚（ザコ）でス～ノ」

「はあ…じゃあその雑魚にやられるアンタの切り札は雑魚以下ってわけだ」

クロノスの言葉に俺は溜め息を吐きながらそう言った。

「なんでス～ト！！」

「ファイリーの効果を発動する。このカードが『フォーチュンレディ』と名のつくカードの効果で特殊召喚された時、相手モンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える。ファイリー、【劫炎の災厄―クリムゾン・ディザスター―】」

ファイリーが頭上に杖を掲（かか）げ巨大な劫火球を創り出した。

クロノスはその光景に口を開けている。

そして劫火球によって古代の機械巨人は完全に融解し破壊された。

余波によってクロノスにダメージが入る。

クロノス　ＬＰ４０００－３０００＝１０００

「ノオオオオーーーーーッッッ！？！？！？！？」

「っと手札から？サイクロン？を発動して？フューチャー・ヴィジョン？を破壊。さらに手札から？二重召喚？を発動。効果はさっきアンタが言ったよな。手札から？フォーチュンレディ・ウインディー？を召喚」

フォーチュンレディ・ウインディー　ＡＴＫ？？？

俺の場にライティーやファイリーと同じような服装で緑色の髪の少女が現れた。

「またなノ～ネ…？」

「ああ、ウインディーの攻撃力はレベル×３００。そしてレベルは３。よって攻撃力は９００」

フォーチュンレディ・ウインディー　ＡＴＫ？？？→９００

「そしてウインディーの効果を発動。このカードが召喚に成功した時、自分フィールド上に表側表示で存在する『フォーチュンレディ』と名のついたモンスターの数だけ、相手フィールド上に存在する魔法・罠カードを破壊する事ができる【破砕の烈風―クラッシング・ゲイル―】」

ウインディーが風を巻き起こしクロノスのセットカードを破壊する。セットカードは……ミラフォか、危なかった。

「マンママミーヤ！！！！！」
「さて、安心して攻撃できるな。ファイリー、ウインディーで直接（ダイレク）攻撃（トアタック）【『災（サイ）／砕』なる焔風（ほむらかぜ）―フリムウィンデ・スィナル―】」
ファイリーが炎を創り出しウインディーは風を巻き起こした。
炎と風が２人の頭上で一つになる。
クロノスは顔面を蒼白にしていた。
「あ、あが…あがが…」
そしてファイリーとウインディーは同時に杖を振り下ろした。
２人の頭上の炎風がクロノスに叩きつけられた。
クロノス　ＬＰ１０００－（４００＋９００）＝－３００
「ペペロンチーノ！！！！！」
攻撃を受けた瞬間クロノスは叫んだ。
意味不明だな。
『余裕だったね』
「まあな」
『私達以外の女の子を使った…』
『ムニャ、ムニャ…』
決闘場から降りると少女が現れ話しかけてきた。
つーかまだ寝てるのか。
「怒るなって？ルビ？。それにお前達はおいそれと使えないんだから仕方が無いだろ？」

『そうですよ』
『でも、？ラル？姉さん…』
ラルの言葉に不服そうにルビは口を尖らせた。
『たまには？エル？の様にのんびりしなさい』
「いや、これはのんびりってレベルじゃないだろ…」
寝ている少女、エルを指差しラルは言った。
と言うよりもエルが起きてるのって滅多に見ないよな。
『でも…』
『しつこいと嫌われますよ』
ルビの言葉を遮(さえぎ)りラルは言った。
本当にこいつら三姉妹は見てて面白いな。

プロローグ（後書き）

幻夜「……おい、プロローグと言っておいて実技試験じゃねえか」

竜王「大丈夫だ。次でどうして実技試験を受けることになったかを説明するつもりだから」

幻夜「本当だろうな？」

竜王「さあね～？ラル、ルビ、エルが何の精霊か分かる人いるかな？ヒントは３人共同じカードの精霊」

幻夜「まさか過ぎたもんな」

竜王「そんじゃ、遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》続きま～す」

始まりの日（前書き）

※もしもラル、ルビ、エルが何の精霊か分かっても感想に書かないでください。

始まりの日

ｓｉｄｅ聖幻夜

現在、船に揺られてデュエルアカデミアに向かっている。
届いた試験の結果が合格だったからだ。
つーか筆記試験の方は受けてないんだよな…

〜〜回想〜〜

「どこだここ？」
「ここはあの世とこの世の狭間だ」

俺の呟きにいつの間にか現れた幼女が答えた。
なんで幼女？

「お前の趣味に合わせた」
「勝手にでっち上げるな！！つーか心を読むな！！！」

幼女がさらりと嘘を言ったので俺はすかさず突っ込んだ。

「んで？なんで俺はここにいる？」
「簡単に言うと暇潰しだ」

……は？
幼女の言葉に俺は一瞬呆けてしまった。

「暇潰し？」
「そう、暇潰し」
確認のために問いかけると幼女は頷いた。
「じゃあ君は？」
「私は神様だよ」
……さ～て、どこか良い病院ってあったかな～？
幼女の言葉に俺はケータイを取り出した。
「誰が妄想癖のある痛い萌え系美幼女だ！！！」
「言ってねえし！思ってねえ！！しかも自分で？美？を付けんな！！！」
幼女が叫んだので反射的に俺は突っ込んだ。
はあ…話が進まないな。
「んで？神様（笑）が何の用だ？」
「だから暇潰しだって、君をアニメの内容に酷似した世界に送り込もうと思って♪」
……はあ！？
幼女の言葉に唖然とした。
「い・ま・す・ぐ・も・と・の・せ・か・い・に・か・え・せ！！！！！！！」
「ああ、それ無理。こっちに連れてくるのは簡単でも同じ世界を探すのに時間がかかるから」

こいつ……
軽く拷も…んん！Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆Ｓ…んん！虐めてやろうか…
「ふむ、お前は結構好みだからお前が望むなら…／／／／／」
……やべえ、変態だ。
何でこんなことに。
とりあえず無視して…
「で？俺は何のアニメに酷似した世界に行くんだ？」
「放置プレイ！？放置プレイなのか！？よし！どんとこい！！！」
諦めて俺が尋ねると何故か幼女はテンションをあげていた。
ダメだこいつ…
神様、助けてくれ。
「私が神だ♪」
「分かってるよ！コンチクショー！！！！」
幼女（神）の言葉に俺は叫んだ。
疲れる……
「疲れたなら私を抱き枕にし…」
「はい、ストップ。いい加減に答えろ。俺は何のアニメに酷似した世界に行くんだ」
幼女がこれ以上余計なことを言わないように言葉を遮って俺は尋ねた。

「むぅ…『遊戯王ＧＸ』だ」
幼女は頬を膨らませて不満そうに答えた。
遊戯王ＧＸ？
「知らないな」
俺は遊戯王をやっているが初代と５Ｄ，ｓしか見てないのだ。
ＧＸの時は融合に興味がなかったからなあ…
「知らないなら尚のこと良い。では、送るぞ」
「ちょっと待て。カードはどうするんだ」
幼女が両手を掲げるのを止めて俺は尋ねた。
「カードなら私が送っておこう。全てのカードを９枚ずつで良いか？」
「……いや、全てのカードはいらない。俺の持っているカードをそのまま持っていく」
幼女の言葉に俺は首を横に振った。
俺の言葉に幼女は驚きを隠せずにいた。
「理由を聞いても良いか？」
「ああ。全てのカードを持っていればそれだけ戦略が広がるだろう？でも何だかそれが卑怯な気がしてな。それに俺は自分のデッキを信じたい」
確かに全てのカードは魅力的だけどね…

「そうか、分かった。ではお前のカード達を送ろう。餞別にカードを入れるトランクもあげよう」
「ありがとうな。他に注意する事とかはあるのか？」
俺が尋ねると幼女は考え始めた。
「そうだな…お前の一軍、あのデッキの切り札は余りバレないようにしろ。あのカードはあっちでは神のカード並みに厄介なことになる」
「マジかよ…つーことは一軍が物凄く弱体化することに…」
幼女の言葉に俺は項垂れた。
一軍は切り札の特殊召喚を主軸に置いてるのに…
「ああ、その代わりシンクロは使えるぞ。単純に希少カードとして広まっているらしいからな」
「シンクロか…だったらまだ一軍でも戦えるのか…良かった」
少しだけホッとした。
んじゃ、行くかな。
「あ、あんたの名前は何て言うんだ？」
「私か？私はヤハウェだ」
うぇ！？
それって確かほとんどの宗教に信仰されている神の名前じゃん！？
「詳しいんだな♪」
「何故に嬉しそうなんだ？」

また、心を読んだな？

「まあ、気にするな。では送るぞ？……暇なときに話し掛けても良いか／／／／／？」

「……まあ、良いよ。んじゃ、頼む」

俺がそう言うと幼女、ヤハウェは嬉しそうに頷き空間に穴を開けた。

「場所は実技試験会場だから。あ、番号は１１１番だぞ」

「分かった。行ってくる」

そして俺は空間に開いた穴に入っていった。

結構距離があるな…

「……疲れる」

『『……』』

『ｚｚｚ……』

……いい加減に気付かないふりも難しいな。

そわそわと後ろから俺を見ている２人と眠りながら飛んでついて来ている１人。

３人とも飛んでるから人間じゃないんだろうけど…

『気付いてないのかしら？』

『いや、それは無いと思うけど…』

『ｚｚｚ……』

突っ込みてええええ！！！！！

なんで寝てるのに飛びながらついて来れるんだあああああああ

あ！！！！！

「……なあ、君等は何だ？」
『ほら、気付いてたでしょ…』
『みたいね』

じれったいので俺が質問をすると2人は前に飛んできた。
ん？
もう1人も起きたのか。

『初めまして…じゃないわね。幻夜』
『話が出来て嬉しいよ…』
『おはよ～……』

明らかに1人だけ寝ぼけてる。
初めましてじゃない？

「まさか…カードの精霊か？」
『ええ、私達は――――のカードの精霊よ』

イラストと違いすぎるだろおおおお！！！！！！！
落ち着いている感じの少女に何のカードか聞いて俺はそう思った。

「…なんで3人？」
『あなたがデッキに3枚入れてるから…』

俺の問いに声の小さな少女が静かに答えた。
まあ、切り札だし召喚しやすいようにしてあるけど…

「じゃあ、なんで見えるようになったんだ？」

『遊戯王ＧＸの世界に行くならサポートが必要だもん～……』

先程まで寝ていた少女がのんびりとした口調で答えた。

「最後の質問。３人の名前は？」

『『『――――ですよ（だよ…）（～……）？』』』

いや、それはカードの名前…

ん？

「もしかして個別の名称は無いのか？」

『『『はい（…）（～……）』』』

となると呼び難いな。

しかも３人共あっちでは神並に厄介なんだろ？

となると…

「それぞれに愛称（ニックネーム）をつけるけど良いか？」

『私は構いませんよ』

『私も…』

『良いよ～……』

俺が聞くと３人とも了承してくれた。

「じゃあ、まず君が？ラル？、次に？ルビ？、最後に？エル？だ」

『ラルですね』

『ルビ…』

『エル～……』

結構安直な愛称だけど気に入ってくれたみたいだな。

そしてしばらく歩くと光が見えてきた。

「出口か？」

『そのようですね』

俺の呟きにラルが答えた。

〜〜回想終了〜〜

「あれは驚いたよな。着いたと思ったら時間ギリギリとか」

『確かにそうですね。もう少し時間が欲しかったです』

ヤハウェが話しかけてきたら愚痴でも言ってやろう。

『エルったら…お腹出してる…』

『ムニャムニャ……』

…振り向けない！！

お腹とはいえ女性の肌は苦手だ。

ギリギリで手足が限界だな。

そしていつの間にか船はデュエルアカデミアに到着していた。

始まりの日（後書き）

フレイス様、バラランシャ様、蒼影様感想ありがとうございます。

竜王「とりあえず次辺りまでに容姿を決めておこう」

幻夜「決まって無いのか！？」

竜王「とりあえずお前は備考にツッコミ気質だな」

幻夜「嫌だなあ…」

竜王「と、まあ気にせずにゲストが来ております」

幻夜「まさか2話目でゲストが来るとは思わなかった」

竜王「蒼影様の所よりマナ、エリア、凰雅が来ました！！」

マナ「こんにちは～！！」

凰雅「無礼講すぎるだろ…」

幻夜「いや、まあ気にしないけど」

エリア「マスタ…お土産…」

凰雅「ああ、忘れるとこだった。連載開始祝いです。どうぞ」

竜王「ご丁寧にどうも。どら焼きか～♪お茶の準備をしてくるね～」

幻夜「分かった。ところでラルとルビはどうしたんだ？」

竜王「さあ？エルはずっと寝てるもんな」

マナ「くすくす…ｗｗ」

凰雅「マナ何をやって…ぶっ！？」

幻夜「エル！？」

エル『うにゅ？…くぁ～……ん～？……』↑目が覚めて顔にラクガキ（ほんのちょっと）がしてあるのに気付く

幻夜「え…エル…？」

エリア「マスタ…嫌な予感する…」

凰雅「マナの自業自得だろ」

エル『……（プッチン）』

ラル『どうかしまｓ…あら、幻夜逃げますよ』

幻夜「はい！？」

ルビ『どうしたｎ…ってヤバ！！』

マナ「あれ？もしかしてまずい事した？」↑周囲を見渡すも全員いない

エル『ッッッッ／／／／／！！！！！！！！！！！！！！』

～離れた場所～

幻夜「えっとあれはどうして？」↑上がるキノコ雲を見て呟く

ラル『そうですね…のんびりしてるけどエルも女の子なんですよ』

ルビ『そう言う事…』↑さり気なくどら焼きを持って来ている

凰雅「あれ？竜王さんは？」

エリア「…あそこ」↑キノコ雲を指差す

エリア以外「『『「え！？」』』」

幻夜「……………………えっとどら焼きありがとうございました」↑無理やりにキノコ雲を意識から外す

凰雅「どういたしまして」

ラル『しばらくしたらエルを慰めないとね？』

ルビ『ですね…』

エリア「続く……」

入寮とアンティデュエル

ｓｉｄｅ聖幻夜
長い校長の話しも終わり俺は自分の入る寮、レッド寮の前にいる。
カードはヤハウェに貰ったトランクに入れてある。
ラル、ルビ、エルはカードの中に入っている。

「ボロいな…」

レッド寮を見て俺はそう認識した。
もう、普通のアパートだな。

「お～い！！」
「ん？」

不意に向こうから手を振りながら走ってくる人影が見えた。
あいつは確か実技試験で？フレイム・ウイングマン？を使ってた奴か？

「なんだ？」
「お前も新入生だろ？俺は遊戯十代だ」
「僕は丸藤翔っす」

俺が尋ねると2人は名前を名乗った。
十代に翔だな。

「俺は聖幻夜だ。よろしく」
「聖幻夜！？もしかして実技試験で女の子のデッキを使って1キルした！？」

間違ってないが嫌な認識だな…
翔の言葉に俺は頭を抱えた。

「ああ、その聖幻夜だよ」
「確かに強かったな～よし！デュエルしようぜ！！」

俺が肯定すると十代はそう言った。
ん？
十代の後ろに飛んでいるのって？ハネクリボー？か？
ってことは十代は精霊が見える可能性があるな…

「悪いが後でだな。荷物を置いてきたい」
「そうか、分かった。また、今度デュエルしようぜ！！」

俺の言葉に十代は残念そうだったがすぐにそう言って走っていった。
元気な奴だ。
そして俺は自分の部屋に入った。

「一人部屋ってのは運が良かったな。3人共ちょっと出てきてくれ」

荷物を置き呼び掛けると3人が現れた。

『どうかしたの？』
「ああ、もしかしたら精霊が見える奴がいるかもしれない…」
『え…？』

ラルが問い掛けてきたので俺が答えるとルビは驚いた表情になった。

『それで私達を呼んだの～……？』

「まあな、カードのイラストとは違うけど気付かれるかもしれない。だからそいつ…十代の前では姿を見せないようにしてくれ」

エルの問いに俺は答えた。
用心に越したことはないからな。

『分かったわ。気を付けるね』
『分かった…』
『分かったよ～……』

3人は頷き了承してくれた。
あまり窮屈な思いはさせたくないが仕方がない…

「さて、俺はちょっとアカデミアの中を見て回るけど3人はどうする？」
『『『ついていきますよ（いく…）（いくよ～……）』』』

俺が尋ねると3人は答えた。
そっか、なら連れて行くか。
そして俺はレッド寮から出た。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ第3者視点
幻夜はデュエルアカデミアの校舎を歩いている。
もうほとんどの教室を見て回ったのか決闘場（デュエルフィールド）に向かった。

「レッドやイエローは使えないんだよ！！」
「ん？」

不意に聞こえてきた声に眉を顰（ひそ）め幻夜は部屋の中に入った。

入る直前にラル、ルビ、エルはカードの中に戻っていた。
窓から中を見て十代がいる事に気付いたからだ。

「何をしてるんだ？」
「あ、幻夜。こいつ等がここを使わせてくれないんだよ」

幻夜が問いかけると十代が答えた。
部屋の中には十代と翔、そしてオベリスクブルーの制服を着た男子生徒が２人いた。

「別に使えなくても良いんじゃねえの？」
「なんでだよ！！」

幻夜の言葉に十代は叫んだ。
ブルーの制服の２人はニヤニヤと笑みを浮かべている。

「だってよ～十代？室内でデュエルするんだぞ？つまり、この中でしかデュエル出来ないんだ。だったら唯一（ゆいいつ）デュエル出来る場所を俺達が取っちゃ駄目だろ？それに身体が弱いから顔色と同じ青い服を着ているんだ」
「なるほど…」

明らかにバカにしている幻夜の台詞にブルーの制服の２人は怒りだしていた。
十代に至っては真面目にそう思い始めたらしい。

「そんな訳あるか！！」
「そうだ！！俺達はそこまで弱くない！！」

ブルーの制服の２人はあまりにも怒りすぎて顔だけオシリスレッド

になっていた。
それを見た幻夜は隠そうともせずに笑っている。
「だったらデュエルするか？びょ・う・じゃ・く・な・ブルーさん？」
「ッ～～～～！！！！！！良いだろう！！デュエr――――」
「お前達、その辺にしておけ」
ブルーの1人がデュエルの宣言をしようとすると観戦席から声がかかった。
見ればそこには1人のブルー生が立っていた。
「「万丈目さん！！」」
万丈目と呼ばれた生徒は観戦席から決闘場へと降り幻夜と十代の近くに行った。
幻夜は万丈目を訝しげに見ていた。
「それにこいつ等はただのレッドじゃ無い。マグレとはいえクロノス教諭を倒した受験生だ」
「こいつ等がですか！？」
万丈目の言葉にブルーの2人は驚いていた。
「へへ、でもあれは偶然じゃないぜ。何だったらやってみるか？」
「マグレね…まあ、それでも良いけど。お前等はクロノスに勝てるのか？俺はノーダメージに1キルだったけど」
十代は笑みを浮かべ幻夜はため息を吐き弱者を見るかの様な眼で万丈目達を見た。

その眼には『お前達じゃダメージすら与えられないよ』といった意味も含まれているようだった。

「良いだろう。実力を見てｙ――」
「あなた達何をしているの！！」

不意に万丈目のセリフを遮ってブルーの女子生徒が現れた。

「もうすぐ寮の歓迎会が始まるはずだよ？」
「はよ行かんと料理が無くなってまうで？」

さらに続いて３人のブルーの女子生徒が現れた。

「て、天上院君！！それに高町さんに八神さん、ハラオウンさんまで！！！！」

現れた女子生徒に万丈目は明らかに動揺していた。
その間、幻夜は３人の女子生徒を見て内心驚いていた。

（何故ここに？魔法少女リリカルなのはＳｔｓ？の３人が！？）

幻夜はそれほどアニメに詳しいわけではない。
しかし、この３人の知識は幻夜の友人から叩き込まれたようなものだった。

（この３人は遊戯王にはいないはずだ！なんでいるんだ！？）

幻夜がそんなことを考えている間に万丈目を含むブルーの男子生徒３人はいなくなっていた。
どうやらブルー寮に戻ったらしい。

「ちぇっ、せっかくデュエル出来ると思ったんだけどな…」
「あら、万丈目君はブルーでもトップクラスなのよ？感謝してほしいわ」

十代が不貞腐れたように呟くと天上院が答えた。

「俺は先にレッド寮に戻っているぞ」
「あ、待っｔ――――」

歩いていく幻夜になのはが声をかけようとしたが幻夜は素早く部屋から出ていってしまった。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ聖幻夜
決闘場から戻り寮の歓迎会が済みもう寝るだけという時間になった。
さっさと寝よう…
そう思い俺が布団に入ろうとすると不意にＰＤＡが鳴った。

『こんな時間に常識知らずね』
「誰だ…？」

ＰＤＡを開きメールの差出人を見ると差出人は全く知らない奴だった。
……どうやってメールしたんだ？
俺はアドレスを教えていないぞ？
とりあえずメールを開くか。

【よお、ドロップアウト。昼間はよくも言ってくれたな。これから昼のあの場所で待つ。お互いの最高のカードを掛けてアンティデュ

エルだ。逃げても良いが逃げた場合、腰抜けと呼んでやるよ！】

メールを開くと音声となって流れた。
眠ろうとしてたのに…
……殺した方が良いのかな？

『どうする？…』
「全力を持って排除するよ…」

ルビの問いに答えて俺はデッキを手に取った。
ＯＶＥＲ　ＫＩＬＬしてやる…

「逃げずによく来たなドロップアウト！！」
「……」

昼間のブルーの男子がなにかをほざいているな…
俺が黙っているのを怖いからだと思ったのか男子は笑みを浮かべていた。

「お、幻夜！お前も呼ばれたのか？」
「ああ、眠ろうとしてたのによ…」

見れば十代が万丈目と対峙していた。
あっちもか…

「さあ、お互いに最高のカードを賭けてデュエルだ！！」
「分かったよ…」

男子がそう言ったので俺はため息を吐き答えた。

「「デュエル！！」」

幻夜　ＬＰ４０００
ＶＳ
男子生徒　ＬＰ４０００

「先攻は譲ってやるよ！」

俺が先攻か…
男子生徒の言葉に俺はデッキに手を置いた。

「……ドｒ―――」
「何をしてるの！！」

デッキからカードを引こうとしたら声を掛けられた。
誰だよ…

「た、高町さん！？それに八神さんにハラオウンさん、天上院さんまで！！」

振り向くとそこにはブルーの女子４人が立っていた。
何でいるんだ？

「万丈目君にメールを貰ったから来てみたら…相手にしないように言ったはずだけど？」
「知らん、つーかお前らには関係無い」

俺がそう言うと天上院の額に怒りマークが見えた気がした。
無視だ無視。

「俺のターン、ドロー」
引いたカードは…
微妙かな？
「モンスターとカードをセットしてターンエンド」
幻夜　セットモンスター　セットカード１
「なんだよ何も出来ないのか？はっ！これだからオシリスレッドは！俺のターン、ドロー！」
男子生徒は引いたカードを見て笑みを浮かべた。
さて、なんのデッキかな？
「俺は？ジャイアント・オーク？を召喚！」
男子生徒の場に骨の棍棒を持った巨人が現れた。
ジャイアント・オーク　ＡＴＫ２２００
となると…
候補１、悪魔デッキ。
候補２、低レベルの高攻撃力モンスターデッキ。
候補３、デッキに関係無い引っ掛けのモンスター。
のどれか、か。
「俺は？ジャイアント・オーク？でセットモンスターを攻撃！！」
？ジャイアント・オーク？が俺のセットモンスターを攻撃した。

「俺のセットモンスターは？レプティレス・ナージャ？。このモンスターは戦闘では破壊されない」
「何！？」
レプティレス・ナージャ　ＤＥＦ０
俺の場に下半身が蛇の金髪の美少女が現れた。
「？レプティレス・ナージャ？の効果を発動。このモンスターと戦闘を行ったモンスターはバトルフェイズ終了時に攻撃力が０になる。行け【甘い毒―スウィート・ポイズン―】」
俺がそう言うとナージャは？ジャイアント・オーク？に噛み付いた。
ジャイアント・オーク　ＡＴＫ２２００→０
……どうやら不味かったらしいな。
噛み付いた後、舌を出しているナージャを見て俺は思った。
「？ジャイアント・オーク？はバトルフェイズ終了時に守備表示になる。俺はこれでターンエンドだ！」
ジャイアント・オーク　ＡＴＫ→ＤＥＦ
男子生徒　ジャイアント・オーク
「俺のターン、ドロー」
俺はデッキからカードを引いた。

「?切り込み隊長?を召喚。更に効果でレベル４以下のモンスター?デブリ・ドラゴン?を特殊召喚」

俺の場に二本の剣を持った戦士と白いドラゴンが現れた。

切り込み隊長　ＡＴＫ１２００

デブリ・ドラゴン　ＡＴＫ１０００

「レベル１?レプティレス・ナージャ?とレベル３?切り込み隊長?にレベル４?デブリ・ドラゴン?をチューニング！集いし願いが新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、?スターダスト・ドラゴン?！」

「「「「し、シンクロモンスター！?」」」」

俺の場に光輝く星の竜が現れた。

スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

?スターダスト・ドラゴン?を見て全員驚いていた。

「まさかシンクロモンスターが出てくるとはな…まあ、良い。俺が勝ったらそのモンスターを頂く！！」

「勝てるならな。?スターダスト・ドラゴン?で?ジャイアント・オーク?を攻撃！【シューティング・ソニック】！」

スターダストの口からブレスが放たれた。

?ジャイアント・オーク?はあっさりと破壊された。

「ちいっ！！」
「俺はこれでターンエンド」
幻夜　スターダスト・ドラゴン　セットカード１
「俺のターン、ドロー！」
男子生徒はデッキからカードを引いた。
「俺は？ゴブリン突撃部隊？を召喚！」
男子生徒の場に武装した数人のゴブリンが現れた。
ゴブリン突撃部隊　ＡＴＫ２３００
うん、決まった。
こいつのデッキは低レベルの高攻撃力モンスターデッキだ。
「俺は装備魔法？デーモンの斧？を？ゴブリン突撃部隊？に装備！！」
ゴブリン突撃部隊　ＡＴＫ２３００→３３００
「お前のモンスターの攻撃力を上回ったぞ！？ゴブリン突撃部隊？ｄ――」
「させるか！罠カード発動！？威嚇する咆哮？！！」
凄まじい咆哮にゴブリン達は怯み動けなくなった。
「ちっ！俺はこれでターンエンドだ！！」

男子生徒は忌々しげにエンド宣言をした。
男子生徒　ゴブリン突撃部隊　デーモンの斧
「俺のターン、ドロー」
手札は４枚か…
とりあえずはこれしかないかな？
「カードを2枚セットしてターンエンド」
幻夜　スターダスト・ドラゴン　セットカード2
「何も出来ないのか？やっぱりダメダメなんだな！ドロー！」
男子生徒はそう言いながらデッキからカードを引いた。
「？ゴブリン突撃部隊？で攻撃！！」
男子生徒は俺の場のセットカードを気にせずに攻撃してきた。
アホなのか？
「罠カード発動。？魔法（マジック・シリンダー）の筒？」
俺の場に2つの筒が現れた。
ゴブリン達が筒の中に入っていくともう片方の筒から出てきて男子生徒を殴った。
「何！？ぐあっ！！！」

男子生徒　ＬＰ４０００－３３００＝７００

「くっ…俺はこれでターンエンドだ！」

男子生徒　ゴブリン突撃部隊　デーモンの斧

「俺のターン、ドロー」

ＯＶＥＲ　ＫＩＬＬするためにはまだかかるな…

「手札から?攻撃封じ?を発動。対象は?ゴブリン突撃部隊?」

ゴブリン達は武器を捨て何やら飲み物を飲み始めた。

ゴブリン突撃部隊　ＡＴＫ↓ＤＥＦ

「?スターダスト・ドラゴン?で攻撃！【シューティング・ソニック】」

?スターダスト・ドラゴン?の攻撃により?ゴブリン突撃部隊?は破壊された。

「カードを2枚セットしてターンエンド」

幻夜　スターダスト・ドラゴン　セットカード3

「俺のターン！ドロー！くっ…俺は?ブラッド・ヴォルス?を守備表示で召喚。カードを2枚セットしてターンエンドだ」

ブラッド・ヴォルス　ＤＥＦ１２００
男子生徒は引いたカードを見て悔しげにモンスターを召喚した。
大方、破壊用のカードが引けなかったんだろうな。
男子生徒　ブラッドヴォルス　セットカード２

「俺のターン、ドロー」

これで手札は１枚か…
手札の補充をしないとな。
ちょうど良いカードも来たし。

「俺は？ゴブリンのやりくり上手？を３枚発動。それにチェーンして手札から？非常食？を発動！このカード以外の自分フィールド上に存在する魔法・罠カードを任意の枚数墓地へ送って発動、墓地へ送ったカード１枚につき、自分は１０００ライフポイント回復する。俺が墓地に送るのは３枚の？ゴブリンのやりくり上手？。よってライフを３０００回復する」

幻夜　ＬＰ４０００＋３０００＝７０００

「さらに、チェーンされた？ゴブリンのやりくり上手？の効果！？ゴブリンのやりくり上手？はデッキからカードを１枚ドローし手札から１枚を選択しデッキの一番下に戻す、また自分の墓地にこのカードと同名のカードが存在する場合、さらにその枚数分デッキからドローする。？非常食？で？ゴブリンのやりくり上手？を全て墓地に送ったことにより、墓地に存在する？ゴブリンのやりくり上手？は３枚。よって追加で３枚ドローできる。つまり、？ゴブリンのやりくり上手？１枚で４枚ドローし手札から１枚を選択しデッキの一

番下に戻す。ドロー」

幻夜　手札０→３

「さらにもう一度ドロー」

「まて！なんでまだドローできる！！」

俺がもう一度ドローしようとしたら男子生徒が遮った。

知らないのか？

「さっきのは１枚目の？ゴブリンのやりくり上手？の効果だ。まだ後２枚残っているんだよ」

「なん……だと……」

驚く男子生徒を無視し俺はデッキから４枚ドローし手札を１枚デッキの一番下に戻した。

幻夜　３→６

「そしてもう一度ドロー」

幻夜　手札６→９

流石に多いな。

まあ、良いか…

「俺は手札から？二重召喚（デュアルサモン）？を発動。？仮面竜（マスクド・ドラゴン）？と？デブリ・ドラゴン？を召喚。？デブリ・ドラゴン？の効果を発動。自分の墓地の攻撃力５００以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚する。？レプティレス・ナージャ？を特殊召喚」

俺の場に仮面を着けた竜と先ほどの竜、さらに少女が現れた。
「レベル１？レプティレス・ナージャ？とレベル３？仮面竜？にレベル４？デブリ・ドラゴン？をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、？レッド・デーモンズ・ドラゴン？！」
俺の場に赤い悪魔を連想させる竜が現れた。
レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
「攻撃力３０００のシンクロモンスターだと！？」
？レッド・デーモンズ・ドラゴン？を見て男子生徒は驚いていた。
そこまで驚くことか？
「？スターダスト・ドラゴン？で？ブラッド・ヴォルス？に攻撃！【シューティング・ソニック】！」
「甘い！罠カード発動！？亜空間物質転送装置？！！」
？スターダスト・ドラゴン？の攻撃は何もない空間に当たった。
だったら…
「レッド・デーモンズで攻撃！【アブソリュート・パワーフォース】！」
「なら？和睦の使者？を発動！！」
男子生徒の前に修道女のような姿の女性が現れ攻撃を防いだ。
スターダストは攻撃したから破壊されないな…
「俺は手札の？バスター・ビースト？の効果を発動。手札のこのカ

ードを墓地に送りデッキから?バスター・モード?を手札に加える」
「?バスター・モード??」
ハラオウンが頭上にハテナマークを作りながら呟いた。
知らないのか。
「カードを4枚セットしてターンエンド」
幻夜　スターダスト・ドラゴン　レッド・デーモンズ・ドラゴン
セットカード4
「俺のターン、ドロー!俺は?死者への手向け?を発動!対象は?
レッド・デーモンズ・ドラゴン?!!」
男子生徒がデッキからカードをドローし魔法カードを発動した。
レッド・デーモンズの周囲に黒い靄が現れる。
させない。
「スターダストの効果を発動。【ヴィクティム・サンクチュアリ】」
スターダストが一際明るく輝くと黒い靄とスターダストが場から消えた。
「何をした!?」
「?スターダスト・ドラゴン?は自身を生贄に捧げることで「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する」
俺の説明を聞き男子生徒は笑みを浮かべていった。
どうせ、モンスターが減らせたとか思ってるんだろうな。

「俺は？ブラッド・ヴォルス？を生贄に捧げ？邪帝ガイウス？を召喚！！」

？ブラッド・ヴォルス？が闇に呑まれ闇色の鎧を着た人が現れた。

邪帝ガイウス　ＡＴＫ２４００

ある意味で予想通りのモンスターか。

「？邪帝ガイウス？の効果を発動！このカードの生け贄召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード１枚を除外する！！？レッド・デーモンズ・ドラゴン？を除外！」

「甘い、罠カード発動。？天罰？。手札を１枚捨てて、効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する」

黒い球体を創っていたガイウスに雷があたり破壊された。

まだまだ…

「カウンター罠でカードの発動を無効化したことにより手札から？冥王竜ヴァンダルギオン？を特殊召喚」

俺の場に紫色の竜が現れた。

冥王竜ヴァンダルギオン　ＡＴＫ２８００

「無効にしたカードは効果モンスター、よって墓地からモンスターを１体特殊召喚する。【冥界流転―リバース・ハデス―】。蘇れ、？ネフティスの鳳凰神？」

ヴァンダルが地面を殴り地割れを起こすとそこから焔の鳥が現れた。
ネフティスの鳳凰神　ＡＴＫ２４００
「あ、相手ターンでここまで展開するんか！？」
「凄い…」
八神とハラオウンが驚き呟いた。
俺も手札が良すぎて驚いてるけどよ。
「お、俺はカードをセットしてターンエンド！！」
「エンドフェイズ時にスターダストの効果を発動。このカードが自身の効果で墓地に送られた時、エンドフェイズに自分の場に特殊召喚する」
スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００
男子生徒　セットカード１
「俺のターン、ドロー」
充分かな。
さっさと終わらせよう。
「俺は手札から？サイクロン？を発動。セットカードを破壊」
「何！？」
風が起こり男子生徒の場のセットカードを破壊した。
？魔法の筒？か…

「スターダスト、レッド・デーモンズ、ヴァンダル、ネフティスで直接攻撃(ダイレクトアタック)。【シューティング・ソニック】【アブソリュート・パワーフォース】【冥王葬送】【クリムゾン・フェングウィング】」

「うわあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

３体のドラゴンと１体の鳳凰による攻撃が放たれた。

男子生徒　ＬＰ７００－２５００－３０００－２８００－２４００＝－１０００

ライフが余裕でＯＶＥＲ　ＫＩＬＬだな。

だが…

「まだ俺のバトルフェイズは終了して無いぜ！！！罠カード発動！？バスター・モード？！自分フィールド上に存在するシンクロモンスター１体を生贄に捧げて発動する！生贄に捧げたシンクロモンスターのカード名が含まれる「／バスター」と名のついたモンスター１体を自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する！俺は？レッド・デーモンズ・ドラゴン？を生贄に捧げる！！」

俺の場のレッド・デーモンズが消え焔が巻き起こった。

「現れろ！？レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター？！！」

俺の場に鎧を装備したレッド・デーモンズが現れた。

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター　ＡＴＫ３５００

「さらにもう１枚！？バスター・モード？！？スターダスト・ドラ

ゴン？を生贄に捧げる！！」

スターダストが消え旋風が巻き起こった。

「現れろ！？スターダスト・ドラゴン／バスター？！！」

鎧を装備したスターダストが現れた。

スターダスト・ドラゴン／バスター　ＡＴＫ３０００

「レッド・デーモンズ／バスター、スターダスト／バスターで直接攻撃！【エクストリーム・クリムゾン・フォース】【アサルト・ソニック・バーン】！！」

「うぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

２体の竜が攻撃を放った。

男子生徒　ＬＰ－１００００－３５００－３０００＝－１６５００

「レッド・デーモンズ／バスターの効果を発動！このカードが攻撃した場合、ダメージ計算後にこのカード以外のモンスターを全て破壊する！【クリムゾン・ジ・エンド】」

レッド・デーモンズ／バスターが爆煙を巻き起こし他のモンスターを破壊した。

さらに行くぜ！！

「スターダスト／バスターの効果を発動！フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の墓地に存在する？スターダスト・

ドラゴン?1体を特殊召喚する事ができる!!」
俺の場に再び光輝く星の竜が現れた。
スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００
「そして罠カード発動!?デストラクトポーション?!自分の場のモンスター1体を破壊して攻撃力分ライフを回復する!俺は?レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター?を選択!」
幻夜　ＬＰ７０００＋３５００＝１０５００
「さらにレッド・デーモンズ／バスターの効果を発動!フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の墓地に存在する?レッド・デーモンズ・ドラゴン?1体を特殊召喚する事ができる!!」
再び俺の場に赤い悪魔を連想させる竜が現れた。
レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
「と、とっくに相手のライフは0なのに…」
「戦いたくないわね…」
高町と天上院が呟いた。
知るか、俺が眠ろうとしたのを邪魔した罰だ。
「スターダスト、レッド・デーモンズで直接攻撃!【シューティング・ソニック】【アブソリュート・パワーフォース】!!」
「ぎゃあああああああああああああああああああああ!!!!!

！！！！！！！！」

男子生徒　ＬＰ－１６５００－２５００－３０００＝－２２０００

ふぅ…

少しはスッとしたかな♪

「さ～て、さっさと帰って寝よう」

俺は膝をつき項垂れている男子生徒を尻目に呟いた。

そういえば十代は…

「大変！！警備員が来るよ！！！」

「ちっ！まあ、良い。やっぱり試験でクロノス教諭に勝ったのはマグレだったみたいだな！」

高町の言葉に万丈目はそう言って走っていった。

そして俺達も急いでその場を離れた。

「どうだった？ブルーの洗礼を受けて」

「弱い」

天上院の問いに俺は一言で答えた。

その答えにブルーの４人は苦笑いを浮かべた。

「それにしても運が良かったね。あのままじゃ負けてたでしょ？」

高町が十代に言った。

すると十代は笑みを浮かべ首を横に振った。

「いいや、俺の勝ちだったぜ」

そう言って十代が見せたのは？死者蘇生？のカードだった。

「これで？フレイム・ウイングマン？を特殊召喚して俺の勝ちだ」

自信満々に十代は言った。

「十代、？フレイム・ウイングマン？は？融合？でしか特殊召喚出来ないぞ…」

「え゛ー！？マジで！？」

十代は俺の言葉に驚きカードテキストを見た。

すると十代の顔に落胆の色が少しだけうつった。

「次からは気を付けろよ？んじゃ、お休み」

「おう！お休み！！」

俺はそう言ってレッド寮に戻った。

そういえば天上院とかに名乗ってないな…

まあ、良いか。

そして俺は自分の部屋に着き布団に入り眠った。

入寮とアンティデュエル（後書き）

ユタ様、バラランシャ様、空刀様、戎鴛様感想ありがとうございます。

竜王「だいぶ長くなった」

幻夜「合計で２２０００のオーバーキルか」

竜王「実際に起こせるランクだよな」

「こんにちは！」

竜王「あ、空刀様のところより空刀聖夜さんが来ました」

空刀聖夜「どうも」

幻夜「というか2連続でゲストが来たよ」

竜王「いやいや、？闇狩り？でもそれくらいの頻度だぞ？」

空刀聖夜「確かにほとんどの話にゲストがいるな」

幻夜「え～…」

竜王「さて、締めるか」

幻夜「今回は俺が言う。？遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》？続くぞ」

主人公と精霊、神の設定

主人公

名前：聖（ひじり）　幻夜（げんや）

年齢：１５才

容姿：黒髪に所々に金髪が混じっている。見た目は中肉中背。

性格：基本的には他人に対して無関心を装う。仲が良くなれば手助けなどをする。

好きな物：遊戯王カード、友達、体を鍛えること。

嫌いな物：カードを馬鹿にする奴。

特技：冥凶流　（武術）

口癖：「Ｙｏｕ（あなたが）　ｈａｖｅ（コンティニュー出来）　ｎｏｔ（ないのさ）　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……」

「無知って哀れだよな…」

使用するデッキ：フォーチュンデッキ以外にも複数所持。一軍は滅多なことでは使えない。

備考：幼女（神）の暇つぶしに『遊戯王ＧＸ』の世界に送られた。ツッコミ気質。異性が苦手。眠い時は機嫌が悪く口調が悪くなる。基本的に男子生徒は名前、女子生徒は名字で呼ぶ。

精霊

名前：ラル

年齢：不明

容姿：蒼い髪で髪型は腰に届くくらいのロング。瞳の色は緋色。出るとこ出て絞まる所は絞まっている。

性格：優しいお姉さん。

好きな物：幻夜の寝顔。

嫌いな物：虫。

特技：料理　（幻夜が教えている）

口癖：『あらあら？』

備考：ルビ、エルの姉。

名前：ルビ

年齢：不明

容姿：蒼い髪で髪型は肩に届くくらいのロング。瞳の色は緋色。3
人の中で平均的な体型。
性格：優しく物静か。
好きな物：本、幻夜。
嫌いな物：五月蝿い物。
特技：本の内容を記憶する。
口癖：語尾が『――…』になる。
備考：ラルの妹、エルの姉。

名前：エル
年齢：不明
容姿：蒼い髪で髪型はウェーブのかかったロング。瞳の色は緋色。
一言で言ってツルペタ。
性格：のんびり屋だが女の子らしい一面もある。
好きな物：お昼寝、幻夜と一緒に寝ること。
嫌いな物：寝るのを邪魔するモノ　（目覚まし時計など）

特技：早寝。

口癖：語尾が『――～……』になる。

備考：ラル、ルビの妹。

神

名前：ヤハウェ

年齢：不明

容姿：金髪碧眼。

性格：優しい変態。

好きな物：苛められること、暇潰し。

嫌いな物：退屈

特技：ソフトクリームを舐めて色々な形にする

口癖：「私が神だ♪」

備考：幻夜を殺して『遊戯王ＧＸ』に送った張本人。何故か物事を変態的に考える癖がある。「黙っていれば美少女だろうに…」（b

y幻夜）

主人公と精霊、神の設定（後書き）

戎鴛様、銃王　海さん感想ありがとうございます。

竜王「今回はキャラ紹介！」

幻夜「やっとか…」

ルビ『……』

エル『ジト〜〜……』

竜王「え？ふんふん…あ〜…ちょっと無理かな」

ルビ・エル『『はぁ…（〜……）』』

ラル『あらあら？』

「うわあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

竜王「おっと、銃王　海さんの所より木下優子、岩沢まさみ、平沢憂、平賀才人、坂井悠二、アイク、御坂美琴、高町恭也、折原空、山田麻耶、鳴海まどかが落ちてきました」

幻夜「俺の上ええええええ！？」

ラル『駄目ですよ』

ルビ『守るよ…』

エル『八つ当たり～……』

優子「助かったわ。ありがとう」←ラルにキャッチされて地面に下ろしてもらった

才人「へぶ！？な、なんで…」ルビの創った盾にぶつかり地面に降りた

ルビ『嫌な予感がした…』

雄二「ちょ！？うわ！？」←エルの攻撃を腕を交差して防ぎ地面に降りた

憂「ふう…ありがとうございます」←ラルにキャッチしてもらった

美琴「助かったわ。ありがとう」←ルビの創った盾の上に着地し地面に降りた

アイク「負けるかあああ！！！！！」←何故かエルとバトル中

麻耶「あ、ありがとうございます……ひっ！？」←ラルに礼を言うがエルの殺気に怯む

エル『（胸が）ずるい～……』

恭也「助かったかな」←ルビの盾に着地後地面に降りた

まどか「た、助かったのよね？」←ラルにキャッチされた

空「た、助かりました」←ラルにキャッチされた

幻夜「凄い量が来たな」

竜王「つーかエルが攻撃してたけどな…」

エル『八つ当たりだから問題無し～……』

ラル『あらあら？八つ当たりは駄目だと思うわよ？』

ルビ『ラル姉さんの言うとおりです…』

竜王「そう言えば音楽が出来るのが2人いたな。頼む」

まさみ「私は良いよ」

憂「え？私ですか？」

真耶「あ、あの…怖いんですが…」

エル『気のせい～……』

竜王「おいおい…遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》続きます。さあ音楽を頼んだ！！」

まさみ「分かった！」

美琴「ゲリラライブ？」

誘拐と全力全開

ｓｉｄｅ聖幻夜

「あ゛〜…めんどくさかった」

「そうか？俺は楽しかったけど」

体育の授業が終わり俺は言った。

俺の言葉に十代が答えた。

「めんどくさかった理由の一つは昨日寝るのが遅くなって眠いからだ」

「ああ、呼び出されたからだな？」

俺の言葉を聞き十代は納得がいったようだ。

実際寝たのが１２時半を過ぎてたからなあ…

「くぁ…」

「眠そうやな？」

着替え終わり俺が欠伸をすると関西弁が聞こえた。

横を見れば八神が立っていた。

「まあな…何か用か？」

「いや、ただ欠伸しとったから気になっただけや」

俺の問いに八神は軽く笑い答えた。

っとそう言えば…

「翔はどこに行ったんだ？」

「翔？翔ならさっきどこかに行ってたぞ。まあ、今日の授業は終わりだし気にしなくても良いんじゃないか？」
周囲を見渡し尋ねると十代が答えた。
ふ～ん、まあ良いか。

「じゃあ俺も部屋に戻るかな。デッキの調整をしたいし」
「そっか、ほなな～」
「おう、レッド寮でな」

そう言って俺が立ちあがると八神と十代が答えた。
新しいコンボでも考えるか…
そして俺は寮へと戻った。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ第３者視点
時刻は１０時半、レッド寮の自室で幻夜はデッキの調整を行っていた。
幻夜はデッキを複数所持している。
故に調整するデッキは気分で選んでいるのだ。
不意に幻夜のＰＤＡが鳴った。

『またこんな時間…？』
「みたいだな」

ルビの言葉に答えながら幻夜はＰＤＡを開きメールを開いた。

【丸藤翔ハ預カッタ。帰シテ欲シケレバ《オベリスクブルー》ノ女子寮マデ来ラレタシ。タダシ、来ルノハ遊戯十代、聖幻夜ノ二名ノミトスル】

……なんで片言なのか？
幻夜はメールの内容よりもそこが気になったのか首を傾げた。
『どうしましょう？』
「つーか何で俺？」
ラルの言葉に幻夜は疑問を誰にともせずに呟いた。
すると部屋のドアが叩かれた。
おそらく十代だろう…
幻夜は3人に視線で合図を送りカードの中に入ってもらった。
「幻夜！お前の所にもメールが来ただろ！！」
「ああ、行くのか？」
慌てた様子で十代が尋ねてきた。
「もちろんだ！ほら、幻夜も行くぞ！！」
「分かった、分かったからデッキを持たせろ。カードを片付けたい」
幻夜は服を引っ張る十代を落ち着かせてそう言った。
軽く伸びた服を見て幻夜はため息を吐いた。
「これでよし、っと。じゃあ行くか」
「おう！！」
幻夜はカードを全てトランクにしまい十代に言った。
そして2人はボート乗り場に行った。
「にしてもボートか…」

「ほら、幻夜も漕げよ」

めんどくさいと言った風に呟く幻夜に十代が言った。
行きは幻夜、帰りは十代が漕ぐらしい。

「やっと来たわね」
「あれ？明日香か？」

声が聞こえた方を見て十代が呟いた。
そこには明日香、なのは、フェイト、はやて、ブルーの制服を着た女子生徒２人の計６人がいた。

「んで？何の用だよ」
「にゃはは…実は丸藤君が覗きをｓ――――」
「僕は無実っす！！」

幻夜が尋ねなのはが答えていると言葉を遮り翔が叫んだ。

「……翔、犯罪行為をｓ――――」
「だから僕は無実っす！！！僕は手紙で呼び出されただけっす！！」

幻夜が翔に向かって言うと再び翔は言葉を遮り叫んだ。

「だがｇ――――」
「幻夜君いい加減僕でも怒るっすよ！！」

再度幻夜が口を開いたが翔がすぐさま遮った。
若干語気が強くなっている。

「……良いかしら？そう言うわけで彼をただで帰すわけにはいか

ないのよ。だから彼を賭けてデュエルしましょう。私達が勝ったら彼をアカデミアに報告するわ、あなた達が勝ったら彼を帰して報告もしない。良いわね」

翔と幻夜の会話が途切れるのを待っていたのか明日香が言った。

「俺はそれで良いぜ！」

「…めんどくさいけど仕方がない」

明日香の出した条件に十代は元気に、幻夜は嫌そうに答えた。

「それじゃあ最初は十代！私とデュエルよ！！」

「おう！！」

明日香の言葉に十代は大きく返事をした。

――――――原作と変わらない内容のため飛ばします――――――

「サンダージャイアントで止めだ！！」

サンダージャイアントが両手をかざし明日香に電撃を放った。

そして明日香のライフは０になった。

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！！」

明日香に向かって十代はそう宣言した。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ聖幻夜

おお、勝ったよ十代の奴。
勝利宣言をした十代を見て俺は思った。
全員がボートに乗るのは危ないからデュエルをする2人だけがボートに乗っていた。

「くぅ…明日香さんが負けるなんて…」
「ところで…誰が俺とデュエルするんだ？」

悔しげに枕田―（十代と天上院のデュエル中に2人の名前を聞いた）―が呟いた。
そこで俺は疑問を口にした。

「「「「「「あ……」」」」」」
「忘れてたのかよ！？」

俺の疑問を聞き女子全員が思い出したかのような表情をした。
ああもう…

「めんどくさい…5人の中から1人をさっさと選べ」
「どうして幻夜さんが仕切ってるのよ！」

俺が言うと枕田が叫んだ。

「私がやるよ！！」

そう言いながら手を上げ立候補したのは高町だった。
どんなデッキだ？

「分かった」
「負けないの！」

天上院と十代が戻ってきたので俺は十代の乗っていたボートに、高町は天上院の乗っていたボートにそれぞれ乗った。

「さて…改めて、オシリスレッド一年、聖幻夜、推して参る！」

「じゃあ私も…オベリスクブルー一年、高町なのは、全力全開で行かせてもらうの！」

「「デュエル！！」」

幻夜　ＬＰ４０００
ＶＳ
なのは　ＬＰ４０００

「俺の先攻、ドロー」

俺はデッキからカードを１枚引いた。
初手としては充分に良いかな。

「俺は？ハーピィ・ガール？を召喚」

俺がカードをセットすると俺の場に翼を生やした少女が現れた。

ハーピィ・ガール　ＡＴＫ５００

「そしてカードを２枚セットしてターンエンド」

幻夜　ハーピィ・ガール　セットカード２

「私のターン、ドロー！」

高町はデッキからカードを1枚引いた。
さて、何が出てくる？

「……私は？神獣王バルバロス？を召喚するの！」
「レベル8のモンスターが生け贄無しで！？」

高町の場に槍と盾を持った獣が現れた。
すると翔が驚き叫んだ。
知らないのかよ…

神獣王バルバロス　ＡＴＫ３０００

「バルバロスは生け贄無しで召喚した場合、攻撃力は１９００になるの！」

神獣王バルバロス　ＡＴＫ３０００→１９００

この時点で候補は……
ビートダウンデッキか？

「バルバロスで？ハーピィ・ガール？を攻撃！【トルネード・シェイパー】！！」
「残念、俺はガールを生け贄に捧げて？風霊術（ふうれいじゅつ）―「雅（みやび）」？を発動」

俺の場の？ハーピィ・ガール？が消え旋風が巻き起こった。
旋風に飲み込まれバルバロスは消えた。

「？風霊術―「雅」？の効果によってバルバロスを持ち主のデッキの一番下に戻す」
「そんな！！」

なのはは驚愕の表情をした。
まあ、出したモンスターを戻されたら嫌だよな。
「わ、私はカードを3枚セットしてターンエンドなの！」
なのは　セットカード3
「俺のターン、ドロー」
さて、もしかすると『あの』カードを使ってくるかな？
「俺は？ロードランナー？を召喚」
俺の場に靴を履いた桃色の小鳥が現れた。
ロードランナー　ＡＴＫ３００
「「「「「か、可愛い！！」」」」」
ランナーを見て明日香以外の女子が大きな声を出した。
まあ、分かるけど…
「カードをセットしてターンエンド」
幻夜　ロードランナー　セットカード2
必要なキーカードはあと1枚だな。
「私のターン、ドロー！」

高町はデッキからカードを１枚引いた。
「もう一度？神獣王バルバロス？を召喚！」
神獣王バルバロス　ＡＴＫ３０００
高町の場に再び槍と盾を持った獣が現れた。
「またっすか！？」
「でも生け贄無しで召喚したから、攻撃力は１９００になるの」
神獣王バルバロス　ＡＴＫ３０００→１９００
「バルバロスでその鳥さんに……こ、攻撃なの！【トルネード・シェイパー】！！」
高町は躊躇いがちに攻撃宣言をした。
バルバロスがランナーに槍を向けた。
槍がランナーにぶつかり煙が起こった。
「ううう…鳥さんが…」
「何を言っているんだ？ランナーは倒されていないぞ？」
煙が晴れ俺の場のカードが現れた。
ランナーは無事残っている。
「え！？どうして！？それにダメージも無い！？」
「？ロードランナー？は攻撃力が１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。さらに俺は？ガードブロック？を発動してお

いた。これで戦闘ダメージは0、さらに効果で1枚ドロー」
そう言って俺はデッキからカードを1枚引いた。
まあまあか…
「私はこれでターンエンドなの」
なのは　神獣王バルバロス　セットカード3
「俺のターン、ドロー」
やっと来たか。
3枚入れているのに初手に来なかったのは辛かったな。
「俺は手札から?スライム増殖炉?を発動」
俺がカードをセットすると俺の後ろに巨大な機械が現れた。
「「「「「「?スライム増殖炉??」」」」」」
あ〜…
まあ、古いカードだからあまり知らないか。
「俺はカードをセットしてターンエンド」
幻夜　ロードランナー　スライム増殖炉　セットカード2
「私のターン、ドロー!」
高町はデッキからカードを1枚引いた。

「バルバロスだと破壊出来ないから…？可変機獣ガンナードラゴン？を召喚！」

高町の場に機械の竜が現れた。

可変機獣ガンナードラゴンＡＴＫ２８００

「今度はレベル７っすか！？」

「ただしこのカードは生け贄無しで召喚した場合、攻撃力は半分になるの！」

可変機獣ガンナードラゴンＡＴＫ２８００→１４００

「ガンナードラゴンで攻撃なの！【ドラゴンバレット】！！」

ガンナードラゴンは銃口をランナーに向けた。

させないよ。

「罠カード発動？グラヴィティバインド―超重力の網―？！」

緑色の網に捕らわれガンナードラゴンとバルバロスは動けなくなった。

「くぅ…私はこれでターンエンドなの」

なのは　神獣王バルバロス　可変機獣ガンナードラゴン　セットカード３

「俺のターン、ドロー」

俺はデッキからカードを１枚引いた。
これで手札は３枚っと。
「スタンバイフェイズにスライムトークンを特殊召喚」
スライムトークン　ＡＴＫ５００
俺の背後の機械からスライムトークンが排出された。
「俺はランナーを守備表示にしてターンエンドだ」
ロードランナー　ＡＴＫ↓ＤＥＦ
幻夜　ロードランナー　スライムトークン　スライム増殖炉　グラヴィティバインド―超重力の網―　セットカード１
「私のターン、ドロー！」
高町はデッキからカードを１枚引いた。
高町の手札はこれで３枚。
「ううう…私はライフを１０００支払い罠カードを発動するの！？スキルドレイン？！」
なのは　ＬＰ４０００－１０００＝３０００
神獣王バルバロス　ＡＴＫ１９００↓３０００
可変機獣ガンナードラゴンＡＴＫ１４００↓２８００

やっぱり入ってたかぁ…

「え！？なんで攻撃力が戻ったんすか！？」

「バルバロスとガンナードラゴンはどちらも自分の効果で攻撃力が下がっていた。効果を無効にされて攻撃力が戻ったんだよ」

翔が大きな声で叫んだので俺は教えた。

つーか距離が少しあるからめんどくさい。

「私のデッキじゃ相性が悪すぎるよ……ターンエンド」

なのは　神獣王バルバロス　可変機獣ガンナードラゴン　スキルドレイン　セットカード２

「俺のターン、ドロー」

俺はデッキからカードを１枚引いた。

「スタンバイフェイズにスライムトークンを特殊召喚」

スライムトークン　ＡＴＫ５００

再び俺の背後の機械からスライムトークンが排出された。

「俺は手札から？団結の力？と？下克上の首飾り？をそれぞれスライムトークンに装備」

スライムトークンＡ　ＡＴＫ５００→２９００　団結の力装備

スライムトークンＢ　ＡＴＫ５００　下克上の首飾り装備

「スライムトークンＡでガンナードラゴンを攻撃。【リキッド・レイン】」

スライムトークンは大きく飛び上がるとガンナードラゴンに向けて大量の水飛沫を浴びせた。

するとガンナードラゴンは錆び付いていき爆発した。

「きゃあああああああああああ！！！！！！！！」

なのは　ＬＰ３０００－１００＝２９００

セットカードを発動しない？

ブラフか？

「スライムトークンＢでバルバロスを攻撃。【グリード・グラトニー】」

「攻撃力の低いスライムトークンで！？」

このカードの効果も知らないのか。

「？下克上の首飾り？の効果を発動。装備モンスターよりレベルの高いモンスターと戦闘する場合、装備モンスターの攻撃力はレベル差×５００ポイントアップする」

スライムトークンＢ　ＡＴＫ５００→４０００

スライムトークンはバルバロスに張り付くとその体を巨大化させバルバロスを呑み込んだ。

スライムトークンの体内(なか)でバルバロスは徐々に溶けていき爆発した。

「グロッ！？」

「気持ち悪い……」

俺と高町はそれぞれ率直な感想を言った。

なのは　ＬＰ２９００－１０００＝１９００

「俺はこれでターンエンド」

幻夜　ロードランナー　スライムトークンＡ　スライムトークンＢ　スライム増殖炉　グラヴィティバインド―超重力の網―　団結の力　下克上の首飾り　セットカード１

「私のターン、ドロー！…やった！」

高町は引いたカードを見て喜んだ。

良いカードでも引いたのか？

「私は手札から？大嵐？を発動するの！！」

ここでそのカードかよ……

だったら。

「速攻魔法？終焉の焔？を発動。黒焔トークンを２体守備表示で特殊召喚する」

黒焔トークンＡ　ＡＴＫ０

黒焔トークンＢ　ＡＴＫ０

俺の場に黒い焔の塊が２つ現れた。
突風により俺の場と高町の場の魔法・罠カードが全て破壊された。

「ふふん、これで攻撃できるの！私は手札・場・墓地から獣戦士族モンスター１体と機械族モンスター１体をゲームから除外して？獣神機王バルバロスＵｒ？を特殊召喚！！」

獣神機王バルバロスＵｒ　ＡＴＫ３８００

「これがお前のデッキのエースか？」
「うん！さらに私は手札から？禁じられた聖杯？を発動！攻撃力を４００ポイント上げてバルバロスＵｒの効果を無効にするの！！」

獣神機王バルバロスＵｒ　ＡＴＫ３８００→４２００

めんどくさいカードを…
防ぐ手立てが無いな。

「バルバロスＵｒでスライムトークンを攻撃！【閃光烈破弾（クラッグ・ショット）】！」

バルバロスＵｒの放った弾丸にスライムトークンは粉々に破砕された。

幻夜　ＬＰ４０００－３７００＝３００

ごっそりいかれたなあ。
つーか初ダメージだ。

「私はこれでターンエンドなの！！」

なのは　獣神機王バルバロスＵｒ

「俺のターン、ドロー」

下克上をデッキトップに戻さなくて良かったな。
残り必要なカードはあと１枚…
引いたカードを見て俺は思った。

「俺はスライムトークンを守備表示にしてカードをセット。ターンエンド」

スライムトークン　ＡＴＫ↓ＤＥＦ

幻夜　ロードランナー　スライムトークン　黒焔トークンＡ　黒焔トークンＢ　セットカード１

「私のターン、バルバロスＵｒで黒焔トークンを攻撃！【閃光裂破弾】！！」

黒焔トークンは弾丸に撃ち抜かれ霧散した。

「これでターンエンドだよ。どうかな？私のエースは」

なのは　バルバロスＵｒ

「厄介なモンスターだよ。俺のターン、ドロー」

揃った！

俺は引いたカードを見て笑みを浮かべた。

「何を引いたかは知らないけどなのはのエースは絶対に負けないよ！！」

「なのはちゃんのバルバロスＵｒは今まで１回も破壊された事が無いんやで！！」

俺の笑みが見えたのかハラオウンと八神が言った。

１回も破壊された事が無い、か。

「良いぜ、だったら俺が最初にお前のエースを破壊する人間だ！！俺は？ジャンク・シンクロン？を召喚！？ジャンク・シンクロン？の効果で墓地のレベル２以下のモンスター、？ハーピィ・ガール？を効果を無効にして特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン　ＡＴＫ１３００

ハーピィ・ガール　ＡＴＫ５００

「っと危ない危ない。手札から？団結の力？をランナーに装備」

ロードランナー　ＡＴＫ３００→４３００

「こ、攻撃力が！！」

「まだまだいくぞ！！レベル２？ハーピィ・ガール？にレベル３？ジャンク・シンクロン？をチューニング！！集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ、？ジャンク・ウォリアー？！！」

？ジャンク・シンクロン？が輪となりその中を？ハーピィ・ガール

?が潜り抜けた。
俺の場に紫色の戦士が現れた。
ジャンク・ウォリアー　ＡＴＫ２３００
「さらに罠カード発動！?星蝕ーレベル・クライムー?」
俺の場に植物が現れ?ジャンク・ウォリアー?から星を吸い取った。
ジャンク・ウォリアー　レベル５→１
星蝕トークン　レベル１→５
「そして?ジャンク・ウォリアー?の効果を発動！【パワー・オブ・フェローズ】！！」
ジャンク・ウォリアー　ＡＴＫ２３００→６６００→７１００→９４００
?ジャンク・ウォリアー?はランナー、スライムトークンから力を受け取り自身の力とした。
「こ、攻撃力９４００！?」
「?ジャンク・ウォリアー?はシンクロ召喚に成功した時、場のレベル２以下のモンスターの攻撃力の合計分攻撃力を上昇させる」
まあ、レベルが１の?ジャンク・ウォリアー?自身も対象に含まれてるけどな。
「?ジャンク・ウォリアー?で?獣神機王バルバロスＵｒ?を攻撃

！！【スクラップ・フィスト】！！！」

?ジャンク・ウォリアー?の背中のブースターが火を吹き?ジャンク・ウォリアー?は上空へと飛び上がった。
?ジャンク・ウォリアー?の右腕に全ての力が集束する。
そして?ジャンク・ウォリアー?は?獣神機王バルバロスＵｒ?に右拳を叩き込んだ。
?獣神機王バルバロスＵｒ?は爆発した。

なのは　ＬＰ１９００－５６００＝－３７００

「きゃあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

……普通にＯＶＥＲ　ＫＩＬＬしちまった。
まあ、良いか。
そして俺はボートを漕ぎ十代達のいる場所に戻った。

「なのはさんまで負けるなんて…」
「しかもなのはちゃんのエースモンスターを破壊しての勝利や…」

何故か枕田が落ち込んでいた。
八神も驚いているようだった。

「さて、勝ったことだし翔を持っていくぞ」
「僕は物扱いっすか！？」

俺の言葉に翔が反応し叫んだ。

「気にするな。ほら、十代さっさと漕げ」

「分かってるよ」

俺がそう言うと十代はボートに飛び乗った。
危ないだろ…

「じゃあな。さっさと寝ないと肌に悪いぞ」
「「「「「「！！！！」」」」」」

ボートに乗り帰る途中で俺がそう言うと6人は顔を引き攣らせた。
やっぱり肌の事を気にするのか。

「さて、さっさと帰って寝るぞ～」
「……ところで僕はいつまで縛られているんすか」

俺が伸びをすると翔が呟いた。
いつまで？

「……明日の放課g―――」
「幻夜君には聞いてないっす！！」

答えようとすると翔が遮った。

「……人ってさ、どの位沈んでたら死ぬのかな？」
「ごめんなさいっす！だからボートから落とさないで！！」

俺は翔の身体に手を当てながら呟いた。
すると翔はあっさりと謝った。
俺の言葉を遮るからだ。

「そう言えば幻夜、お前っていつも使うデッキが違うけどどれが一

番強いんだ？」
「一番強いデッキ？……有るには有るが使うことが出来ない。だから？今？一番強いのはドラゴンシンクロデッキだな」
ボートを漕ぎながら十代が尋ねてきた。
一軍はラル、ルビ、エルが入っているデッキだもんな…
「強いのに使うことが出来ない？有る意味があるんすか？」
「そのデッキが一番のお気に入りなんだよ」
ハテナマークを浮かべて翔が尋ねてきた。
３人が思いっ切り使えれば良いんだけどなぁ…
そして俺達はレッド寮に戻り眠りに就いた。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ高町なのは
「幻夜君、また違うデッキを使ってたね」
「そうやな」

私が呟くとフェイトちゃんは頷きはやてちゃんが答えました。
私達は３人部屋です。

「それにしてもなのはが負けるなんて…」
「なのはちゃんの初めて奪われてしもたな～♪」
「にゃ！？ど、どどどどう言う事かな！？」

はやてちゃんの言葉に私は聞き返しました。

「だってそうやろ？『初めて』ここでエースモンスターの？獣神機王バルバロスＵｒ？が戦闘で破壊されたんやから…なんや？何か違

う事でも考えてたんか？」
「ち、違うよ！？べ、別に変なことなんて考えてないよ！？」
ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべてはやてちゃんが言いました。
「聖幻夜……私もデュエルしてみたいな」
「そうやな、仕事を忘れたらあかんけどデュエルしてみたいで」
フェイトちゃんがぽつりと呟くとはやてちゃんも頷き言いました。
「私ももう1回デュエルして次こそ勝利するの！！」
「だね。それじゃあ寝ようか？」
「そうやな。幻夜君も言っとったけど夜更かしはお肌の大敵や」
はやてちゃんが幻夜君の真似をして言う姿に私達は思わず笑ってしまいました。
そして私達は眠りに就きました。

誘拐と全力全開（後書き）

フレイス様、ＺＥＲＯ様感想ありがとうございます。

竜王「ふう…」

竜姫「お茶おいしーよ☆」

竜王「いきなり飲んでるんじゃないよ…」

「「こんにちは」」

竜王「あ、フレイス様の所より妖夢と早苗が来ました」

早苗「…こちらの方は？」

竜姫「竜姫（たつき）だよん☆よろしくね♪ヽ（＾ｏ＾）丿」

妖夢「は、はぁ…」

竜王「ああ、気をつけろよ。可愛い女の子を見ると抱き付くから」

妖夢「へ？きゃあああ！！」

竜姫「可愛いよう☆」

早苗「え？ちょ！？」

竜王「ちなみに竜姫は結構力が強く壁を殴って穴が開くぞ」

早苗「それ大変じゃないですか！って妖夢さんの口から何か白い物が！！！！！」

竜王「へぇ…半霊でも魂は口から出るんだ？」

早苗「そんな呑気な！！」

「ｒｙ」ろよこの野郎！！ってあれ！？」

竜王「ん？ＺＥＲＯ様の所の『遊戯王デュエルモンスターズＧＸ～転生少年による転生記～』から主人公の天空優君が（転送されて）来ました」

優「…いや、肉体は１５だけど２１だから君は止めてくれ」

竜王「オッケー。さて、幻夜を呼ぶか。おーい！！」

幻夜「ん？どうした…って、おい！！大丈夫か！？」

妖夢「う、ううう……」

竜姫「♪～♪～～」

竜王「もう良いのか？」

竜姫「うん☆満足♪」

優「殺人現場になるとこだったのか？」

幻夜「いや、むしろ死ねない分辛い気が…」

優「あ、天空優だ。よろしく」

幻夜「どうも、聖幻夜です。こちらこそよろしく」

早苗「妖夢さん！？妖夢さん！！？？」

妖夢「ううう……みょん」

早苗「妖夢さああああああーーーーーーーん！！！！」

竜王「お茶が入ったから皆来てくれ～」

全員「「「「「は～い」」」」」

妖夢「おいしいです」

優「確かに」

竜姫「竜王が入れたからね☆」

早苗「このケーキはどこのですか？」

竜王「翠屋から取り寄せたんだよ」

幻夜「ふぅ…遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》続きます」

月一テストとカウントダウン

ｓｉｄｅ聖幻夜
月一テストねえ…
何のためにテストするんだろう？

「あれ？聖君？」
「ん？えっと…確か…ハラオウン？」

名前を呼ばれ振り向くと金髪の女子生徒が立っていた。
確か高町や八神とよく一緒にいるな。

「うん。そう言えばちゃんと名前を言って無かったね。フェイト・Ｔ・ハラオウンだよ」
「んじゃ俺も、聖幻夜だ。改めてよろしくなハラオウン」

そう言って俺はハラオウンと握手した。
…何か、周囲からの殺気が上昇したな。

「あ、出来れば名前で呼んでくれないかな？私も名前で呼ぶし」
「名前で？」
「うん、名前で」

俺が問い返すとハラオウンは頷き答えた。
あ～…あいつが知ったら俺殺されるな。
この世界に来る前の友人の怒り狂った表情が思い浮かび俺は苦笑した。

「？…どうかしたの？」

「いや、なんでもない。えっと…よろしくなフェイト」
「うん、よろしくね。幻夜」
何かこそばゆい感じだなあ…
フェイトから名前で呼ばれることに若干の照れを感じながら俺は笑った。
「そういえば高町と八神は？」
「女の子には男の子に言えない秘密があるんだよ？」
俺の問いにフェイトは笑みを浮かべながらそう言った。
…また、周囲からの殺気が上昇した気がする。
「そうか、お互いにテスト頑張ろうな。高町と八神にもよろしく言っておいてくれ」
「うん、分かった。頑張ろうね。幻夜」
そう言って俺はフェイトと別れた。
時間が経過しテストの時間になった。
［それではテストを開始する。始め！！］
担当教師の言葉に配られたプリントをめくる。
何だ、こんな問題か。
問１：？青眼の白龍？に関するカードを４枚挙げよ。
答：滅びの爆裂疾風弾、正義の味方カイバーマン、青眼の究極竜、白竜の聖騎士
問２５：？青眼の白龍？のレベル、攻撃力、守備力を答えよ

答：レベル８、攻撃力３０００、守備力２５００

問３８：神のカードの名称を全て答えよ

答：オベリスクの巨神兵、オシリスの天空竜、ラーの翼神竜

問４５：ドラゴン族、レベル８のシンクロモンスターを６体、レベル１０のシンクロモンスターを１体答えよ

答：レベル８『スターダスト・ドラゴン、レッド・デーモンズ・ドラゴン、ブラックフェザー・ドラゴン、ライフ・ストリーム・ドラゴン、ダークエンド・ドラゴン、ライトエンド・ドラゴン』

レベル１０『トライデント・ドラギオン』

問５０：？青眼の究極竜？の攻撃後？融合解除？を行い総攻撃をした。合計ダメージを答えよ。

答：４５００＋３０００×３＝１３５００

終わった…

難しさよりも書くのに疲れた。

そう言えば途中で入ってきた十代と高町は…

「兄貴～起きてよ～！！」

「んが…Ｚｚｚ」

寝てたーー！！

流石に高町は起きて解いてたみたいだが…

「よう、１１１番」

「誰だ？」

席を立とうとするとイエローの制服を着た男子生徒が話しかけてき

た。

「俺はラーイエローの三沢大地だ」
「オシリスレッドの聖幻夜だ」

そう言って俺は大地と握手した。

「問題はどうだった？」
「そうだなあ…書くのがめんどくさかった」

俺が答えると大地は苦笑していた。
誰でも解けるだろ？

「まぁ良い、幻夜はカードを買いに行かないのか？」
「カードを？……ああ、新しいカードが入るんだっけ？」

大地の言葉に俺は記憶を手繰った。
そういえばそんな事があるって言ってたな。

「いや、いい。俺は自分の持っているカードを信じたいからな」
「そうだな」

大地と話していると視界の端で十代が起き上がり購買に向かって走っていった。
元気な奴だ。
しばらく話して大地は歩いていった。

「あ、幻夜。テストはどうだった？」
「フェイトか。う～ん…書くのがめんどくさかったな」

俺の答えにフェイトは驚いていた。
「え？全部解けたの！？」
「え？普通じゃねえの？」
フェイトの言葉に逆に俺は驚いてしまった。
だって基本的な問題ばかりだっただろ？
「……ちなみにどの問題が解らなかったんだ？」
「えっと……問３９の［モンスターを2体生け贄にして発動する効果を持つモンスターと効果名を書け］って言う問題なんだけど…」
あ～……
あの問題か…
フェイトの言葉に俺は納得した。
「確かに難しいかもな。俺の答えは［オベリスクの巨神兵、ソウル・エナジーＭＡＸ］だけど」
「あ、それで良かったんだ」
俺の答えを聞いてフェイトはハッとした表情になった。
他にそんな効果のモンスターっていたかな？
「何話しとるんや？」
「八神か。なに、テストの答え合わせみたいなもんだよ」
不意に八神が話しかけてきた。
近くには高町もいた。
「答え合わせって幻夜君は全部解けたんかい」

「まあな」

八神の問いに答えると八神と高町が驚いていた。

「ほ、ほな問４２も解けたんか！？」

「４２？…確か、［カウンター罠を発動することが特殊召喚の条件のモンスターを２体答えよ］って問題の？」

俺が尋ねると八神は頷いた。

えっと、あの問題は確か…

「確か…［裁きを下す者ーボルテニス、ダーク・ボルテニス］って書いたけど」

「あ～…それか～」

俺の答えを聞いて八神は納得したようだった。

間違えて？冥王竜ヴァンダルギオン？って書きそうになったけどな…

「あ、じゃあ問３０は？」

「３０は確か…［墓地のカードを除外して特殊召喚するモンスターを５体答えよ］だったか？」

俺の問いに高町は頷いた。

えっと、除外して特殊召喚だから…

「［カオス・ソーサラー、ダーク・シムルグ、神聖なる魂、シルフィード、インフェルノ］って答えたぞ。あと高町の切り札？獣神機王バルバロスＵｒ？もそうだな」

「にゃはは、バルバロスＵｒは書けたんだけどね…」

俺の答えを聞き高町は苦笑いをした。
墓地のカードを除外して特殊召喚するモンスターって結構強いんだよな。

「ちゅーか本当に幻夜君はオシリスレッドなんか！？」
「そうだよ！少なくともラーイエロー位のはずだよ！？」

八神がそう言うと高町も言った。
と、言われてもな…

「寮が違うからって意味は無いだろう？それに学生にランク付けをしているこのアカデミアがおかしい」
「そ、それは確かにそうなんやけど…」

俺が自分の意見を言うと八神は悩む様な表情になった。

「さて、と。今日はこのデッキを使うかな」
「そのデッキは？」

俺が机にデッキを置くとフェイトが尋ねてきた。
まあ、教えても良いな。

「ドラゴンシンクロデッキ。２００００超えのオーバーキルを見たなら知ってるだろ？」
「あ、あのデッキ…対戦相手が可哀想やな…」

八神はオーバーキルを思い出したのか苦笑いをした。

「と・こ・ろ・で？幻夜君はいつからフェイトちゃんの事を名前で呼んどるんや？」

「ん？今日のテストの前からだけど？八神と高町はいなかったからな」

八神が言葉を区切りながら尋ねてきた。
どこか変なことでも言ったか？

「そこや！そこ！！なんでフェイトちゃんは名前で呼んでウチ等は名字なんや！！」
「なんでと言われてもな…基本的に何も言われない限りは女は名字、男は名前で呼んでいるぞ？」

八神の問いに俺は答えた。

「第一に俺は異性を名前で呼ぶのは苦手だ」
「だったら！ウチ等で慣れていこか？」

俺が答えると八神は有無を言わさないといった様子でそう宣言した。
なぜこうなる…

「ほな、これからはウチを『はやて』、もしくは『はやてちゃん』と呼ぶように！」
「じゃあ私も『なのは』、もしくは『なのはちゃん』で」

にこやかにしかし有無を言わさない笑顔で2人はそう言った。
怖！！

「わ、分かったよ。はやて、なのは」
「分かればええんや、分かれば」
「なの！」

半ば脅されるようになりながらも俺が名前で呼ぶと2人は普通の笑顔になった。

「……怖かった」

「「何か言った？」」

「！？……何も、言ってない」

小さく呟いた声が聞こえたのかなのはとはやてが同時に尋ねてきた。地獄耳かよ…

「間もなく実技テストを行います。速やかに移動してください」

「お、んじゃ頑張ろうぜ。フェイト、はやて、なのは」

「うん」

「お互いにや」

「全力全開で頑張るの！」

教師の言葉に俺達は決闘場に向かった。

「……なあ、なんで俺の相手がブルーなんだ」

「入学試験であれほどの成績を出した君とオシリスレッドの生徒では試験にならないの～ね。それにあそこのドロップアウトボーイも相手はオベリスクブルーなの～ね」

見れば俺の隣で十代がデュエルをしていた。

万丈目か…そう言えば名前知らないな。

「なんだ、怖気づいたのか？」

「……んで？こいつを潰したとして俺に何のメリットがある？」

「メリットです～と？」

ブルーの生徒を無視して俺はクロノスに尋ねた。
「あな～たがこの生徒に勝ったらラーイエローに昇格します～の」
「……くだらねえ。もう、いいや。メリットはいらない、それとデメリットもいらないぞ」
クロノスの言葉を俺はバッサリと切り捨てた。
昇格に興味は無いからな。
「「デュエル！！」
幻夜　ＬＰ４０００
ＶＳ
男子生徒　ＬＰ４０００
「俺の先攻、ドロー」
俺はデッキからカードを引いた。
この手札なら…
「俺はモンスターをセット、カードを１枚セットしてターンエンド」
幻夜　セットモンスター１　セットカード１
「守っていたらお前の負けだ！ドロー！」
そう言って男子生徒はデッキからカードを引いた。
「俺はライフを２０００ポイント支払い手札から？終焉のカウントダウン？を発動！」

男子生徒　ＬＰ４０００－２０００＝２０００
男子生徒の場に漆黒の懐中時計が現れた。
「特殊勝利カード…」
って事は内容は殆ど限られてくるな。
「俺はカードを２枚セットしてターンエンド。そしてカウントが１つ進む」
懐中時計の針が１つ進んだ。
男子生徒　セットカード２　終焉のカウントダウン１
「俺のターン、ドロー」
「罠カード発動、？威嚇する咆哮？」
凄まじい咆哮が決闘場に響き渡った。
攻撃宣言が出来なくなったか…
「？スネークポット？を反転召喚。効果で俺の場に毒蛇トークンを１体特殊召喚」
スネークポット　ＡＴＫ６００
毒蛇トークン　ＡＴＫ１２００
俺の場に蛇の入った壺が現れ中から蛇が一匹出てきた。

「俺は？ジャンク・シンクロン？を召喚」

ジャンク・シンクロン　ＡＴＫ１３００

「レベル２？スネークポット？とレベル３毒蛇トークンにレベル３？ジャンク・シンクロン？をチューニング。集いし願いが新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、？スターダスト・ドラゴン？！」

俺の場に光輝く星の竜が現れた。

スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「俺はこれでターンエンド」

幻夜　スターダスト・ドラゴン　セットカード１　終焉のカウントダウン２

「俺のターン、ドロー！」

そう言って男子生徒はデッキからカードを引いた。

「俺はカードを２枚セットしてターンエンド。そしてカウントが１つ進む」

男子生徒　セットカード３　終焉のカウントダウン３

「俺のターン、ドロー」

召喚をしないって事はフリーチェーンの罠カードか…

「罠カードを2枚発動、？運命の火時計？」

男子生徒の場のセットカードが2枚開いた。

2ターン分か…

終焉のカウントダウン5

「このまま行くかスターダストで攻撃！【シューティング・ソニック】！」

「罠カード発動！？攻撃の無力化？」

スターダストの攻撃は次元の渦に飲み込まれた。

「ちっ…カードをセットしてターンエンド」

幻夜　スターダスト・ドラゴン　セットカード2　終焉のカウントダウン6

「俺のターン、ドロー！」

そう言って男子生徒はデッキからカードを引いた。

「俺はモンスターをセットして手札から？レベル制限B地区？を発動する」

スターダストが守備表示になるな…

スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ↓ＤＥＦ

「俺はこれでターンエンド。そしてカウントが１つ進む」

男子生徒　セットモンスター１　セットカード１　レベル制限Ｂ地区　終焉のカウントダウン７

「俺のターン、ドロー」

レベルが高い奴が守備表示になるのは辛いな…

とりあえずは魔法、罠を破壊するしかないな。

「俺は？切り込み隊長？を召喚。効果で？ネフティスの導き手？を特殊召喚」

切り込み隊長　ＡＴＫ１２００

ネフティスの導き手　ＡＴＫ６００

「？ネフティスの導き手？の効果を発動。このカードを含む自分の場のモンスター２体を生け贄に捧げデッキから？ネフティスの鳳凰神？を特殊召喚」

ネフティスの鳳凰神　ＤＥＦ１６００

「罠カード？デストラクトポーション？を発動。ネフティスを破壊する」

幻夜　ＬＰ４０００＋２４００＝６４００

「さらに？バスター・モード？を発動。スターダストを生け贄に？

スターダスト・ドラゴン／バスター?を特殊召喚」
スターダスト・ドラゴン／バスター　ＤＥＦ２５００
「俺はこれでターンエンド」
幻夜　スターダスト・ドラゴン／バスター　終焉のカウントダウン８
「俺のターン、ドロー！」
そう言って男子生徒はデッキからカードを引いた。
「モンスターをセットしてターンエンド。そしてカウントが１つ進む」
男子生徒　セットモンスター２　セットカード１　レベル制限Ｂ地区　終焉のカウントダウン９
「俺のターン、ドロー」
モンスターが２体か…
戦闘耐性は有るだろうが攻撃しておこう。
「スタンバイフェイズに墓地からネフティスを特殊召喚」
ネフティスの鳳凰神　ＤＥＦ１６００
「ネフティスが蘇生した時、場の魔法、罠を全て破壊する。【浄化の焔―プロミネンス・ジャッジメント―】」
「何！？ぐあっ！！」

ネフティスは焔を創り出し周囲に飛ばしセットカードを破壊した。

「スターダスト／バスターとネフティスを攻撃表示に変更」

スターダスト・ドラゴン／バスター　ＤＥＦ→ＡＴＫ

ネフティスの鳳凰神　ＤＥＦ→ＡＴＫ

「２体でセットモンスターを攻撃【アサルト・ソニック・バーン】【クリムゾン・フェングウィング】」

スターダスト／バスターが右の、ネフティスが左のセットモンスターを攻撃した。

「セットモンスターは？マシュマロン？と？魂を削る死霊？。よってどちらも破壊されない！さらに？マシュマロン？の効果で１０００ポイントのダメージを与える！！」

男子生徒の場のセットモンスターが開くと俺に向かってマシュマロのようなモンスターが飛び掛かってきた。

幻夜　ＬＰ６４００－１０００＝５４００

「やっぱりか、俺はこれでターンエンド」

幻夜　スターダスト・ドラゴン／バスター　ネフティスの鳳凰神

終焉のカウントダウン１０

「俺のターン、ドロー！」

そう言って男子生徒はデッキからカードを引いた。

「俺はこれでターンエンド。そしてカウントが１つ進む」

男子生徒　マシュマロン　魂を削る死霊　終焉のカウントダウン１１

「俺のターン、ドロー」

手札が７枚になっちまったな…

仕方が無い。

「モンスターをセットしてターンエンド」

幻夜　スターダスト・ドラゴン／バスター　ネフティスの鳳凰神

セットモンスター１　終焉のカウントダウン１２

「俺のターン、ドロー！」

そろそろどうにかしないと不味いな…

「俺はモンスターをセットしてターンエンド。そしてカウントが１つ進む」

男子生徒　マシュマロン　魂を削る死霊　セットモンスター１　終焉のカウントダウン１３

「俺のターン、ドロー」

持久戦か…

早くこの状況をなんとかするカードを引かないとな…

「俺はカードを2枚セットしてターンエンド」

幻夜　スターダスト・ドラゴン／バスター　ネフティスの鳳凰神
セットモンスター1　セットカード2　終焉のカウントダウン14

「俺のターン、ドロー！」

俺に残されたターンはあと3か。
このデッキに？ライトニング・ボルテックス？とか入れてないからなあ…

「カードを2枚セットしてターンエンド。そしてカウントが1つ進む」

男子生徒　マシュマロン　魂を削る死霊　セットモンスター1　セットカード2　終焉のカウントダウン15

「俺のターン、ドロー」

……違う、このカードじゃ無い。

「俺はこれでターンエンド」

幻夜　スターダスト・ドラゴン／バスター　ネフティスの鳳凰神
セットモンスター1　セットカード2　終焉のカウントダウン16

「俺のターン、ドロー！」

男子生徒はデッキからカードを引いた。

「一応防御を固めておくか手札から?悪夢の鉄檻?を発動!」

「させるか!スターダスト／バスターの効果を発動。【ヴィクティム・サンクチュアリ】」

スターダスト／バスターが光を放ち落下してくる鉄檻と共に消えた。

「ふん、甘いんだよ!もう1枚?悪夢の鉄檻?を発動!」

俺の周囲に巨大な鉄檻が出現した。

「俺はこれでターンエンド。そしてカウントが1つ進む」

「エンドフェイズにスターダスト／バスターの効果を発動。このカードが自身の効果で墓地に送られた時、エンドフェイズに自分の場に特殊召喚する」

男子生徒　マシュマロン　魂を削る死霊　セットモンスター1　悪夢の鉄檻　セットカード2　終焉のカウントダウン17

「俺のターン、ドロー」

これも違う……

「俺はこれでターンエンド。手札が6枚以上あるので6枚になるように墓地に捨てる」

このカードは現状では使わないな…

俺は手札を1枚選択し墓地に捨てた。

幻夜　スターダスト・ドラゴン／バスター　ネフティスの鳳凰神
セットモンスター１　セットカード２　終焉のカウントダウン１８

「俺のターン、ドロー！」

次の俺のターンで勝負が決まる……

「俺はこのままターンエンド。そしてカウントが１つ進む」

男子生徒　マシュマロン　魂を削る死霊　セットモンスター１　悪夢の鉄檻　セットカード２　終焉のカウントダウン１９

「さあ、お前の最後のターンだ！これでお前は終わりだ！！！」

「くっ……」

デッキよ…
答えてくれ…！

「俺の…ターン！！！！」

そう言って俺はデッキからカードを引いた。

「……来た！！！」

引いたカードを見て俺は喜んだ。

「俺は？デブリ・ドラゴン？を召喚！？デブリ・ドラゴン？の効果を発動。自分の墓地の攻撃力５００以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚する！！？風霊使いウィン？を特殊召喚！！」

「風霊使い！？そんなカードをいつ墓地に――――ッまさか！！」

「その通り！手札がオーバーした時に墓地に捨てたカードだ！！」

俺の場に白いドラゴンと杖を持った少女が現れた。

「レベル３？風霊使いウィン？にレベル４？デブリ・ドラゴン？をチューニング！冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！シンクロ召喚！現れよ、？ブラック・ローズ・ドラゴン？！！！！」

「今さらそんなモンスターを出してどうなる！！」

俺の場に薔薇を模した姿のドラゴンが現れた。

ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ２４００

「ブラック・ローズの効果を発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる！！【ブラック・ローズ・ガイル】！！」

「な！？カードが！！！」

ブラック・ローズが薔薇の花弁を舞い散らし場のカードを全て破壊した。

「くっ…驚いたが自分のカードを破壊したら攻撃できないぞ！！」

「それはどうかな？スターダスト／バスターの効果を発動！フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の墓地に存在する？スターダスト・ドラゴン？１体を特殊召喚する事ができる！！」

スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「何い！！！！！」

「スターダストで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！【シューティング・ソニック】！！！」

男子生徒に向かってスターダストが攻撃を放った。

「うわあああああああああああ！！！！！！！！！！」

男子生徒　ＬＰ２０００－２５００＝－５００

「勝者、聖幻夜！」
「Ｙｏｕ（あなたが） ｈａｖｅ（ュー出来） ｎｏｔ（ないのさ） ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ（コンティニ）……」
俺は膝をついて悔しがる男子生徒にそう言って決闘場から降りた。
見れば横で十代が勝利宣言をしていた。

「お、幻夜も勝ったんだな！」
「まあな、？デブリ・ドラゴン？を引けなかったら負けてたけどな」
俺に気付き十代が話し掛けてきた。
実際、デッキが６０枚で魔法、罠が合わせて８枚しかないのに手札にほとんどあったからなあ…
本当に引けて良かった。
あったモンスターと言えばヴァンダルギオンが２枚だし…
ウィンがいてくれて助かったな。

「２人とも素晴らしいデュエルでした。２人をラーイエローに昇格しましょう」
校長が立ち上がりそう言った。
「あ、俺パスで」
「はい？」
俺の言葉に校長は首を傾げた。
「それは何故ですか？」
「じゃあ、逆に聞く。昇格して勉強に影響があるのか？」

実際、寮が違うだけで授業の内容は同じなんだからな。

「昇格すれば寮の環境が良くなりますが…」

「何で寮の環境に差を創った？生徒を差別するのは教師…いや、学校としてどうなんだ？」

俺はさらに疑問を投じた。

校長は黙ってしまった。

「まあ、そんな訳で俺は昇格しない。それに一番下だとバカにしていたレッドに倒される他の色を見るのも楽しいからな」

そう言いながら周囲を見回すと何人かの生徒が眼を逸らした。

バカにしていた奴等だな、分かりやすい…

「そうですか…分かりました。昇格を無しにします」

「……無しになるんじゃなく、受け取らないだけだっつの…」

校長の言葉に俺は小さく呟いた。

まあ、どうでも良いことだな…

その後、十代もラーイエローへの昇格を断り俺と十代はオシリスレッドに留まることになった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ第３者視点

「まさか、昇格を断わるやなんてな～」

空を見上げてはやてはポツリと呟いた。

「本当だね。確かに昇格に興味が無いって言ってたけど…」

「にゃはは…幻夜君の考えは聞いたんだけどね…」

はやての呟きにフェイトとなのはが答えた。
テストも終わり今はそれぞれの寮に戻っている途中なのだ。

［なのは、フェイト、はやて少し良いかい？］
「クロノ君？何かあったんか？」

不意に3人にしか聞こえない声が聞こえた。
その声にいち早くはやてが問い掛けた。

［少しね、実は……］
「「「……えっ！？」」」

声の言ったことに3人は驚きを隠せなかった。

月一テストとカウントダウン（後書き）

フレイス様、ＺＥＲＯ様感想ありがとうございます。

竜王「疲れた…」

幻夜「どうした？」

竜王「マーボー様の記事のところで竜姫が暴走してな…」

幻夜「で、その竜姫は？」

竜王「え゛？」

竜姫「クスクス♪えっと～あれをこうして～☆」

竜王「何も見ていない何も見ていない何も見ていない何も見ていない何も見ていない何も見ていない何も見ていない……」

幻夜「竜姫はどこからあんなものを…」

竜王「あいつは材料が有れば物質を変換できるんだよ…ちなみに俺は分解だ…」

「お邪魔します」

竜王「ん？フレイス様の所よりユウキ、早苗、ティアナが来ました」

ユウキ「ほ、本当に竜王と違う人がいた…」

早苗「手に持っている物に関しては聞かない方が良さそうですね…」

ティアナ「あの、質問良いですか？」

竜王「良いよ。あ、ちょっと待ってね。【乖離（かいり）】！！」

竜姫「あ～！！せっかく創った拘束具が～！！！」

竜王「ふざけんな！絶対にやられてたまるか！！」

ユウキ「性格も違うんだな…」

早苗「妖夢さんに抱き付いてましたから」

ティアナ「えっと…質問です。この世界のなのはさん達の年齢はいくつですか？」

竜王「なのは達の年齢？１５歳だよ。時期的にはまだスバルを救出して無いけど」

竜姫「あ、でもフェイトちゃんはもうエリオ君の保護責任者だよね？」

竜王「ああ」

ティアナ「そ、そうなんですか（複線…なのかしら？）」

ユウキ「あ、じゃあ俺からも１つ。最後になのはさん達は何を聞いたんだ？」

早苗「それは聞いちゃ駄目なんじゃないですか？」

竜王「う～ん…そうだなあ、秘密って事で」

「うわぁあああああああーーーーー！！！！！」

竜王「轟音！？……あ、ＺＥＲＯ様の所から優が落ちてきました」

優「絶対にあいつをボコッてやる……」

幻夜「いきなり怨み事か…」

優「とりあえずはデュエルでストレス発散するか…確かこのデッキだったな。これでよし、と。おい、デュエルしろよ」

幻夜「明らかにストレス発散って言ったよな！？…まあ、受けるけどよ」

幻夜・優「「デュエル！！」」

竜王「あっちでデュエルが始まったか…遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》続くぞ～」

竜姫「あ、このケーキも～らい☆」

ティアナ「じゃあ、私はこっちを」

早苗「私はこれです」

ユウキ「俺はこれだな」

竜王「冷蔵庫にケーキは無かったはず……もしかして。竜姫、それ創●●ただろ」

竜姫「せいか〜い♪【創造(そうぞう)】したんだよん☆」

竜王「もう良いや……」

闇夜のデュエルと動きだす歯車

ｓｉｄｅ聖幻夜

月一テストから1週間が経った。

あのテストでのスターダスト達の活躍が大きかったのか二つ名みたいなのが俺に付いたらしい。

「おい、〔竜統べし者（ロード・オブ・ドラコニアス）〕がいるぞ…」

「本当だ、あいつのデッキさえあれば…」

聞こえてるぞ…

つーか〔竜統べし者〕って…

あのデッキが一軍みたいじゃないか。

「あ、〔運命乙女の主（プリメア・シックザール）〕よ…」

「あのデッキとドラゴンのデッキどっちが強いのかしら…」

もう一つあった！？

〔運命乙女の主〕ってフォーチュンデッキのことか？

新しく作ったデッキとスライムデッキを使ったらどうなるんだ…？

「あ、幻夜！」

「ん？十代か、どうした？」

声がかかり振り向くと十代が走ってきた。

何を慌てているんだ？

「今日さ皆で怖い話をやるんだ。幻夜もどうだ？」

「怖い話？……いや、俺はパスだな。デッキの調整をやろうと思う」

まだ他にも調整が必要なデッキがあるからな…
俺の答えに十代は「そうか、気が向いたら来てくれよな！」と言って走っていった。

『良かったの？』
「ああ、他のデッキも出来る限りで最高の状態にしたいからな」

ラルの言葉に俺は周囲に聞こえないように小さく答えた。
そういえば今日はなのは、フェイト、はやてを見てないな…
休みか？

「まあ、俺が気にすることじゃないな」

そう呟き俺は自分の部屋に戻った。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ第３者視点
時刻は夜、辺りは暗く人は見当たらない…
不意に闇の中から１人の男が現れた。

「ここにあれがあるのか…」

男はそう呟き笑みを浮かべた。
その笑みは見た人間全員が恐怖を感じるほどに歪んでいた。
そして男は再び闇の中に消えていった。

同時刻、オシリスレッド寮、幻夜の部屋

『幻夜、これでどう…？』

「ん？……うん。良い感じだな」
ルビが指差したカードを手に取り効果を読み幻夜は頷いた。
幻夜の表情を見てルビは笑顔を浮かべた。
すると不意にドアが叩かれた。
「誰だ？ルビ、一応消えていてくれ」
『分かった…』
首を傾げながら幻夜は立ち上がりルビに言った。
ラルとエルは最初から出てはいない。
「今開けるって…ん？十代じゃないかどうしたんだ？」
「今から怖い話で出た廃寮に行くんだ。幻夜もどうだ？」
十代の言葉に幻夜は首を傾げた。
おそらく何故自分が誘われたのかを考えているのだろう。
「いや、やめておく。デッキの調整がまだ途中なんだ」
「そっか。あ、後で俺とデュエルしような！」
幻夜の言葉に十代は頷きそう言って部屋から出ていった。
十代が部屋から出ていって少し経つとルビが現れた。
『行きたかった…？』
「いや、大丈夫だよ。ほらデッキの調整を再開しよう」
ルビの言葉に幻夜は首を振り答えた。
するといきなり幻夜のＰＤＡが鳴った。

「こんな時間にか…」
『今度は誰…？』
幻夜はめんどくさそうにＰＤＡを手に取った。
「知らないアドレスだな…」
『どうする…？』
届いたメールのアドレスを確認して幻夜は呟いた。
ルビは幻夜を見つめ尋ねた。
「とりあえず内容を確認してみなきゃ分からないな…」
そう言って幻夜はメールを開いた。
【聖幻夜さまへ、夜分遅くに申し訳ありません。この度、重要な事柄がありまして連絡をしました。つきましては今からアカデミアの決闘場へ来てください】
メールを開くと音声となって流れた。
内容を聞き幻夜は首を傾げた。
「重要な事柄？」
『なんだろう…？』
幻夜の呟きにルビも首を傾げた。
そして幻夜は広げていたカードを全て片付けてトランクにしまいデッキを持ち部屋を出た。
ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ聖幻夜

さて、メールの指示通り決闘場に来たが…
誰もいないのか？

『イタズラだったのかな…？』
「かもな」

ルビの言葉に俺は小さく答えた。
事実、人の気配は全く感じられ無いからな。

「来てくれたんやな……」
「！？……はやて？」

不意に声が聞こえそちらを向くとはやてが立っていた。

「……はやてがメールの送り主か？」
「そうやで」

俺の問いにはやては頷いた。

「聞きたいことがある。１つ、どうやって俺のアドレスを知った？」
「それは十代君に聞いたんや」

十代が教えてたのかよ…
せめて俺に一言いってくれ…

「２つ、どうやってここに現れた？人の気配は無かったはずだが？」
「それは……」

俺の問いにはやては言いづらそうに口ごもった。

答えられないって訳か…

「答えられないなら別に良い。最後に、重要な事柄ってのは何だ？」

「ありがとうな、実は…幻夜君の持っとるカードが狙われとるんよ」

最後の俺の問いにはやては少しだけ溜めて言った。

俺のカードが…？

「何故だ？俺の持っているのは普通のカードだぞ？」

「えっとな…？信じられないかもしれんけど幻夜君の持っとるカードから異常な力を感知したんよ」

俺の問いにはやてはゆっくりとしかしはっきりと答えた。

異常な力？

「……分かった、一応信じよう。それで？俺のカードが狙われていることを教えに来たのか？」

「……幻夜君、幻夜君の持っとるカードを全て私等に渡して欲しいんや」

俺が頷き尋ねるとはやては長い沈黙を置き言った。

俺の持っているカードを全て！？

「どういう意味だ……」

「私等が分かったのは幻夜君の持っとるカードから異常な力が出とることと、幻夜君のカードが狙われとることだけなんや。どのカードから異常な力が出ているかは分からへん。だから幻夜君の持っとるカードを全て私等に渡して欲しいんや」

俺の眼を見詰めはやてははっきりと言った。

つまり、どのカードが狙われているか分からないから全部渡せってことか…

「ふざけんなよ…」

「！！！」

俺の言葉にはやては眼を見開いた。

はっきり言わせてもらう…

「勝手なことを抜かすんじゃねえ。俺のカードを全て渡せ？……ふざけんな！！こいつらを……仲間(カード)達を俺が渡すわけねえだろうが！！！」

「で、でも！確実にカード達を守れるんやで！！」

俺が怒鳴るとはやては怯みながらも反論した。

確実に守れる？

「その保証はどこにある？」

「え……？」

俺が静かに聞くとはやては一瞬呆けた。

「お前等に預けたら絶対に守りきれるのか？それにカードから異常な力が出ているんだろう？どうせ何かしら理由をつけて返さないはずだ。違うか？」

俺の言葉にはやては黙りこくってしまった。

おおかた的を射ていたのだろう。

組織なんてものは大概そんなもんだ。

「な、なら幻夜君は守りきれるんか！！」
はやてが意趣返しとでも言うかのように言った。
「俺？……守りきれるかどうかじゃねえんだよ。守りきるんだ」
「　見　つ　け　た　！　！」
俺が言い終わるとどこからか男の声が聞こえてきた。
男の声を聞いた瞬間、はやての表情が強張った。
「誰だ？」
「まさか、見つかってもうたんか！？」
はやてを見れば慌てて周囲の警戒ランクを上げていた。
「おい、ちゃんと説明しろ」
「詳しいことは言えへんけど……今、ここに幻夜君のカードを狙っとる奴がおるんや！」
ここに…？
声からして男だとは思うが…

『何をしているのですか！！！』
「な！？ぐあっ！！」

はやての言葉に周囲を警戒していると不意にラルの怒鳴り声と男の呻き声が背後から聞こえてきた。
慌てて背後を見ると今までと違いはっきりと実体を持ったラルと腕を押さえている男が立っていた。

「ラル、そいつは？」
『背後から幻夜のカードを盗もうとしたのよ』

俺の問いにラルは静かにしかし怒りを含んだ声色で言った。
俺のカードを…

「げ、幻夜君！？その人は誰や！？」
「ラル、俺の仲間だ」

はやては驚き尋ねてきた。
つーか俺も聞きたいことが出来たな。

「ラル、その姿は？」
『実体化したわ。私達は通常の精霊よりも力が強いから実体化が出来るのよ』

俺の問いにラルは普段の優しい笑顔で答えた。
怒り顔よりもこっちの方がラルらしいな。

「く、くくく……見つけた、見つけたぞ！」
「！？」

不意に男が笑いながらこちらを見た。
その顔は人がそんな表情を出来るのかと疑いたくなるほどに酷く歪んでいた。

「お前か？俺の仲間（カード）達を狙っている奴ってのは…」
「お前のカード？違うなぁ……俺が今からお前から奪うんだ、つまりは俺の物だ！！！」

俺が聞くと男は叫んだ。
……ぶち殺す。

「そんなことウチ等がさせへんで！！」
「は……！今まで俺を捕まえられなかった管理局がどうやって俺を拘束するってんだよ！」

はやてが怒鳴ると男は鼻で笑い言い放った。
管理局…？

はやて達が別のアニメのキャラなのは知っているが…
管理局ってなんだ？

「……まぁ、良いか。おい屑、俺から仲間達を奪うとかほざいたな？良いだろう、俺とデュエルしろ。お前は徹底的に叩き潰す」
「自分のカード達に別れの挨拶は済んだのかぁ？ひゃははは！！！」

そう言って俺はデュエルディスクにいつも腰に着けているデッキをセットした。
こいつは一軍で完膚なきまでに潰し尽くしてやる…

「「デュエル！！」」

幻夜　ＬＰ４０００
ＶＳ
男　ＬＰ４０００

「俺の先攻、ドロー！」

そう言って男はデッキからカードを引いた。

「運が良いぜぇ…俺は手札から永続魔法？神の居城ーヴァルハラ？を発動！！」

そう言って男がカードをセットすると周囲の景色が神聖的な神殿へと変化した。
ヴァルハラ……天使族か。

「俺はヴァルハラの効果で天使族モンスター、？堕天使アスモディウス？を攻撃表示で特殊召喚！」

堕天使アスモディウス　ＡＴＫ３０００
男の場に漆黒の翼を持つ天使が現れた。
１ターン目でこれか…
「さらにモンスターをセットしアスモディウスの効果を発動！デッキから？堕天使エデ・アーラエ？を墓地に送る！ターンエンドだ！！」
男　堕天使アスモディウス　セットモンスター１　神の居城－ヴァルハラ
「俺のターン、ドロー！」
引いたカードは、？ニュードリュア？か…
「俺はモンスターをセットしカードを２枚セット、ターンエンド」
幻夜　セットモンスター１　セットカード２
「守ることしかできないのか？俺のターン、ドロー！」
男は引いたカードを見て歪んだ笑みを浮かべた。
「本当に運が良いぜ……俺はアスモディウスでセットモンスターを攻撃！！」
アスモディウスが俺の場のセットモンスターに攻撃を仕掛けてきた。
攻撃名を言わないんだな…

「俺のセットモンスターは？ニュードリュア？。このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られたときフィールド上のモンスター１体を破壊する！俺はセットモンスターを選択する！【道連れ―デス・ロード―】」

ニュードリュア　ＤＥＦ８００

俺の場のセットモンスターが開き黒い服を着た人間が現れ破壊された。

しかし人間は破壊される瞬間に男の場のセットモンスターに向けて影を伸ばしていた。

？ニュードリュア？が破壊されると同時にセットモンスターも影に沈んでいった。

「ちっ！？マシュマロン？が……俺はこれでターンエンド！」

男　堕天使アスモディウス　神の居城－ヴァルハラ

「俺のターン、ドロー！」

まずはアスモディウスをどうにかしたいが……

場が埋まっている時点でヴァルハラは意味がないからな。

「俺はモンスターをセットしてターンエンド」

幻夜　セットモンスター１　セットカード２

今の手札と場では上級モンスターを召喚できないからな……

そう考え俺はターンを終了した。

「俺のターン、ドロー！……チッ！」
引いたカードを見て男は舌打ちをした。
引きたいカードじゃなかったみたいだな…
「俺は？ダーク・ヴァルキリア？を召喚」
ダーク・ヴァルキリア　ＡＴＫ１８００
男の場に黒い鎧に身を包んだ女性が現れた。
完璧な堕天デッキか…？
「？ダーク・ヴァルキリア？でセットモンスターに攻撃！」
ヴァルキリアが俺の場のセットモンスターに向けて黒い球体を撃ち放った。
「俺のセットモンスターは？暗黒界の斥候スカー？よって破壊される」
俺の場のセットモンスターが開き赤い体躯にナイフを持った悪魔が現れた。
暗黒界の斥候スカー　ＤＥＦ５００
「スカーの効果を発動【闇の招来―ウェルカム・ダクネス―】！デッキからレベル４以下の『暗黒界』と名のついたモンスターを手札に加える。俺は？暗黒界の尖兵ベージ？を手札に加える！」

スカーは破壊される瞬間に俺のデッキに向けてナイフを投擲した。
ナイフはデッキに刺さり一枚のカードを俺の手札に持ってきた。
なんかイメージ悪いな…

「アスモディウスで直接攻撃！！」

アスモディウスが俺に向けて羽を飛ばしてきた。

「ぐぁあああああああああああ！？！？」

アスモディウスの放った羽が体に突き刺さり俺は叫び声を上げた。
痛い！？！？

幻夜　ＬＰ４０００－３０００＝１０００

「ど、どうなってやがる！！！」
「ははははは！痛いだろう？このデュエルではダメージが現実のものになるんだよ！そしてライフが０になったとき……それは、死を意味する」

俺が叫ぶと男は笑い声をあげて言った。
ダメージが現実のものになるだと！？

「くくく…俺はカードを１枚セットしてターンエンドだ」
「エンドフェイズに速攻魔法？終焉の焔？を発動！黒焔トークンを２体特殊召喚する！」

俺の場に黒い焔の塊が２つ出現した。

黒焔トークンＡ　ＡＴＫ０

黒焔トークンＢ　ＡＴＫ０

男　堕天使アスモディウス　ダーク・ヴァルキリア　神の居城－ヴァルハラ　セットカード１

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ八神はやて

「幻夜君！！」

幻夜君の体に突き刺さった黒い羽が徐々に赤黒く染まっていった。

あの出血は危険や！

「なんでや！なんで攻撃される前に発動せんかったんや！そうすればダメージを受けんかったんやで！！」

私は幻夜君に向けて叫んだ。

あの傷は言わば私がデュエルを止められなかった故の傷。

私のせいや！

「攻撃される前に発動したらトークンが残らないだろうが…」

「な！？」

私の叫びに幻夜君は苦痛に顔を歪ませながら答えました。

「最も、ダメージが現実のものになるとは思ってなかったがな…」

「なら早よサレンダーしてデュエルを止めや！早く止血しな死んでまう！！」

幻夜君の言葉に私が叫ぶと幻夜君は首を横に振りました。

「それは出来ない。こいつだけはここで俺達が叩き潰す！！！」
「なんでや！なんでそこまで……死んでまったらなんの意味もないんやで！！」

分からない…
どうして幻夜君はデュエルを止めないんや！

「なんで止めないか？決まっている！こいつは俺の仲間（カード）達を奪うと言った！故にそれ相応の苦痛を与えるんだ！！」
「幻夜君…」

幻夜君の言葉に私は彼の感情を理解しました。
それは――――怒り…
自分の仲間に害を与える者への純粋な怒り…
そして同時に私はもう１つのことも理解しました。
今の彼は何を言っても止められないのだと…

「俺のターン、ドロー！」

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ聖幻夜
くっそ…
こいつだけは絶対に潰す！

「俺は手札から？二重召喚？を発動！」

まずは場の制圧！

「俺は？暗黒界の尖兵ベージ？を召喚！」

俺の場に槍を持った悪魔が現れた。

暗黒界の尖兵ベージ　ＡＴＫ１６００

「そして場のトークン２体と?暗黒界の尖兵ベージ?を生け贄に捧げる！！」

「さ、３体のモンスターを生け贄にするやて！？」

黒焔トークンと?暗黒界の尖兵ベージ?が闇に飲み込まれ１つになる…

「これが悪夢だ……現れろ！?邪神アバター?！！！」

邪神アバター　ＡＴＫ???

俺の場に漆黒の球体が現れた。

その姿は闇よりも暗く、黒く、深く、そして――――――――――――――――――――――――――――

――蠢いていた。

「な、なんなんやこのモンスターは……」
アバターを見てはやてが言葉を漏らした。
その表情は驚愕にいろどられている。
「攻撃力が決まっていないだと？」
「アバターの攻撃力は場の表側表示で最も攻撃力の高いモンスターの攻撃力＋１００になる！【もう一人の自分―ドッペル・ゲンガー―】！」
俺の言葉に反応してアバターは姿を変えていった。
邪神アバター　ＡＴＫ３１００
やがてアバターはアスモディウスの姿へと変化した。
しかし１つだけ違う場所がある。
それは、男に向けての異常な怒りの形相だった。
まるで俺の怒りに共感しているかのような…
「アバターで？ダーク・ヴァルキリア？を攻撃！【魂喰らい―ドレイン・ハート―】！」
アバターは？ダーク・ヴァルキリア？の近くに行き元の黒い球体へと戻った。
そしてその漆黒の身体に？ダーク・ヴァルキリア？を沈めた。
「ダメージを受けてもらう！！」
俺の言葉にアバターは男に向けてその身から漆黒の棘を創り出し四肢を貫いた。

「がああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

男　ＬＰ４０００－１２００＝２８００

ダメージが少ないからか男の傷はそれほどまでに大きなものでは無かった。

「俺はこれでターンエンドだ」

幻夜　邪神アバター　セットカード１

「よくも俺に傷を……俺のターン、ドロー！！」

墳怒の形相で俺を見ながら男はデッキからカードを引いた。

「俺は手札から？死者蘇生？を発動！！」

そう言って男はカードをセットした。
しかし場には一向に変化が訪れない。

「何故だ！？何故発動しない！！」
「くくく…？邪神アバター？の効果。このカードが召喚に成功した時、相手ターンで数えて２ターンの間、相手は魔法・罠カードを発動できない！！」

驚く男に俺は笑いながら効果を教えてやった。
男の表情は驚愕に染まった。

「くっ！俺はアスモディウスを守備表示にしてモンスターセット、ターンエンドだ」

堕天使アスモディウス　ＡＴＫ↓ＤＥＦ

男　堕天使アスモディウス　セットモンスター１　神の居城―ヴァルハラ　セットカード１

「俺のターン、ドロー！」

来た！

引いたカードを見て俺は歓喜した。

「俺は永続罠？ＤＮＡ改造手術？を発動！俺が選択するのは悪魔族！！」

堕天使アスモディウス　天使族↓悪魔族

男の場のアスモディウスの翼が蝙蝠の様な翼へと変化した。

分かりやすいな。

「さらに俺は？クラスター・ペンデュラム？を召喚！このカードが召喚に成功した時、相手の場のモンスターの数までトークンを特殊召喚できる！」

クラスター・ペンデュラム　ＡＴＫ１００　機械族↓悪魔族

ペンデュラム・トークンＡ　ＡＴＫ０　機械族↓悪魔族

ペンデュラム・トークンＢ　ＡＴＫ０　機械族↓悪魔族

俺の場に蝙蝠の羽を持った時計の針が３本現れた。

「はやて！今から出すモンスターは絶対に他言無用で頼むぞ！」

「わ、分かった！！」

急に俺が声をかけた事に驚きながらもはやては頷き答えた。

「見せてやるよ……このデッキのエース――――いや、俺の最高の相棒を！！」

そう言って俺は手札からカードを１枚ぬいた。

「俺は場の悪魔族となった？クラスター・ペンデュラム？とペンデュラム・トークン２体を生け贄に捧げる！！！」

「モンスターの通常召喚はもう出来ないはずやで！？」

俺の言葉に俺の場の３本の時計の針達が合わさり門の形へと変化した。

「全てを破壊せし幻の皇！今、現れて眼前の愚者を叩き潰せ！！現れろ！！！？幻魔皇ラビエル？！！！」

俺の場に蒼い体躯を持つ巨大な悪魔が現れた。

幻魔皇ラビエル　ＡＴＫ４０００

その姿はあらゆるモノに畏怖を抱かせ死を連想させる。

しかし俺にとってラビエルはもはや仲間という意識でしかなかった。

『幻夜、２人も怒っていますよ』
「分かった、引いたらすぐに召喚する」

どうやらこのカードはラルだったみたいだな。
不意にアバターが姿を変えていった。
場の最も攻撃力の高いモンスター……ラルになるのだろう。

邪神アバター　ＡＴＫ３１００→４１００

「アバターでアスモディウスに攻撃！【魂喰らい―ドレイン・ハート―】！」

俺の攻撃宣言にアバターはアスモディウスの元に行き黒い球体へと戻りアスモディウスをその身に飲み込んだ。

「ラルでセットモンスターに攻撃！【天地開闢破断撃（てんちかいびゃくはだんげき）】！！」
『はぁっっ！！！！！』

ラルはセットモンスターを手で叩き潰した。

「くっ！セットモンスターは？シャインエンジェル？！効果でデッキから？シャインエンジェル？を特殊召喚する！！」

シャインエンジェル　ＡＴＫ１４００

男の場に天使が現れた。

「俺はこれでターンエンドだ」

幻夜　邪神アバター　幻魔皇ラビエル　ＤＮＡ改造手術

「お、俺のターン、ドロー！」
男はラビエルとアバターに明らかに怯えていた。
まあ、このターンから魔法と罠は発動できるんだが…
「俺は？シャインエンジェル？を守備表示にしてモンスターをセットしてターンエンドだ！」
シャインエンジェル　ＡＴＫ↓ＤＥＦ
男　シャインエンジェル　セットモンスター１　神の居城－ヴァルハラ　セットカード１
慌て過ぎて？死者蘇生？の存在を忘れたな？
「俺のターン、ドロー！」
早いな、もう来たよ…
引いたカードを見て俺は小さく驚いた。
「俺は？幻銃士？を召喚！そして銃士トークンを２体特殊召喚！！」
幻銃士　ＡＴＫ１１００
銃士トークンＡ　ＡＴＫ５００
銃士トークンＢ　ＡＴＫ５００
男の顔が青ざめていった。

「そして？幻銃士？と銃士トークン２体を生け贄に捧げる！！」
悪魔達が集まり１つの塊となった。
「現れろ！？幻魔皇ラビエル？！！！」
『絶対に許さない…』
幻魔皇ラビエル　ＡＴＫ４０００
静かに怒りながらルビが現れた。
「ラルで？シャインエンジェル？に攻撃！【天地開闢破断撃】！！」
「くうっ！効果でデッキから？シャインエンジェル？を特殊召喚する！！」
シャインエンジェル　ＡＴＫ１４００
男の場に再び天使が現れた。
「ルビでセットモンスターに攻撃！【地界戦恐破軍裂（ちかいせんきょうはぐんれつ）】！！」
「だがセットモンスターは？メタモルポット？。よってお互いに手札を全て捨てデッキからカードを５枚ドローする」
ルビはセットモンスターに向けて踵落としを放ち破壊した。
お、運が良いな。
俺の手札は０枚、思わぬ手札補充が行えた。
「アバターで？シャインエンジェル？に攻撃！【魂喰らい―ドレイン・ハート―】！」

？シャインエンジェル？はアバターの体内へと沈んでいった。
そしてアバターは棘を創り出し男を貫いた。

「ぐぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

男　LP2800ー2700＝100

「しゃ、？シャインエンジェル？の効果でデッキから？ホーリーフレーム？を特殊召喚する！！」

ホーリーフレーム　ATK1500

男の場に光の輪が現れた。
まあ、何を出しても無意味だが…

「俺はカードを2枚セットしてターンエンド」

幻夜　幻魔皇ラビエル（ラル、ルビ）　邪神アバター　DNA改造手術　セットカード2

「俺のターン、ドロー……」

完全に意気消沈して男がカードを引いた。
何を諦めているんだか…

「サrーーー」
「サレンダーは許さないぞ。それにこの程度で絶望してるのか、呆れるほどの屑だ」

男がデッキの上に手を置こうとするのをラルとルビによって阻止して俺は言った。

「ぐっ……俺はモンスターをセット」

「この瞬間、俺は?終焉の焔?を発動。俺の場に黒焔トークンを2体特殊召喚する」

黒焔トークンA　ATK0

黒焔トークンB　ATK0

「カードを3枚セット、?ホーリーフレーム?を守備表示にする。ターンエンドだ……」

ホーリーフレーム　ATK→DEF

男　ホーリーフレーム　セットモンスター1　神の居城ーヴァルハラ　セットカード4　手札2

「俺のターン、ドロー!」

「この瞬間に罠発動!?威嚇する咆哮?!!!」

俺がデッキからカードを引くと同時に男の場のセットカードが開いた。

「残念、罠カード?トラップ・スタン?」

「何!!??」

しかし俺の発動した罠によって全てのセットカードに雷撃が走った。

これでこのターン罠は使用できない。

「そして俺は？邪神アバター？と黒焔トークン2体を生け贄に捧げる！！」

「あ、あああああ……」

黒焔トークンはアバターに飲み込まれ1つになった。

そして徐々にアバターに罅(ひび)が入っていった。

「現れよ！？幻魔皇ラビエル？！！！！」

アバターの罅が全体に広がるとアバターは砕け内部からラビエルが現れた。

幻魔皇ラビエル　ＡＴＫ４０００

『貴方(あなた)の敗因は1つ、私達を怒らせたことだよ～……』

笑顔でしかし怒りを孕(はら)んだ声音でエルは言った。

一気に潰すか。

「エルで？ホーリーフレーム？に攻撃！【天界蹂躙破神塵(てんかいじゅうりんはこうじん)】！！」

『潰れちゃえ～……』

エルはそう言いながら？ホーリーフレーム？を殴り潰し破壊した。

「次、ルビでセットモンスターに攻撃！【地界戦恐破軍裂】！！」

『とどめはラル姉さんですか…』

ルビは少しだけ残念そうに言いながらセットモンスターに踵落とし

を放った。

「セットモンスターは？ライトロード・ハンターライコウ？！リバース効果で？幻魔皇ラビエル？を破壊する！！」

『ふむ、良いカードです……が、甘いですね。幻夜！』

「分かってるよ！手札から？禁じられた聖杯？を発動！ライコウの効果を無効にする！！」

ラルの言葉に俺は頷き速攻魔法を発動した。

ライトロード・ハンターライコウ　ＡＴＫ２００→６００

守備表示故に攻撃力の上昇も意味なく破壊された。

「止めだ！ラルで直接攻撃！！【天地開闢破断撃】！！！！」

『私達の怒り、その身を持って知りなさい！！』

ラルは男を手で叩き潰しエネルギーの様な物を爆発させた。

ラルの手がどかされるとそこには男の使っていたカードとデュエルディスクが残っているだけだった。

デュエルが終わると３人はいつもの姿に戻った。

『幻夜に危害を与えようとするなんて許せないわよ』

『本当にそうだよね…』

『幻夜は私達が守るよ～……』

軽く怒りながらラルは言った。

「ありがとうな３人とも……」

「幻夜君……」

不意にはやてが話しかけてきた。
血が流れ過ぎてクラクラしてきたな…
3人は警戒を解かずにはやてを見た。

「なんだ……」
「幻夜君の持っとるカード達は危険すぎる…そう判断されたみたいや…」

苦々しくはやてはそう言った。
まあ、当然か。

「もしかしたら管理局の人が幻夜君のカードを奪いに来るかもしれへん……」
「どう……して教えてくれ……るんだ。はやても管理……局の1人じゃな……いのか？」

俺の言葉にはやては首を横に振った。

「私等のとこにそう言った指令はまだ来てへんよ。でも、幻夜君の事を傷つけてでも奪おうとする人がおるかもしれんのや……」
「私等……つまりはフェイトや……なのはだな？」

はやては無言で頷き肯定した。

「分かっ……た、気を付け……る事にする……」
『幻夜は私達が守るわ！』
「うん……幻夜君、ほんまにごめんな」

俺とラルの言葉にはやては小さく頷き悲しそうにそう言った。

……ヤバイ。

「悪いが寝るわ……」

「『『『え！？』』』」

そう言って俺は意識を手放した。

身体中いてえ……

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ？？？

「あれは危険すぎる」

「だが、あれほどの力だ。試す価値はあるだろう…」

お互いに顔は見えない。

しかし我等にそんな事は関係ない。

我等はただ同じ目的のために協力をしているだけなのだから。

「「「「「「我等が主となりえる者を探すために！！」」」」」」

そう宣言し我等は闇に消えた。

闇夜のデュエルと動きだす歯車（後書き）

空刀様、戎鴛様、ＺＥＲＯ様、テクノロジー様感想ありがとうございます。

竜王「やっと一軍が出せた…」

竜姫「だいぶ長いね」

幻夜「つーか普通に３人並んだよな」

竜王「現実（リアル）に再現できるけど？」

幻夜「完全にそれ特化じゃねえか…」

竜王「良いんだよ」

「どわあああああああ！！！！！！！」

竜王「おお？空刀様のところより聖夜、神咲が来ました」

竜姫「可愛い娘がキターＯ（≧≦▽≦≧）Ｏ」

神咲「え？きゃあああああ！？！？」

幻夜「犠牲者が…」

聖夜「いつつ…」

竜王「大丈夫か？はい傷薬」

聖夜「ありがとう」

幻夜「ん？穴…？」

「うわあああああああ！！！！！」

竜王「ワームホールでＺＥＲＯ様のところより優と有栖が来ました」

優「この送り方はなんとかならないのか？」

有栖「仕方がないことだね。っと自己紹介だったね。ボクの名前は神崎有栖だよ」

幻夜「俺は聖幻夜だ。よろしくな神崎」

竜王「にしてもマジでデッキの圧縮を考えないとな…」

優「どういうことだ？」

幻夜「作るデッキのほとんどが６０枚になっちまうんだ」

有栖「余分なカードが多いをじゃないかい？」

竜王「一応考えているんだけどな…例えば今回の幻魔デッキはラビエルとアバターの召喚に特化させてるし…」

幻夜「？メタボ・サッカー？とか入れてるもんな」

竜王「?二重召喚?と組み合わせてるんだよ」

優「んで、デッキの枚数が６０枚になると…」

幻夜「まあ、上手く回れば今回みたいになるんだよな」

有栖「難しいところだね」

竜姫「うふふふ～♪」

神咲「……キュウッ」↑気絶

聖夜「どんだけ力が強いんだよ……」

竜王「まあ、デッキ構成は後で考えよう。遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》　続きます」

盗み聞きとタッグデュエル（前書き）

更新が遅れてしまいまして申し訳ありませんでした。

また、今回の話しにオリカのフラグがあります。

そして今回の話しのデュエルは全て1ターンキルです。

おかしい点などがありましたら指摘してください。

それでは本編をどうぞ。

盗み聞きとタッグデュエル

ｓｉｄｅ第３者視点
朝、デュエルアカデミア

「制裁タッグデュエルやて！？」
「うん、十代君と翔君、それと幻夜君が夜に廃寮に入ったからだって」

なのはの言葉にはやては驚き大きな声を出した。
周囲の生徒は何事かとはやての方を見ていた。

「なのはちゃん、それほんまなんか？」
「本当だよ。十代君が翔君と話しているのを聞いたから」
「あれ？幻夜は？」

なのはの言葉にフェイトが疑問を持ち尋ねた。
その言葉にはやては顔を曇らせた。

「幻夜君はまだ起きてへん。眠ったままなんや」
「そう…なんだ」

はやての言葉にフェイトは眠っている幻夜の姿を思い出したのか俯いた。
昨日の夜に倒れてから幻夜はまだ目を覚ましていないのだ。

「幻夜君が夜に外出したんは私等のせいやのに…」
「うん…」

悔しそうに呟くはやてになのははは頷いた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅラル

「う……」

『幻夜！？』

呻き声が聞こえ私は布団に寝ている幻夜を見ました。

しかし、幻夜は呻き声をあげただけで起きてはくれませんでした。

『幻夜…』

『ラル姉さん…ちゃんと休まなきゃ…』

ルビが心配そうに言いました。

その後ろではエルも心配そうに私を見ていました。

『……休まなきゃ無理矢理にでも休ませそうね。分かったわ、でも幻夜に何かあったら起こしてちょうだい？』

『分かっています…』

『ゆっくり休んでね～……』

私はルビとエルにそう言ってカードの中に戻りました。

幻夜、起きてちょうだいね？

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ八神はやて

「とりあえず幻夜君のタッグデュエルのパートナーは私がやるで。幻夜君がこうなったのも私が呼びだしたからや。私に責任がある」

「はやてちゃん…」

「はやて……決めたんだね？」

私が自分の思った事を口にして頷きました。
これは私のケジメや。

「となったら校長センセに報告してこなアカンな」
「私も一緒に行くよ」
「私も」

私が立ち上がると2人も立ち上がりました。
ほな、一緒にいこか。

「「「話は聞かせてもらった！！！！！」」」
「なんやなんや！？」

私等の前にいきなりブルーの制服を着た男子が3人現れました。
まさか私等の話を聞いてたんか？

「あんなオシリスレッドのパートナーなんてやめたまえ！」
「あんなオシリスレッドと関わるのは止めるんだ！」
「鞭を持って僕をいじめてくれ！！」

……あれ？
1人変な事を言った気がしたで？
見るとフェイトちゃんが若干ひいていました。

「あなた達にそんな事を言われる筋合いは無いと思うよ？」
「そうや、私等は自分達で友人を決めてるだけや！」
「あの…何で私？」

なのはちゃんの言葉に私も答えました。

フェイトちゃんは涙目になっています。

「「「「なら、僕達とデュエルだ！！」」」」

「どうやらやるしかないみたいやな…いくで！なのはちゃん、フェイトちゃん！！」

「うん！」

「分かったの！」

男子生徒達が横一列に並び言いました。

「「「「「「デュエル！」」」」」」

はやて　ＬＰ４０００

ＶＳ

男子生徒Ａ　ＬＰ４０００

「僕の先攻！ドロー！」

そう言って男子生徒はデッキからカードを引きました。

レディーファーストっちゅーもんを知らんのか？

「僕は？火霊使いヒータ？を守備表示で召喚！」

男子生徒の場に杖を持った赤髪の少女が現れました。

火霊使いヒータ　ＤＥＦ１５００

……アホなんか？

リバース効果を持つモンスターを表側守備表示で召喚するなんて。

「カードを一枚セットしてターンエンド！」

男子生徒Ａ　火霊使いヒータ　セットカード１

「私のターン、ドロー！」

そう言って私はデッキからカードを引きました。

この手札なら…

「私の場にカードが存在しないときこのカードは特殊召喚することができる！？ＢＦ―逆風のガスト？を特殊召喚！！」

ＢＦ―逆風のガスト　ＡＴＫ９００

私の場に鳥の足と羽根を持った男性が現れました。

「さらに私の場に【ＢＦ】と名のついたモンスターが存在するときこのカード達は特殊召喚することができる！！？ＢＦ―黒槍のブラスト？？ＢＦ―疾風のゲイル？を特殊召喚！！！」

ＢＦ―黒槍のブラスト　ＡＴＫ１７００

ＢＦ―疾風のゲイル　ＡＴＫ１３００

ガストが口笛を吹くと槍を持った鳥と紫色の鳥が現れました。

不安要素は取り除かなな。

「私は手札から？サイクロン？を発動や！そのセットカードを破壊する！」

「？魔法の筒（マジック・シリンダー）？が！！！」

…表示形式変更系のカードやない！
破壊したセットカードを見て私は笑みを浮かべた。

「まだ、私はこのターン通常召喚を行っていない！？ＢＦ―蒼炎のシュラ？を召喚！！」

蒼炎のシュラ　ＡＴＫ１８００

これで私の勝ちや！

「シュラでヒータを攻撃！【蒼天炎】！」

シュラの放った羽根は途中で蒼い炎に変化してヒータを攻撃した。
ちゅーか、炎に倒される火霊使いって……
まあ、ええか。

「シュラの効果を発動や！このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊したときデッキから攻撃力１５００以下の【ＢＦ】と名のついたモンスター１体を特殊召喚することができる！私はデッキから？ＢＦ―尖鋭のボーラ？を特殊召喚！！」

尖鋭のボーラ　ＡＴＫ１３００

これで止めや！

「ガスト、ブラスト、ゲイル、ボーラで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！【漆黒の四烈風】！！」
「う、うわあああああああああああ！！！！」

男子生徒Ａ　ＬＰ４０００－９００－１７００－１３００－１３００＝－１２００

軽くオーバーキルしてもうたけど……

まあ、良いやろ。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ高町なのは

なのは　ＬＰ４０００

ＶＳ

男子生徒Ｂ　ＬＰ４０００

「僕の先攻、ドロー！」

そう言って男子生徒はデッキからカードを引きました。

先攻、取られちゃったの…

「僕はモンスターをセット。カードを１枚セットしてターンエンド」

男子生徒Ｂ　セットモンスター１　セットカード１

「私のターン、ドロー！」

相手のデッキが分からない以上迂闊（うかつ）に攻撃はできない……

でも、この手札なら！

「私は？神獣王バルバロス？を召喚！！」

神獣王バルバロス　ＡＴＫ３０００
私の場に槍を持った獅子が現れました。
「レベル８のモンスターを生け贄無しに召喚！？」
「バルバロスは生け贄無しで召喚した場合、攻撃力は１９００になります！」
神獣王バルバロス　ＡＴＫ３０００→１９００
「そして私は手札から？ハリケーン？を発動！場の魔法、罠カードを全て手札に戻します！」
「くっ！セットカードが…」
これで残るはセットモンスターだけ！
「さらに私は手札から？禁じられた聖杯？と？突進？を発動！」
女性が現れてバルバロスに水を献上しました。
神獣王バルバロス　ＡＴＫ１９００→３４００→４１００
「攻撃力がもとに……いや、それ以上に！？」
「？禁じられた聖杯？はモンスターの効果を無効にするの。だから、攻撃力が下がる効果が消えて攻撃力が戻ったんだよ！」
驚く男子生徒に私は説明しました。
最後にこのカード！
「そして私は手札を１枚墓地に捨てて手札から？死者への手向け？

を発動！対象はそのセットモンスター！！」
「何！？」
セットモンスターに黒い靄が絡み付き破壊しました。
「？マシュマロン？が！！！」
戦闘破壊のできないモンスター！
危なかったの。
「これで安心して攻撃できるの！バルバロスで直接攻撃！【トルネード・シェイパー】！！」
「そ、そんなあああああああああああ！！！！」
男子生徒Ｂ　ＬＰ４０００－４１００＝－１００
今回は特に手札が良かったの♪
ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅフェイト・Ｔ・ハラオウン
フェイト　ＬＰ４０００
ＶＳ
男子生徒Ｃ　ＬＰ４０００
「僕が勝ったら鞭で叩いてくれ！ドロー！」
「ひぃっ！？」
何で私がこんな目に！？
鼻息の荒い男子生徒に私は涙目になりました。

「僕は？ジェネティック・ワーウルフ？を召喚！」

ジェネティック・ワーウルフ　ＡＴＫ２０００

攻撃力２０００……

通常召喚できる通常モンスターだと最高の攻撃力を持つモンスター……

「そして装備魔法？デーモンの斧？？ビッグバン・シュート？を装備する！！」

ジェネティック・ワーウルフ　ＡＴＫ２０００→３０００→３４００（貫通効果付与）

攻撃力３４００！？

上級モンスターにもなかなかいないよ！？

「そしてカードを２枚セットしてターンエンド！」

男子生徒Ｃ　ジェネティック・ワーウルフ　デーモンの斧　ビッグバン・シュート　セットカード２

「私のターン、ドロー！」

あまり良い手札じゃない…

でも、このカードで！

「私は手札から？手札抹殺？を発動！互いに手札を全て墓地に捨てて捨てた枚数分デッキからカードをドローする！！」

「手札事故でも起こしたのかい？」
私が発動したカードを見て男子生徒は言いました。
確かにあまり良くはなかったけど…
そう思いながら私は墓地に捨てた枚数、５枚のカードをドローしました。

「これなら……」

ドローしたカードを見て私は呟きました。

「私は手札の？ライトロード・ビースト　ウォルフ？を墓地に捨て、手札から？ソーラー・エクスチェンジ？を発動！」

手札のモンスターカードを墓地に捨てて私は魔法カードを発動しました。

「デッキからカードを２枚ドロー！そしてその後、デッキからカードを２枚墓地に送る」

引いたカードは…
？カオス・ソーサラー？と？裁きの竜（ジャッジメント・ドラグーン）？！！

「私は？裁きの竜？を特殊召喚する！！このカードは自分の墓地に【ライトロード】と名のついたモンスターが４種類以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる！！」

裁きの竜　ＡＴＫ３０００

「いつの間にそんなに墓地に……まさかっ！！」

「そう！最初の？手札抹殺？と？ソーラー・エクスチェンジ？の時だよ！」

驚く男子生徒に私は説明しました。

「？裁きの竜？の効果を発動！ライフを１０００支払いこのカード以外の場のカードを全て破壊する！【裁きの光―ライトニング・ジャッジメント―】！！」

「何だって！？」

？裁きの竜？は光を放ってカードを破壊していきました。

セットされていたカードは……

ミラーフォースに？魔法の筒？！？

あ、危なかった…

「そして私は？ライトロード・ウォリアー　ガロス？を召喚！」

ライトロード・ウォリアー　ガロス　ＡＴＫ１８５０

これで私の勝ちだね。

「？裁きの竜？とガロスで直接攻撃！【光統べし裁き―ロード・オブ・ジャッジメント―】！！」

「うわあああああああああああ！！！！」

男子生徒Ｃ　ＬＰ４０００－３０００－１８５０＝－８５０

……負けたのに何だか嬉しそう！？

怖いよ……

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ第３者視点
「皆ぴったり同時に勝ったみたいやな？」
「にゃははは、手札が良かったの♪」
「怖かった…」

はやての言葉になのは、フェイトは答えた。
フェイトの言葉に２人は苦笑いを浮かべていた。

「ほな、校長室に行こか」
「そうだね」
「うん」

そして３人は校長室に向かって歩き始めた。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ聖幻夜
気が付けば俺は広い空間にいた。
ここはどこだ？

「たしか……あの男とのデュエルに勝って…」

そのまま眠ったんだよな？

「ん？」

不意に影が現れたので周囲を見ると巨大な石板が出現していた。
５Ｄ’ｓで似たようなものを見た気が…

「……あ～、そう

だそうだ。思い出した。遊星がシューティング・スターのカードを手に入れた石板に似てるんだ」

俺は手を叩き頷いた。
でも何で俺の目の前に？

「しかも……3枚も」

どういう事なんだか…
シューティング・スターもスカーレッド・ノヴァもデッキに入れてるぞ？
しかもスカーレッド・ノヴァは3枚持ってるし…
何故か当たったんだよな…

「う～ん…とりあえずは様子を見るか」

そう決めて俺は床に座った。
それにしても…

「描(えが)かれているのが3枚とも女性なんだな？」

石板に描かれている女性はそれぞれに違った美しさを感じる。
例えば左の石板、この女性…と言うよりも少女と言った方が良いのか？
とりあえずこの石板からは満天の星空を見たときのような感動を感じ取ることができる。
次に右の石板、こちらの女性からはまるで太陽のような暖かさと力強さを感じ取ることができる。
そして最後に目の前の石板、この女性からはなんと言うか説明が難しいのだが、安心感と言うか温もりと言うかそんなものを感じ取る

ことができる。

「不思議な女性達だな…」

そういえばラル達はどうしただろう？
いきなり俺が寝たから驚いたかな？
心配はかけたくないなぁ……
ってこんなとこにいる時点で心配をかけてるかもなぁ……

「へ！？うわぁああああああああああ！！！！！」

いきなり足元が消え俺は落ちていった。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ第３者視点

「うわぁああああああああああああ！！！！！」
『幻夜！？』

叫びながら飛び起きた幻夜にラルは驚き近寄った。

「はぁ…はぁ…夢か…」
『幻夜…起きるのが遅いわよ…このお寝坊さん♪』

ラルは幻夜が普通に起き上がるのを見て涙を流しながらそう言った。
その後ろにはルビ、エルも涙目で立っている。

「ラル、ルビ、エルおはよう。心配をかけたかな？」
『当たり前よ！』
『幻夜、遅いです…！』
『幻夜～……！』

幻夜は3人にそう言った。
その言葉にラルは笑顔で答えルビは少しむくれエルは幻夜に飛び付いた。
飛び付いたエルをルビは羨ましそうに見ていた。

「ラル、俺が寝てからどれくらい経ったんだ？」
『えっと…3日ね』

ラルの言葉に幻夜は少しだけ驚いた表情を浮かべた。
不意にドアを叩く音が聞こえた。

「皆、一応消えていてくれ」
『分かったわ』
『はい…』
『りょうかい～……』

幻夜の言葉に3人は素直に従い姿を消した。
そして幻夜はドアを開けた。

「十代？どうしたんだ？」
「幻夜！タッグデュエルのパートナーは決めたか？」

ドアを開けると十代が立っており幻夜に尋ねた。
十代の言葉に幻夜は首を傾げた。
さっきまで寝ていたのだから何も知らないのは当然だろう。

「いや、決めていないが…」
「そっか！じゃあちょうど良かった！お～い！幻夜はまだパートナーを決めてないってさ！」

幻夜の言葉に十代に外を向いて大きな声で言った。
どうやら外に誰かいるらしい。
十代の様子に幻夜はもう一度首を傾げた。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ聖幻夜
いきなり十代が外に向かって大きな声を出したが…
誰かいるのか？
不意に階段を駆け上がる足音が聞こえてきた。

「幻夜君！！」
「起きたんやな！！」
「大丈夫！？」

足音が止んだかと思ったらなのは、はやて、フェイトの３人が同時に叫んできた。
非常にうるさい…

「んで？タッグデュエルのパートナーってのはどういうことだ？」
「じつはな？……」

俺が尋ねるとはやてが説明を始めた。
うわぁ……

「俺は廃寮に入ってねえのに…」
「俺も翔もちゃんと説明したのにクロノス先生がさ…」

俺の呟きに十代は申し訳なさそうに答えた。
どうすっかなぁ…

「パートナーねえ？」
「それやったら心配は無用や。私がパートナーになる」
俺の呟きにはやてが胸を張って答えた。
貧乳キャラだったらここで無い胸を張ったとか言うんだろうなぁ…
まあ、はやては別に貧乳って訳でもないが…
「セクハラっぽい電波を感じた気がしたで？」
「気のせいじゃないか？」
素早くはやてがこちらを向き聞いてきたので俺は無難に答えた。
「んで？はやてはどんなデッキを使うんだ？」
「私のデッキ？私のデッキは【ＢＦ】のデッキや」
【ＢＦ】か…
速効性、展開力、妨害等々、大概のことを行えるカード群達だな。
となると…
「同じ【ＢＦ】で行くべきか？……いや、むしろ別のデッキを……
……」
「幻夜はいくつデッキを持ってるの？」
「ちゅーか【ＢＦ】デッキを持ってるんかい！」
フェイトが尋ねてくるのと同時にはやてがど突いてきた。
デッキの数？
「え～っと…１１個だな」
「多くない！？」

俺の答えになのはは驚いていた。
そうか？
「う～む…ちなみにタッグデュエルはいつなんだ？」
「今日から４日後や」
俺の問いにはやてが答えた。
４日後か…
なら大丈夫だな。
「うっし、はやて。誰かとタッグデュエルするぞ」
「りょうかいや！ちなみにデッキは決まったんか？」
頷きながらはやては尋ねてきた。
「いや、決まってない。だから、いくつか試す」
「オッケーや」
「なら、俺と翔でデュエルしようぜ！」
俺の言葉にはやては頷き十代は言った。
十代と翔のタッグか。
「分かった。それじゃあ一旦外に出るぞ」
「おう！」
良い返事をしながら十代は頷いた。
そして俺達はレッド寮の前に並んだ。
「ルール説明だ。ライフは共有の８０００、使用する場は共有で五

ヶ所まで、エクストラデッキは共有するが互いにパートナーのエクストラデッキのカードは使用できない。墓地は共有しパートナーの墓地も使用できる。フィールド魔法は通常の２人での対戦と同じく１つまで、パートナーの置いたカードは自分のターンでも使用可能。チームメンバーに対するアドバイス行為は禁止。これでいいな？」

「「「分かった」」」

俺の説明に３人は頷き答えた。

「それじゃあ…」

「「「「デュエル！！」」」」

幻夜＆はやて　ＬＰ８０００
ＶＳ
十代＆翔　ＬＰ８０００

盗み聞きとタッグデュエル（後書き）

ＺＥＴ様、霊宮空刀様、蒼影様、テクノロジー様、感想ありがとうございます。

幻夜「大分かかったな…」

竜王「知らないカードの効果とかを調べたいのにＰＣが使えないんだよ…（泣）」

幻夜「おいおい…」

竜王「他にｍ――んぎゃ！？」

「なんか踏んだみたいだな？」

「いきなり飛ばさないでくれないかな？」

幻夜「優に神崎じゃないか」

優「おう、今回は緊急テレポートで来た」

有栖「おや？竜王さんは？」

竜姫「下をご覧くださーい♪」

優「は？うぉ！？」

有栖「竜王さん！？」

竜姫「緊テレの真下にいたんだよ☆」

竜王「……」

乱太「助けてくれー！」

神咲「♪～」

竜姫「ラブラブだね☆」

「失礼します」

幻夜「ん？誰か来たのか…って！ブラック・マジシャンにユベル！？」

竜姫「あれ？ユベル知ってるんだ？」

幻夜「ああ、たまに一軍に入れてるからな」

ユベル「そうなのかい？ありがとう」

竜王「うううう……」

竜姫「あ、起きた♪」

ユベル「何があったんだい？」

優「俺が踏み潰して…」

竜王「死にかけた…ん？ＺＥＴ様のとこの優に有栖？それに蒼影様のとこのユベルにマハード？」

マハード「大丈夫なんですか？」

竜王「一応ね。不意打ち過ぎて死にかけたけどさｗｗｗ」

幻夜「笑い事かよ…（呆）」

竜姫「？遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》？続きます♪」

幻夜「って、待て！！マハードってアテムの精霊じゃね！？」

マハード「そうですが」

幻夜「マジか！！！」

黒き羽根ＶＳＨＥＲＯ＆ロイド（前書き）

一月も更新してなかった…ｏｒｚ

十代のチートドローが書きにくいです…

それでは本編をどうぞ。

黒き羽根ＶＳＨＥＲＯ＆ロイド

ｓｉｄｅ第３者視点

幻夜＆はやて　ＬＰ８０００
ＶＳ
十代＆翔　ＬＰ８０００

「誰から行く？」
「あ、俺からで良いか？」

幻夜の呟きに十代は手を上げて答えた。

「分かった。一巡目は誰も攻撃できないからな」
「おう！ドロー！」

幻夜の言葉に頷き十代はデッキからカードを引いた。

「俺は？Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン？を守備表示で召喚！」

十代は自分の手札を見、少し考えるような表情をするとモンスターを召喚した。

Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン　ＤＥＦ２０００

「カードを１枚セットしてターンエンド」

十代　Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン　セットカード１　手札４

「どっちからにするんや？」
「まあまあ手札が良いから俺から行く。ドロー！」
はやての問いに幻夜は自分の手札を見てデッキからカードを引いた。
「自分の場にカードが存在しないときこのカードは特殊召喚することができる！？BF―逆風のガスト？を特殊召喚！！」
BF―逆風のガスト　ATK900
幻夜の場に鳥の足と羽根を持った男性が現れた。
最初に試すデッキは【BF】デッキらしい。
「俺は手札の【BF】と名のついたカードを墓地に送り？ブラックフェザー・シュート？を発動！」
幻夜は手札からカードを1枚引き抜き墓地に送ると手札のカードを発動した。
「相手の場の守備表示モンスターを墓地に送る！俺はクレイマンを選択する！」
「クレイマン！！」
クレイマンに黒翼の鳥が突撃しクレイマンは爆発した。
「そして俺は？BF―極北のブリザード？を召喚！」
BF―極北のブリザード　ATK1300
幻夜の場に名前とは違い白い翼を持つ鳥が現れた。

「ブリザードの効果を発動！自分の墓地のレベル４以下の【ＢＦ】と名のついたモンスターを守備表示で特殊召喚する！現れろ！？ＢＦ―熱風のギブリ？！！」

ＢＦ―熱風のギブリ　ＤＥＦ１６００

「レベル２？ＢＦ―逆風のガスト？とレベル３？ＢＦ―熱風のギブリ？にレベル２？ＢＦ―極北のブリザード？をチューニング！！」

ガストとギブリが光の玉へと変化し幻夜の場のブリザードが旋風を巻き起こし包み込んだ。

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！？ＢＦ―アーマード・ウィング？！」

ＢＦ―アーマード・ウィング　ＡＴＫ２５００

「１ターン目からッスか！？」

「【ＢＦ】の特権やな♪」

驚く翔にはやては笑いながら言った。

「俺はこれでターンエンド」

幻夜　ＢＦ―アーマード・ウィング　手札２

「ぼ、僕のターン、ドロー！」

そう言って翔はデッキからカードを引いた。

「（ここは守りを固める！）僕は？ジャイロイド？を守備表示で召喚！」

ジャイロイド　ＤＥＦ１０００

翔の場にヘリコプターの姿のロボットが現れた。

「カードを２枚セットしてターンエンド！」

翔　ジャイロイド　セットカード２　手札３

「私のターンやな、ドロー！」

はやてはデッキからカードを引いた。

「（幻夜君のアーマード・ウィングがいるお陰でこのカードは特殊召喚出来るんやけど…）」

はやては引いたカードを見て黙ってしまった。

実は、はやての手札にも？ＢＦ―逆風のガスト？が来ていたのだ。

「（まだ序盤やし何とかなるやろ）私は？ＢＦ―銀盾のミストラル？を守備表示で召喚！」

ＢＦ―銀盾のミストラル　ＤＥＦ１８００

「そしてカードを１枚セットしてターンエンドや！」

はやて　ＢＦ―銀盾のミストラル　セットカード１　手札４

「俺のターン、ドロー！」

そう言って十代はデッキからカードを引いた。

「俺は手札から?融合?を発動！手札の?Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン?と?Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ?を融合！！」

十代の背後に２人のヒーローが現れ１つになる。

「現れろ！？Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン？！！」

Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン　ＡＴＫ２１００

十代の場に緑の体躯で腕に深紅のドラゴンの頭を生やしたＨＥＲＯが現れた。

「フレイム・ウイングマン…だが、攻撃力はアーマード・ウィングには届かないぞ！」

「ＨＥＲＯにはＨＥＲＯの戦う場所があるんだぜ！」

幻夜の言葉に十代はカードを手札から引き抜き言った。

「俺はフィールド魔法?摩天楼ースカイスクレイパー?を発動！！」

十代がカードを発動すると４人の周囲からビルが生えてきた。

「ちっ！ＨＥＲＯ専用のサポートカードか！！」

「フレイム・ウイングマンでアーマード・ウィングを攻撃！！スカ

イスクレイパーの効果を発動！【Ｅ・ＨＥＲＯ】と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ１０００ポイントアップする！！」

Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン　ＡＴＫ２１００→３１００

「【スカイスクレイパー・シュート】！！！」

「ぐうっ！」

爆発が巻き起こり幻夜は腕を交差して顔を守った。

「フレイム・ウイングマンがモンスターを破壊したとき破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えるぜ！！！行けっ！……ってあれ？」

指示を出すが動かないフレイム・ウイングマンに十代は首をかしげた。

そして徐々に煙が晴れていく。

「残念だったな？十代」

幻夜＆はやて　ＬＰ８０００

「なっ！？ライフが減ってない！？」

幻夜の言葉に十代は驚いた。

そして煙が完全に晴れるとそこには無傷のアーマード・ウィングが存在していた。

「破壊されていない！？どう言うことッスか！？」
「アーマード・ウィングは戦闘では破壊されず戦闘ダメージを０にする」
「つまりは効果でしか破壊できひんっちゅーことや！」
驚く翔に幻夜とはやてが説明をした。
その説明を聞き十代は悔しそうな表情を浮かべた。
「くっそー、俺はこれでターンエンド！」
十代　Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン　セットカード１　摩天楼―スカイスクレイパー―　手札１
「俺のターン、ドロー！」
そう言って幻夜はデッキからカードを引いた。
「出来ることはあまり無いか…アーマード・ウィングでフレイム・ウイングマンに攻撃！【ブラック・ハリケーン】！！」
「スカイスクレイパーの効果を発動！！フレイム・ウイングマンの攻撃力を１０００ポイントアップさせるぜ！迎撃するんだフレイム・ウイングマン！！」
Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン　ＡＴＫ２１００→３１００
アーマード・ウィングは攻撃力の上昇したフレイム・ウイングマンに攻撃を放った。
幻夜＆はやて　ＬＰ８０００

しかしアーマード・ウィングの効果でダメージは受けず破壊もされない。

「へへっ！惜しかったな？」

「……いや、そうでもないさ」

笑う十代に幻夜は笑みを浮かべて答えた。

十代と翔は不思議そうに幻夜を見た。

「アーマード・ウィングの効果を発動。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを１つ置く事ができる！」

見ればフレイム・ウイングマンの胸元に黒い楔が打ち込まれていた。

「俺はこれでターンエンドだ！」

幻夜　ＢＦ―アーマード・ウィング　手札３

「僕のターン、ドロー！」

デッキからカードを引き翔は場を見た。

「（戦闘破壊できないモンスターと守備力がジャイロイドよりも上のモンスター…）僕は罠カード？チェーン・マテリアル？を発動するッス！！」

翔の場のセットカードが１枚開いた。

「このカードの発動ターンに融合召喚を行う場合、融合モンスターカードによって決められたモンスターを自分の手札・デッキ・フィ

ールド・墓地から選択してゲームから除外し、これらを融合素材とする事ができる！！ただし、このカードを発動したターン攻撃する事はできず、この効果で融合召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊されるッス」

翔の場のカードを見て幻夜は顔を強張らせた。
翔の場のジャイロイドから翔のデッキが【ロイド】であると認識したためこのカードの恐ろしさを知っているのだ。

「そして僕は手札から？ビークロイド・コネクション・ゾーン？を発動！！手札から？ドリルロイド？デッキから？スチームロイド？？サブマリンロイド？を選択しゲームから除外するッス！」

翔の背後に土竜のようなロボットと機関車のようなロボット、そして潜水艦のようなロボットが現れ１つになった。

「現れるッス！？スーパービークロイド―ジャンボドリル？！！」

スーパービークロイド―ジャンボドリル　ＡＴＫ３０００

「出てきやがった…」
「でも、攻撃は出来ひんしエンドフェイズに破壊されるんやろ？なら意味は無いなぁ」

頭を抱える幻夜とは対照的にはやては笑いながら言った。
どうやら？ビークロイド・コネクション・ゾーン？の効果を知らないらしい。

「？ビークロイド・コネクション・ゾーン？で融合召喚されたビークロイドは、効果で破壊されないんだよ…」

「んな！？」

幻夜の呟きを聞きはやては笑い顔から驚愕の表情に変化した。

「その通りッス！僕はこれでターンエンド！」

翔　ジャイロイド　スーパービークロイド―ジャンボドリル　セットカード１　手札２

「私のターン、ドロー！」

そう言ってはやては勢いよくデッキからカードを引いた。

「私は？ＢＦ―上弦のピナーカ？を召喚！」

ＢＦ―上弦のピナーカ　ＡＴＫ１２００

はやての場に弓を持った鳥が現れた。

「私の場に【ＢＦ】と名のついたモンスターがいる時、？ＢＦ―残夜のクリス？と？ＢＦ―白夜のグラディウス？を特殊召喚！！」

ＢＦ―残夜のクリス　ＡＴＫ１９００

ＢＦ―白夜のグラディウス　ＡＴＫ８００

さらにナイフを持った鳥が２羽現れた。

「レベル３？白夜のグラディウス？にレベル２？銀盾のミストラル？を、レベル４？残夜のクリス？にレベル３？上弦のピナーカ？を

チューニング！！！」

ミストラルとピナーカが光の輪となる。
そしてミストラルの輪にグラディウスが、ピナーカの輪にクリスが入り光輝く。

「ダブルシンクロ召喚！！？ＢＦＴ―漆黒のホーク・ジョー？？ＢＦ―煌星（きらぼし）のグラム？！！！」

ＢＦＴ―漆黒のホーク・ジョー　ＡＴＫ２６００

ＢＦ―煌星のグラム　ＡＴＫ２２００

「幻夜君！使わせてもらうで！アーマード・ウィングで？スーパービークロイド―ジャンボドリル？に攻撃や！！【ブラック・ハリケーン】！！！」

はやての指示にアーマード・ウィングはジャンボドリルに攻撃を仕掛けた。
しかし攻撃力が足らず弾き返されてしまった。

「アーマード・ウィングの効果で楔カウンターをジャンボドリルに打ち込む！！」

見るとジャンボドリルのちょうど眉間に黒い楔が打ち込まれていた。

「そしてアーマード・ウィングの効果を発動するで！！相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力をこのターンのエンドフェイズ時まで０にする！！」

「な！？今、楔カウンターはフレイム・ウイングマンと…」
「ジャンボドリルに打ち込まれているッス…」
次の瞬間、フレイム・ウイングマンは胸を押さえて苦しみ、ジャンボドリルは楔が打ち込まれた場所から輝が全身に広がり動けなくなっていた。
Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン　ＡＴＫ２１００→０
スーパービークロイド―ジャンボドリル　ＡＴＫ３０００→０
「行くで！ホーク・ジョーでフレイム・ウイングマンを攻撃！！」
「くっ！スカイスクレイパーの効果を発動！！フレイム・ウイングマンの攻撃力を１０００ポイントアップさせる！！」
Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン　ＡＴＫ０→１０００
攻撃力が上昇するもフレイム・ウイングマンは破壊されてしまった。
十代＆翔　ＬＰ８０００－１６００＝６４００
「ただで破壊されるわけにはいかないッス！罠カード発動！！？スーパーチャージ？！自分フィールド上に【ロイド】と名のついた機械族モンスターのみが存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。自分のデッキからカードを2枚ドローする！！」
翔の場のカードが開き効果が発動した。
「あっちゃー…攻撃する順番を間違えてもうたな。グラムでジャン

ボドリルを攻撃！！」

グラムの攻撃によってジャンボドリルは破壊された。
しかし？スーパーチャージ？のお陰で翔はデッキからカードを２枚ドローした。

十代＆翔　ＬＰ６４００－２２００＝４２００

「私はこれでターンエンドや」

はやて　漆黒のホーク・ジョー　煌星のグラム　セットカード１
手札２

「くぅー！！わくわくしてきた！！俺のターン、ドロー！！」

軽く跳び跳ねながら十代はデッキからカードを１枚引いた。

「俺は手札から魔法カード？天使の施し？を発動！デッキからカードを３枚ドローし、その後手札からカードを２枚捨てる！」

十代はカードを引き、手札を２枚墓地に捨てた。

「墓地の？Ｅ・ＨＥＲＯネクロダークマン？の効果を発動！！このカードが墓地に存在しているとき１度だけ俺はレベル５以上の【Ｅ・ＨＥＲＯ】と名のついたモンスター１体を生け贄なしで召喚する事ができる！！現れろ？Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン？！！！」

「な！？そんなカードいつの間に！？」

十代の場に金色の体をしたＨＥＲＯが現れた。

Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン　ＡＴＫ２６００

「へへっ！？天使の施し？の時にな！俺はさらに？強欲な壺？を発動！！デッキからカードを２枚ドローする！！」

十代は手札から魔法カードを発動しデッキからカードを２枚引いた。

「俺は？ミラクル・フュージョン？を発動！！墓地のネクロダークマンとワイルドマンを除外して融合！！現れろ！？Ｅ・ＨＥＲＯネクロイド・シャーマン？！！」

十代の場に錫杖を持ったＨＥＲＯが現れた。

どうやら？天使の施し？で墓地に捨てたもう１枚のカードは？Ｅ・ＨＥＲＯワイルドマン？だったらしい。

Ｅ・ＨＥＲＯネクロイド・シャーマン　ＡＴＫ１９００

「ネクロイド・シャーマンの効果を発動！！このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスター１体を破壊する！！その後、相手の墓地からモンスター１体を選択し、相手フィールド上に特殊召喚する！！俺はアーマード・ウィングを破壊して？ＢＦ―逆風のガスト？を特殊召喚するぜ！！」

「アーマード・ウィング！？」

ネクロイド・シャーマンが呪文を唱えるとアーマード・ウィングは苦しみだし破壊された。

そして幻夜の目の前に鳥の足と羽根を持った男性が現れた。

「行くぜ！！ネクロイド・シャーマンで？ＢＦ―煌星のグラム？を攻撃！！スカイスクレイパーの効果でネクロイド・シャーマンの攻

撃力は１０００ポイントアップする！！」

Ｅ・ＨＥＲＯネクロイド・シャーマン　ＡＴＫ１９００→２９００

「ガストの効果を発動！！相手モンスターが自分フィールド上に存在する【ＢＦ】と名のついたモンスターを攻撃する場合、その攻撃モンスターはダメージステップの間攻撃力が３００ポイントダウンする！！」

Ｅ・ＨＥＲＯネクロイド・シャーマン　ＡＴＫ２９００→２６００

ガストが羽ばたくとネクロイド・シャーマンに羽が貼り付き動きを鈍くした。

しかし攻撃力は依然としてグラムよりも上なのでグラムは破壊されてしまった。

幻夜＆はやて　ＬＰ８０００－４００＝７６００

「うっし！エッジマンで？ＢＦＴ―漆黒のホーク・ジョー？を攻撃！！」

「もう１度ガストの効果を発動！！」

Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン　ＡＴＫ２６００→２３００

再びガストが羽ばたくとエッジマンに羽が貼り付き動きを鈍くした。

「スカイスクレイパーの効果でエッジマンの攻撃力は１０００ポイントアップする！！」

Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン　ＡＴＫ２３００→３３００

「行け！エッジマン！！【パワー・エッジ・アタック】！！」
「ぐうぅっ！！」
エッジマンの攻撃によってホーク・ジョーは破壊された。
幻夜&はやて　ＬＰ７６００－７００＝６９００
「俺はこれでターンエンド！」
十代　Ｅ・ＨＥＲＯネクロイド・シャーマン　Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン　セットカード１　摩天楼―スカイスクレイパー―　手札１
「俺のターン、ドロー！！」
幻夜は引いたカードを見て考え始めた。
「（さて…十代の場にはネクロイド・シャーマンとエッジマン、それとスカイスクレイパーに１ターン目から伏せられているセットカード、そして翔の場にジャイロイド……それに対してこちらはガストが１枚…そう言えばはやても１ターン目からカードを伏せてたな…このカードは？）」
幻夜はデュエルディスクを操作してはやての場のセットカードを確認した。
「（？化け狸の葉っぱ？？知らないカードだな。効果は…）」
確認したカードを幻夜は首をかしげながら効果を読んだ。

「（ふむ…つーか、これはあれか？自分は狸ですと言っているのか？）」
「明らかに失礼なことを考えとるやろ…」
効果を読み終え幻夜ははやてを見た。
完全に思考が脱線している。
「気のせいだろ。俺は？ＢＦ―黒槍のブラスト？を特殊召喚する！このカードは自分の場に【ＢＦ】と名のついたモンスターがいるときに手札から特殊召喚できる！」
ＢＦ―黒槍のブラスト　ＡＴＫ１７００
幻夜の場に槍を持った鳥が現れる。
「そして、ガストとブラストを生け贄に捧げて？ＢＦ―激震のアブロオロス？を召喚！！」
ＢＦ―激震のアブロオロス　ＡＴＫ２６００
これで幻夜の手札は２枚になってしまった。
「アブロオロスでエッジマンに攻撃！！」
幻夜の指示にアブロオロスは手に持った棍棒でエッジマンに殴りかかった。
そして、アブロオロスとエッジマンを爆煙が包み込む。
「くっ！」

そして、煙が徐々に晴れていく。
煙が完全に晴れるとそこにはエッジマンだけが残っていた。
「あれ？同じ攻撃力なのになんでエッジマンがいるんだ？」
「アブロオロスと戦闘したモンスターは戦闘では破壊されない。そしてダメージ計算後に戦闘したモンスターを持ち主の手札に戻す」
幻夜が言うのと同時にエッジマンは突風に吹き飛ばされた。
「カードを1枚セットしてターンエンド」
幻夜　セットカード1　手札1
「僕のターン、ドロー！」
そう言って翔はデッキからカードを引いた。
「（僕の手札は5枚……あと1枚、あのカードを引ければ）僕は手札から？強欲な壺？を発動する！」
翔の場に緑色の壺が現れた。
そして翔はデッキからカードを2枚引く。
「（来た！）僕は手札の？ストライクロイド？？ステルスロイド？？ターボロイド？を墓地に送って？ソリッドロイドα？を特殊召喚！！」
翔の場に3体のロイドが現れ変形していく。
そして3体のロイドは1つとなりロボットに変形した。

ソリッドロイドα　ＡＴＫ２６００

「?ソリッドロイドα?は召喚したターンのエンドフェイズまで敵モンスター1体の元々の攻撃力分αの攻撃力をアップするけど今は関係ないね。アニキのネクロイド・シャーマンで直接攻撃(ダイレクトアタック)！！」

「「うわあああああ！！！！！」」

幻夜&はやて　ＬＰ６９００－１９００＝５０００

「続けて?ソリッドロイドα?で直接攻撃！！！【ソリッドビーム】！！」

「させるかよ！！罠カード発動！?コンフュージョン・チャフ?！1度のバトルフェイズ中に2回目の直接攻撃が宣言された時に発動する事ができる！！その相手モンスターは、直接攻撃した1体目の相手モンスターと戦闘しダメージ計算を行う！！つまりネクロイド・シャーマンと?ソリッドロイドα?でバトルだ！！」

?ソリッドロイドα?がいきなり揺れるとネクロイド・シャーマンの方を向きビームを放ちネクロイド・シャーマンを破壊した。

十代&翔　ＬＰ４２００－７００＝３５００

「くっ！ごめんよアニキ…」

「なぁに、気にしなくていいさ！」

謝る翔に十代は笑いながら答える。

「僕はこれでターンエンド」

翔　ジャイロイド　ソリッドロイドα　手札2

「私のターン、ドロー！」

はやては勢いよくデッキからカードを引いた。

「ここは耐えるしかないなぁ…私はモンスターをセットしてターンエンドや！」

はやて　セットモンスター１　セットカード１　手札２

「俺のターン、ドロー！」

十代は引いたカードを見て少しだけ思案顔になった。

「俺は手札から?融合回収(フュージョン・リカバリー)?を発動！墓地の?融合?と?Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ?を手札に加える！」

十代は手札から魔法カードを発動して墓地からカードを２枚手札に加えた。

「そして?融合?を発動！手札の?Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン?と?Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン?を融合！！」

十代の背後に２人のＨＥＲＯが現れ１つになる。

「現れろ！?Ｅ・ＨＥＲＯプラズマヴァイスマン?！！」

Ｅ・ＨＥＲＯプラズマヴァイスマン　ＡＴＫ２６００

「プラズマヴァイスマンでセットモンスターを攻撃！！」

セットモンスターに向けてプラズマヴァイスマンは雷を纏った拳で殴り付けた。
セットモンスターは？ＢＦ―逆風のガスト？だった。
「プラズマヴァイスマンは貫通効果を持ってるぜ！！」
「きゃあああああ！！！」
幻夜＆はやて　ＬＰ５０００－１２００＝３８００
「そして？ソリッドロイドα？で直接攻撃！！」
「ぐううううっっ！！！」
幻夜＆はやて　ＬＰ３８００－２６００＝１２００
「俺はこれでターンエンド！」
十代　Ｅ・ＨＥＲＯプラズマヴァイスマン　セットカード１　摩天楼―スカイスクレイパー―　手札１
「俺のターン、ドロー！」
幻夜は引いたカードを見て顔をしかめた。
「俺はカードをセットしてターンエンド」
幻夜　セットカード１　手札１
「僕のターン、ドロー！」

翔はデッキからカードを引き場を見た。

「僕は手札から魔法カード?サイクロン?を発動！対象は幻夜君の場のセットカード！」

「させへんで！！罠カード発動！?化け狸の葉っぱ?！魔法か罠１枚が破壊される時、別の魔法か罠に対象を変更できる！私は十代君の場のセットカードに対象を変更！！」

風が巻き起こり幻夜の場のセットカードを吹き飛ばそうとしたがセットカードがいきなり葉っぱに変化し、そして風は十代の場に向かいセットカードを破壊した。

「へへっ！破壊されたカードは?コーリング・マジック?！効果でデッキから速攻魔法?融合解除?をセットするぜ！」

笑いながら十代はデッキからカードを場にセットした。

「最初からずっとあれを伏せてたのかよ…」

「むしろ今まで破壊されなかった方が奇跡やな」

十代のセットカードに幻夜とはやては呆れ顔で呟いた。

「まぁ、良いや。罠カード発動！?強制脱出装置?！?ソリッドロイドα?を手札に戻す！！」

「くっ！」

?ソリッドロイドα?はミサイルに取り付けられ場から撃ち出された。

「なら僕は墓地の?ステルスロイド??ストライクロイド??ター

ボロイド?を除外して?ソリッドロイドβ?を特殊召喚!!」
再び3体のロイドが現れ変形していく。
そして3体のロイドは1つとなり先程とは違うロボットに変形した。
ソリッドロイドβ　ＡＴＫ２５００
「?ソリッドロイドβ?は召喚したとき、相手の場のモンスターを1体破壊する!けど、モンスターがいないからこの効果は不発になる。?ソリッドロイドβ?で直接攻撃!!!【ソリッドカッター】!!」
「俺達の……負け、か」
「みたいやな」
幻夜&はやて　ＬＰ１２００－２５００＝－１３００
?ソリッドロイドβ?の攻撃により2人のライフは0になった。
ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ聖幻夜
「ガッチャ!楽しいデュエルだったぜ!」
「そうだな」
ポーズを決める十代に俺は頷き答えた。
やっぱりこのデッキはまだ未完成だからかなぁ……ってこれじゃただの言い訳だな。
負けは負けだ。
【ＢＦ】同士でこうなるわけだから…
一軍で3人を出さないように注意すれば大丈夫かな?

「よし、デッキを他のと取り替えてもう一度だ」
「おう！」
「分かったで！」
「了解ッス！」
そしてデッキを取り替えて俺達は何度かデュエルを行った。

黒き羽根ＶＳＨＥＲＯ＆ロイド（後書き）

フレイス様、バラランシャ様、ＺＥＴ様、蒼影様、霊宮空刀様感想ありがとうございます。

幻夜「今回もだいぶ期間が空いたな」

竜王「十代のチートドローが難しいんだよ…」

竜姫「そう言えば漫画オリカが出たよね。出てきたオリカはこちら♪」

ＢＦ―上弦のピナーカ、ＢＦ―残夜のクリス、ＢＦ―白夜のグラディウス、ＢＦＴ―漆黒のホーク・ジョー、ＢＦ―煌星のグラム、化け狸の葉っぱ、ステルスロイド、ストライクロイド、ターボロイド、ソリッドロイドα、ソリッドロイドβ

竜王「漫画のクロウと三沢、翔のカードだな」

「「こんにちはー！」」

幻夜「お、誰か来たみたいだな」

竜王「フレイス様のところより早苗、ユウキが来ました」

早苗「なんだか初めて負けましたよね？」

竜王「まぁ、全戦全勝はつまらないからね」

ユウキ「【ＢＦ】は未完成なんですか？」

竜姫「持ってないカードが多いから効果が分からないんだよ」

幻夜「と言うよりも一軍の強化に重きを置いているから…」

竜王「３人を出しやすくさらに強化中～」

「「うわあああああ！！！」」

竜王「へ？ぎゃあああああ！？！？」

幻夜「ブラック・ローズ・ガイル！？」

竜姫「ＺＥＴ様のところより優、有栖が来ました」

優「痛っつ…」

幻夜「大丈夫か？」

有栖「そう言えばまた竜王が巻き込まれてるみたいだね？」

竜姫「パラメータをつけるなら幸運ーＳＳＳだね♪」

優「運が悪すぎじゃないか！？」

幻夜「なんつーか…慣れた」

「お邪魔するわよ」

幻夜「ん？凰雅？そっちの3人は……ピケルとクランに……」

「私はグングニールの精霊よ。レミリアと呼んでちょうだい」

「私はメイ！」

「僕はクィリィだよ」

竜姫「蒼影様のところよりメイ、クィリィ、レミリア、凰雅が来ました」

幻夜「グングニール！？明らかに人型なのに？」

凰雅「俺が攻撃名をネタに走ったからこうなっちまった…」

竜王「……でも、俺もネタに走ったデッキがあるぞ？グングニールとレヴァテイン、スカーレッド・ノヴァをいれたリアル紅魔デッキだ！」

レミリア「完全にネタじゃない…」

メイ「出せるの？」

竜姫「デブリと？スノーマン・イーター？でグングニールは出せるし、レヴァテインは基本的に出しやすい。スカーレッド・ノヴァに至っては元々出しやすく調整済み♪」

クィリィ「特化しすぎな気が…」

幻夜「なんだかなぁ…」

「どわあああああああ！！！！」

竜王「ん？危ね！霊宮空刀様のところより乱太が落ちてきました」

乱太「あ、明らかに避けたよな…」

竜王「ぶつかって死にたくないからな」

竜姫「と言うより飛べないの？」

幻夜「悪びれもせずに…」

乱太「飛べるはずなんだが何故かここでは飛べないんだよ」

竜王「ふ～む…不思議だな」

竜姫「とりあえずこの辺で、？遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》？続きます♪」

竜王「タグに更新遅めって追加しよう…」

制裁タッグデュエル（前書き）

竜王「な～にっかな～！　な～にっかな～！」

竜姫「今話の最強カードはこれ！」

天刑王（てんけいおう）　ブラック・ハイランダー
シンクロ・効果モンスター
星７／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２３００
悪魔族チューナー＋チューナー以外の悪魔族モンスター１体以上
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いにシンクロ召喚をする事ができない。
１ターンに１度、装備カードを装備した相手モンスター１体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターに装備された装備カードを全て破壊し、破壊した数×４００ポイントダメージを相手ライフに与える。

竜王「シンクロ召喚を封じられる上に相手の装備魔法を破壊できるぞ！」

竜姫「ただし魔法、罠、モンスター効果に耐性が無いから注意が必要よ」

竜王「次もやる？」

竜姫「気分次第ね。それでは本編をどうぞ」

制裁タッグデュエル

ｓｉｄｅ聖幻夜

「さ～て、俺達の番だな」

「せやね。十代君達が勝ったんやから私らも勝とう！」

制裁タッグデュエルが始まり十代＆翔ＶＳ迷宮兄弟がデュエルし勝利し俺とはやては決闘場（デュエルフィールド）に向かう。

つーか迷宮兄弟出てたんだ？

「ほんで？　あれから結構デュエルしたけどデッキは決まったんか？」

「ん、まあ一応な」

と言うか迷宮兄弟が相手なら出し惜しみは要らないし一軍で良いよな。

実際、アバターで三魔神の効果は無意味だし。

「お、お疲れ！」

「おう、次はそっちだな！　頑張れよ！」

決闘場に向かう途中で俺達は十代と翔に出会った。

俺と十代は拳をぶつけ合い別れる。

「ぬぐぐぐ……それで～は、制裁タッグデュエル２試合目を開始するの～ね！」

何だかクロノスが悔しそうにしながら宣言をする。

十代と翔が勝ったからか？

「先程は油断したが……」
「同じ過ちは繰り返さん……」
「「いざ勝負！！」」

わざわざあんな風に喋る必要はあるのか？
迷宮兄弟を見て俺は疑問に思った。

「「「「デュエル！！」」」」

幻夜＆はやて　ＬＰ８０００
ＶＳ
迷宮兄弟　ＬＰ８０００

「私の先攻、ドロー！」

迷宮兄弟の迷の字が書いてある奴がデッキからカードをドローする。
めんどくさいから迷と宮と呼ぶことにしよう。

「私は？地雷蜘蛛？を召喚する！」

地雷蜘蛛　ＡＴＫ２２００

迷の場に巨大な蜘蛛が現れた。

『気色が悪い…』

！？

不意に制服のポケットからルビの声が聞こえてきた。
慌ててポケットを覗くと中には小さくなったラル、ルビ、エルの姿

があった。
小さくもなれるのかよ……
「カードを1枚セットしターンエンド！」
迷　地雷蜘蛛
　セットカード1
　手札4
とりあえずラル、ルビ、エルが小さくなっているのは後で尋ねることにしよう。
「私のターン、ドロー！」
そう言いはやてはデッキからカードをドローする。
【BF】なら場に【BF】以外のカードが無い方が楽だろうと相談した結果だ。
「私の場にカードが存在しない場合、手札から?.BF—逆風のガスト?.を特殊召喚することができる！」
BF—逆風のガスト　ATK900
「そして?.BF—東雲のコチ?.を召喚や！」
BF—東雲のコチ　ATK700
「レベル2?.BF—逆風のガスト?.にレベル4?.BF—東雲のコチ?.をチューニング！」

ガストとコチは半透明になり飛び上がる。
コチは輪となりその中をガストが潜り抜ける。
「漆黒の力！　大いなる翼に宿りて、神風（しんぷう）を巻きおこせ！シンクロ召喚！　吹きすさべ、？ＢＦ－アームズ・ウィング？！」
ＢＦ－アームズ・ウィング　ＡＴＫ２３００
「私はこれでターンエンドや」
はやて　ＢＦ－アームズ・ウィング
手札４
流石は【ＢＦ】と言ったところだな。
もうシンクロ召喚したよ……
「私のターン、ドロー！」
そう言い宮はデッキからカードをドローする。
「私は？カイザー・シーホース？を召喚！」
カイザー・シーホース　ＡＴＫ１７００
「更に私は？生け贄人形（ドール）？を発動！　これにより、場の地雷蜘蛛を生贄に――？水魔神－スーガ？を特殊召喚！」
水魔神－スーガ　ＡＴＫ２５００
１体目の魔神か……

攻撃力はそこまで驚異ではないんだが、効果がウザイな。
「私はカードを1枚セットしターンエンド」
宮　カイザー・シーホース　水魔神ースーガ
セットカード2
手札2
「さて……俺のターン、ドロー」
場を眺めながら俺はデッキからカードをドローする。
「モンスターとカードを2枚セットしてターンエンド」
幻夜　BFーアームズ・ウィング　セットモンスター
セットカード2
手札3
「何もできないとは哀れ。私のターン、ドロー！」
そう言い迷はデッキからカードをドローする。
哀れとか大きなお世話だ！
「私は？カイザー・シーホース？を生け贄に？雷魔神ーサンガ？を召喚する！」
雷魔神ーサンガ　ATK2600
2体目…
つーか、それは手札事故じゃないのか？

「スーガでアームズ・ウィングを攻撃！」
「罠発動！　？ガード・ブロック？！　戦闘ダメージを０にしデッキからカードをドローする！」
スーガの攻撃によりアームズ・ウィングは破壊されてしまった。
「サンガでセットモンスターを攻撃！」
「セットモンスターは？ダーク・リゾネーター？このモンスターは１ターンに１度だけ戦闘では破壊されない」
サンガの攻撃を受けた？ダーク・リゾネーター？は軽く吹き飛ばされバウンドしたが起き上がり俺の前に戻ってきた。
「ならば私はこれでターンエンド」
迷　水魔神―スーガ　雷魔神―サンガ
　セットカード２
　手札４
「私のターン、ドロー！」
はやてはデッキからカードをドローする。
「私は？ＢＦ―上弦のピナーカ？を召喚！」
ＢＦ―上弦のピナーカ　ＡＴＫ１２００
はやての場に弓矢を持った鳥が現れる。

「さらに場に【ＢＦ】がいるとき手札から？ＢＦ―銀夜のクリス？を特殊召喚！」

ＢＦ―銀夜のクリス　ＡＴＫ１９００

「またしても２体のモンスターを揃えるとは…！」

「そして行くで！レベル４？ＢＦ―銀夜のクリス？にレベル３？ＢＦ―上弦のピナーカ？をチューニング！！」

クリスが光の玉へと変化しはやての場のピナーカが旋風を巻き起こし包み込んだ。

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！　シンクロ召喚！　？ＢＦ－アーマード・ウィング？！」

ＢＦ―アーマード・ウィング　ＡＴＫ２５００

現れるのは黒き装甲に身を包んだ鳥の戦士。

「アーマード・ウィングでサンガに攻撃や！　【ブラック・ハリケーン】！！」

「攻撃力はサンガの方が上、自爆をするつもりか？」

はやての言葉に迷が笑いながら言う。

効果をよく知らないのか？

「アーマード・ウィングは戦闘では破壊されずダメージは０になる！」

「無意味なことを…」
「それはどうかな？」
早合点をする宮に俺は呟く。
「アーマード・ウィングの効果を発動。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを１つ置く事ができる！」
見るとサンガの眉間に漆黒の楔が突き刺さっていた。
「これでターンエンドや」
はやて　ダーク・リゾネーター　ＢＦ―アーマード・ウイング
セットカード１
手札３
「私のターン、ドロー！」
そう言い宮はデッキからカードを１枚ドローした。
「ふむ…私は手札を１枚墓地に捨て？ライトニング・ボルテックス？を発動する！」
「げっ！？」
凄まじい雷撃と共に？ダーク・リゾネーター？とアーマード・ウィングが破壊された。
「さらに私は？死者蘇生？を発動する！　蘇れ、？風魔神―ヒューガ？！！」

風魔神―ヒューガ　ＡＴＫ２４００

３体揃いやがった……

しかもこっちの場には俺のセットしたカードしかない。

「スーガ、サンガ、ヒューガで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！　【流水波】【雷衝弾】【魔風波】！！」

「うわあああああ！！」

「きゃあああああ！！」

水が迫り雷撃弾が炸裂し突風が巻き起こる。

幻夜&はやて　ＬＰ８０００－２５００－２６００－２４００＝５００

「ふふふ、もはや風前の灯。私はこれで――」

「この瞬間、速攻魔法？終焉の焔？を発動！！」

宮がエンド宣言をする前に俺はセットカードを発動した。

「俺の場に黒焔トークンを２体特殊召喚する！」

俺の場に黒い焔の塊が２つ出現した。

黒焔トークンＡ　ＡＴＫ０

黒焔トークンＢ　ＡＴＫ０

「攻撃する前に発動すればダメージを減らせたものを……私はこれでターンエンド！」

宮　水魔神―スーガ　雷魔神―サンガ　風魔神―ヒューガ
セットカード２
手札０

「俺のターン、ドロー！」

俺はデッキからカードを１枚ドローした。

「俺は？暗黒界の雷？を発動する。右側のセットカードを破壊だ」
「ぬぅぅ！？　ミラー・フォースが破壊されたか……」

ミラフォか、運が良かったかな？

「その後、手札を１枚墓地に捨てる。墓地に捨てた？暗黒界の尖兵ベージ？の効果を発動。手札から墓地に捨てられたとき場に特殊召喚する」

暗黒界の尖兵ベージ　ＡＴＫ１６００

これで３体揃ったな。
まぁ、ラル、ルビ、エルは召喚できないから今回は入れてないけど……

「俺は場の３体のモンスターを生け贄に捧げる！」
「「「「さ、３体の生け贄！？」」」」

俺の言葉に決闘場にいる全員が驚き声を発する。

「これが悪夢だ……現れろ！　？邪神（じゃしん）アバター？！！！」

ベージと黒焔トークンが闇となり１つに合わさる。

邪神アバター　ＡＴＫ？？？

「攻撃力が決まっていないだと？」

「アバターの攻撃力は場の最も高い攻撃力＋１００となる！！　【もう一人の自分―ドッペル・ゲンガー―】！」

俺の言葉に反応してアバターは姿を変えていった。

邪神アバター　ＡＴＫ？？？→２７００

やがてアバターはサンガの姿へと変化した。

「アバターでスーガを攻撃！　【魂喰(たま)らい―ドレイン・ハート―】！」

俺の言葉にアバターはスーガに近づき取り込もうとする。

「甘いわぁ！　スーガの効果を発動！　戦闘ダメージ計算時、このカードを攻撃するモンスターの攻撃力を１度だけ０にする！　【リフレクション】！！」

スーガはアバターに向けて大量の水を吐き出した。

大量の水によってアバターの姿はもとの球体に戻る。

邪神アバター　ＡＴＫ２７００→０

「ははははは！これで我らの勝利だ！」

「「残念でした。俺（私）達のアバターの力を嘗めないことだね【もう一人の自分―ドッペル・ゲンガー―】！！」」

邪神アバター　ＡＴＫ０→２７００

アバターは俺とはやての言葉に反応するかのように素早く再びサンガの姿に変化した。

「なんだと！？　ぐあああああ！？」

迷宮兄弟　ＬＰ８０００－２００＝７８００

「ど、どういうことだ！？」

「アバターは攻守が常に変動し、最後に適用し計算する永続効果を持つため、他のカードの攻守の増減を受けない！！」

驚き慌て叫ぶ宮に俺は答える。

その説明にはやても頷いていた。

「くっ…ならば罠カード発ど――反応しない！？」

「甘い甘い！　アバターの召喚に成功したとき、相手ターンで数えて２ターンの間、相手は魔法・罠カードを発動できない！！」

セットしてあるカードを発動しようと迷がデュエルディスクを操作するが反応がなく驚く。

「俺はカードを１枚セットしてターンエンド」

幻夜　邪神アバター

セットカード１

手札１

「くっ…私のターン、ドロー！」

悔しげに呻き迷はデッキからカードを１枚ドローした。

「っ！　……ふ、ふはははは！　そのようなカードがあることには驚いた。が、封じれるのは魔法、罠カードのみ！！」

ドローしたカードを見、迷は笑う。
どうやら良いカードを引いたみたいだな。

「私は手札から？ならず者傭兵部隊？を召喚！」

ならず者傭兵部隊　ＡＴＫ１０００

迷がカードをセットすると場にガラの悪い男達が現れた。
ならず者か、相性の悪いカードの内の１枚だな。
他には？異次元の女戦士？とか？カオス・ソーサラー？とか……

「私はこのカードをリリースして効果を発動する！！　フィールド上に存在するモンスター１体を選択して破壊する！！　これならば防げまい！！」

場のガラの悪い男達が光となり消え、アバターに向かってくる。
まぁ、そのていど予想してないわけ無いがな。

「罠カード発動！　？闇の幻影？！　場の闇属性モンスターを対象にするモンスター効果、魔法、罠カードの発動を無効にし破壊する！！」

「くっ……サンガとヒューガを守備表示にしてターンエンド」

雷魔神―サンガ　ＡＴＫ↓ＤＥＦ

風魔神―ヒューガ　ＡＴＫ↓ＤＥＦ

迷　雷魔神―サンガ　風魔神―ヒューガ

セットカード

手札４

「私のターン、ドロー！」

そう言ってはやてはデッキからカードをドローした。

このターンでアバターの効果は終わるな。

「アバターでヒューガを攻撃！　【魂喰らい―ドレイン・ハート―】！！」

アバターはヒューガに近づきその身に呑み込んだ。

「ぬぅぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「カードを２枚セットしてターンエンドや」

はやて　邪神アバター

セットカード２

手札２

「私のターン、ドロー！」

その言って宮はデッキからカードをドローした。

「サンガに？ミスト・ボディ？を装備してターンエンド！」

宮　雷魔神―サンガ
　ミスト・ボディ　セットカード
　　手札０

破壊耐性をつけたか。
どうやって破壊するかな？

「俺のターン、ドロー！」

ん？
このカードは……

「？闇の住人シャドウキラー？を召喚！」

闇の住人シャドウキラー　ＡＴＫ１４００

俺の場に髑髏の頭にナイフを持った悪魔が現れた。

「シャドウキラーは相手の場に守備表示モンスターしか存在しない場合、直接攻撃できる！　【闇からの奇襲―アサシン・ナイフ―】！」

「ほな私は罠カードを発動や！　？ライジング・エナジー？！　手札を１枚捨てて場のモンスター１体のＡＴＫを１５００ポイントアップするで！！」

闇の住人シャドウキラー　ＡＴＫ１４００→２９００

シャドウキラーは一瞬の内に場から消えた。
「ど、どこにいった！？」
「ぬぉ！？　ぐあああああ！！」
迷宮兄弟　ＬＰ７８００－２９００＝４９００
慌てて周囲を見る迷の横で宮はいつの間にか背後に回られていたシャドウキラーに首を切り裂かれた。
「俺はこれでターンエンドだ」
幻夜　邪神アバター　闇の住人シャドウキラー
セットカード
手札１
「私のターン、ドロー！」
引いたカードを見て迷は笑みを浮かべる。
「私は手札から？死者蘇生？を発動！　墓地のヒューガを蘇生する」
風魔神―ヒューガ　ＡＴＫ２４００
「さらに？リビングデッドの呼び声？を発動！　墓地のスーガを特殊召喚！」
水魔神－スーガ　ＡＴＫ２５００

「手札を1枚捨てて？死者への手向け？を発動！　アバターを破壊する！！」
「くっ！」

アバターに黒い霧がまとわりつく。
するとアバターは溶けるように消えていった。

「見せてやろう。最強の守護者を！！　私は場の3体の魔神を生け贄に捧げ、手札から？ゲート・ガーディアン？を特殊召喚する！！」

ゲート・ガーディアン　ＡＴＫ３７５０

……絶対に効率悪いよなぁ。
3体の生け贄で効果無しの最上級モンスターとか。

「？ゲート・ガーディアン？で攻撃！！　【魔神衝撃波】！！」
「罠カード発動！　？攻撃の無力化？！！」

？ゲート・ガーディアン？の放った攻撃は渦に飲まれ消えた。

「生き延びたか。私はこれでターンエンド」

迷　ゲート・ガーディアン
　リビングデッドの呼び声
　手札４

「私のターン、ドロー！」

さて、はやてが引いたカードでこの先が決まるな。

「……私は手札から?強欲な壺?を発動！　デッキからカードを2枚ドローする！！」

そう言ってはやてはデッキからカードを2枚ドローした。

「！！　……私はカードを3枚セットしてターンエンドや！」

はやて　闇の住人シャドウキラー
　セットカード3
　手札0

「私のターン、ドロー！」

そう言って宮はデッキからカードをドローした。

「何を引いたかは知らぬがこれで終わりだ！　?ゲート・ガーディアン?で攻撃！！　【魔神衝撃波】！」

「罠カード発動！　?和睦の使者?！　このカードによりこのターン、モンスターは破壊されず戦闘ダメージもない！」

?ゲート・ガーディアン?の攻撃を女性が現れ不可視の壁で攻撃を防ぐ。

さっきの強欲で引いたのか。

「無駄な足掻きを、私はこれでターンエンド！」

宮　ゲート・ガーディアン
　リビングデッドの呼び声
　手札1

「俺のターン……ドロー！」

少しだけ眼を瞑り、呼吸を整えデッキトップに指を置く。
信じてるぞ、俺のデッキ……
そう思いながら俺はデッキからカードを引き抜いた。

「何をしようとも我等が？ゲート・ガーディアン？を破壊する手立てはあるまい！！　仮に先のようなモンスターが引けたとして生け贄に出来るのはそのモンスター１体のみ！！」

腕を組み笑みを浮かべた迷が言う。
確かに今引いたカードだけじゃ逆転どころか時間稼ぎも難しいだろう。
だけどな――

「俺達は２人で戦ってるんだよ！　セットカードオープン！　？ビッグバン・シュート？、対象は？ゲート・ガーディアン？だ！」

ゲート・ガーディアン　ＡＴＫ３７５０→４１５０

「我らのモンスターの攻撃力を上げるとはプレイミスか？」
「んな訳あるかよ。俺は手札から？フレア・リゾネーター？を召喚」

フレア・リゾネーター　ＡＴＫ３００

俺の場に音叉を持ち炎のマークを服に縫い付けてある悪魔が現れた。

「レベル４？闇の住人シャドウキラー？にレベル３？フレア・リゾネーター？をチューニング！！　天頂に輝く死の星よ！　地上に舞い降り生者を裁け！　シンクロ召喚！」

フレア・リゾネーターが光の輪となりシャドウキラーを包み込む。
やがて光の輪が完全な球体となり漆黒に染まる。

「降臨せよ！　？天刑王　ブラック・ハイランダー？！！」

そして漆黒の球体から刃が突き出る。
次の瞬間、突き出た刃が素早く振るわれたかと思うと球体は霧散し、大鎌を持った悪魔が現れた。

天刑王ブラック・ハイランダー　ＡＴＫ２８００→３１００

「？フレア・リゾネーター？の効果で攻撃力を３００ポイントアップする！」

ブラック・ハイランダーの持つ大鎌に焔が宿り攻撃力が上昇する。

「しかしまだ攻撃力は足りぬ！」
「それは……どうかな？」

余裕そうな表情の迷宮兄弟に俺は答えた。

「ブラック・ハイランダーの効果を発動！　１ターンに１度、装備カードを装備した相手モンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターに装備された装備カードを全て破壊し、破壊した数×４００ポイントダメージを相手ライフに与える！　俺は？ゲート・ガーディアン？を選択する！　【死天葬送（デス・クラファトル）】！」

ブラック・ハイランダーは俺の言葉に大鎌を振るい斬撃を飛ばす。
斬撃は？ゲート・ガーディアン？に当たり弾ける。

すると急に?ゲート・ガーディアン?の周囲が歪み次元に隙間が開いた。
?ゲート・ガーディアン?は隙間に飲み込まれ消えた。

「?ビッグバン・シュート?は破壊されたとき装備モンスターを除外する。さらにブラック・ハイランダーの効果で４００ポイントのダメージだ」
「な！？　ぐわぁぁぁぁぁぁ！！」

迷宮兄弟　ＬＰ４９００－４００＝４５００

「さて、ブラック・ハイランダーの攻撃力は３１００。相手のライフは４５００、どうやったら削りきれるでしょうか？」
『なぞなぞですか？』
『攻撃力を上げる…？』
『セットカードと手札が１枚ずつあるよ～……』

俺の言葉にポケットの中の３人が答える。
まぁ、正解だな。

「セットしてある魔法カード?巨大化?を発動！」
「なにっ！？」

天刑王ブラック・ハイランダー　ＡＴＫ３１００→５９００

ブラック・ハイランダーの持つ大鎌が大きさを増す。
これで終わりだ。

「ブラック・ハイランダーで直接攻撃！！　【死兆星斬（デス・ポーラ・スレイ）】！！」
「「ぬぅあああああ！！！！」」

迷宮兄弟ＬＰ４５００－５９００＝－１４００

ブラック・ハイランダーは巨大化した大鎌を横薙ぎに振り回し迷宮兄弟を斬り裂いた。
そしてライフが０になり終了のブザーが鳴った。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ第３者視点
「で？　なんで３人はここに？」
『幻夜が心配だったからよ』
『寂しかった…』
『ｚｚｚ～……』

部屋のベッドに座り幻夜は３人に尋ねる。
すでにエルは眠っているので２人が答えたが。

「心配してくれるのは嬉しいが気を付けてくれよ？　精霊が見える十代に見つかったらめんどくさくなる」
『分かってるわ。ほら、もうこんな時間だし寝ましょう？』

幻夜の言葉にラルは頷き幻夜に眠るよう促す。
幻夜はそれに従いベッドに横になり目を閉じた。

『ラル姉さん、今日は私よね…？』
『ええ、お休みなさい』

そう言いながらルビは幻夜のベッドに近づく。
ラルはエルを抱き抱えるとカードの中に戻っていった。

『お休みなさい…』

ほんの少しだけ頬を朱に染めてルビは呟く。
そしてルビは幻夜に抱き着き眠りについた。

制裁タッグデュエル（後書き）

流星キラリ様、無限の剣製作者様感想ありがとうございます。

竜姫「久しぶりね」

竜王「大分期間が空いたな」

幻夜「空きすぎだろ。どうなってるんだよ」

竜王「闇狩りの方がメインだからＮＥ☆」

竜姫「まぁ、デュエルしたくなったらまた更新するから♪」

竜王「あ、はやてが罠を使ったのは演出上協力をイメージしたかったからです。おかしいかもしれませんが気にしない方向でお願いします」

幻夜「次はいつになるんだ？」

竜姫「さぁ？？遊戯王ＧＸ　《蒼き幻を従えし者》？続きます」

地の封印と多人数（前書き）

竜王「かなーり久々」

竜姫「気にしなーい♪」

竜王「な～にっかな～！　な～にっかな～！」

竜姫「今話の最強カードはこれ！」

地獄(じごく)の暴走召喚(ぼうそうしょうかん)

速攻魔法

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に

攻撃力１５００以下のモンスター１体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から

全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、

そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

竜王「発動条件は難しいが使えれば大量にモンスターを展開できるぞ！」

竜姫「?ジャンク・シンクロン?や?デブリ・ドラゴン?で?チューニング・サポーター?を特殊召喚して発動すれば?ジャンク・デストロイヤー?や?氷結界の龍トリシューラ?も簡単に呼び出せるよ♪」

竜王「しかも手札を3枚も増やせるしな」

竜姫「ただし?仮面竜?や?巨大ネズミ?などのリクルーターには使用できないから注意が必要よ！」

地の封印と多人数

ｓｉｄｅ聖幻夜

「軽く疲れた……」

保健体育の授業が終わり体育着から制服に着替えながら俺は呟いた。

俺は運動が嫌いなわけではない。

だが、何度も俺の方ばかりに野球ボールが飛んでくるのはさすがに嫌になるのだ。

『あらあら？　でも全部取ってたじゃない』

『カッコよかったよ……』

『そ～そ～……』

俺の呟きにラル、ルビ、エルが現れ答える。

３人が現れたことに一瞬慌てたが周囲に他の生徒はいなかったので俺は胸を撫で下ろした。

「おどかさないでくれよ。でも、ありがとな」

３人の言葉は嬉しかったので俺は礼を言った。

さて、残りの授業に向かうかな。

『そう言えば昨日、作ってみたって言う２つのデッキは？』

「持ってきてるよ。今日、誰かとデュエルして試すつもりだ」

ヤハウェからもらった面白そうなカードも組み込んだしな。

昨日の昼頃にヤハウェが急に話しかけてきたから新しく出たカー

ドについて聞いてみたのだが……
何をはりきったのか分からないが、縁が黒いカードまで送られてきたのだ。
まぁ、使い方は分からないが機会があったらデッキに組み込むことを考えてみるかな。

「っと、授業に遅れるー！」

そう言って俺は走り出した。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ第３者視点
「どうしてこうなった……」

時刻は放課後、空を見上げ幻夜は呟く。
幻夜の周囲には彼を取り囲むようにレッド、イエロー、ブルー、さらには教師までもがデュエルディスクを構えて立っている。
ことの発端は今から５分ほど前……

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「暇だ……」

授業が全て終わり机に突っ伏し幻夜は呟く。
幻夜の新しく組んだと言うデッキ。
これを使用して幻夜はデュエルをしようとしたのだが、ことごとく邪魔が入りデュエルが出来なかったのだ。
例えば、デュエルをしようとしたが、語尾に?なの?と付くことがある女子生徒に捕まり、「先生が探してたの！」と、引きずられていき中断したり……

相手を探していたら、やたらに足の速い、金髪ツインテールの女子生徒に、ぶつかって吹き飛ばされたり……
何故か、笑みを浮かべている関西弁の女子生徒に捕まり、長時間話す羽目になり授業に遅れたり、と。

「放課後じゃ誰もデュエルしないよなぁ……」

仕方無しに机から頭を上げ、幻夜は立ち上がる。
溜め息を吐きながら幻夜は教室から出る。
ここで生徒や教師に囲まれたのだ。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「……何の用で？」
「うるさい！　このリア充が！！」

気だるげに幻夜が尋ねると、イエローの服を着た生徒が怒鳴る。
その言葉に幻夜は「またか……」と呟き、周りを見渡した。
この様なことが起きたのは、何も今回が初めてではない。
しかし、何時もよりも明らかに人数が多いのだ。

「俺達とデュエルだ！　ここにいる全員に勝てたなら、悔しいが諦めてやる！」
「しかし、俺達が1人でも勝った場合、聖幻夜！　貴様は、今後ブルーの天使達に近づくな！」
「近づいたら成績がどうなるかは言わないでおく」

レッド、ブルー、教師の順に言う。
ブルーの服を着た生徒が言う、ブルーの天使達とは、なのは、フェイト、はやての3人を指す。

ちなみに明日香はブルーの妖精と呼ばれている。
と言うよりも教師が私情を持ち込むのは如何なものか……

「仕方がない……」
「「「「「「「「デュエル！！」」」」」」」」

形式はバトルロワイアルだが、実質は幻夜ＶＳ複数だろう。
この場合、最初のターンは全員が攻撃できない。

「俺の先攻、ドロー！」

そう言って幻夜はデッキからカードを引き抜く。
引いたカードを見、手札に加え、カードを手に取る。

「モンスターをセットし、カードを２枚セット。これでターンエンドだ」

幻夜　ＬＰ４０００
セットモンスター１
セットカード２
手札３

「俺のターン、ドロー！」

ブルーの服を着た生徒が言いながらデッキからカードを引く。

「俺は？アックス・ドラゴニュート？を召喚！　さらに？愚鈍の斧？を装備する！」

アックス・ドラゴニュート　ＡＴＫ２０００→３０００

斧を持った竜人が現れ斧の二刀流になった。
さらに?愚鈍の斧?の効果によりデメリット効果を打ち消している。

「これでターンエンドだ！」

ブルー生徒　ＬＰ４０００
アックス・ドラゴニュート
愚鈍の斧（装備）
手札４

「私のターン、ドロー！」

眼鏡をかけ直し教師はデッキからカードを引き抜く。

「私は?ゴブリン突撃部隊?を召喚！　そして?愚鈍の斧?と?デーモンの斧?を装備する！」

ゴブリン突撃部隊　ＡＴＫ２３００→３３００→４３００

教師の場に数匹のゴブリンが現れ、２匹が斧を持った。
こちらも、?愚鈍の斧?の効果によりデメリット効果を打ち消している。

「私はこれでターンエンド」

教師　ＬＰ４０００
ゴブリン突撃部隊
愚鈍の斧（装備）　デーモンの斧（装備）

手札３

「俺のターン、ドロー！」

そう言ってイエローの服を着た生徒はデッキからカードを引く。

「俺は？ジェネティック・ワーウルフ？を召喚！　さらに？凶暴化の仮面？を装備！」

ジェネティック・ワーウルフ　ＡＴＫ２０００→３０００

白い狼人間の顔に仮面が装着される。

「これでターンエンドだ！」

イエロー生徒　ＬＰ４０００
ジェネティック・ワーウルフ
凶暴化の仮面（装備）
手札４

～人数が多いため以下省略～

最終的な場の状況。

幻夜　ＬＰ４０００
セットモンスター１
セットカード２

生徒・教師　ＬＰ４００００（合計１０人）
アックス・ドラゴニュート（３）　ゴブリン突撃部隊（１）　ジ

エネティック・ワーウルフ（2）　神獣王バルバロス（2）　ガンナー・ドラゴン（2）
愚鈍の斧（4体装備）　デーモンの斧（3体装備）　凶暴化の仮面（3体装備）　スキルドレイン

場の状況を見て幻夜は呆れる。
何故なら、これだけの人数がいて他に誰もカードを伏せないからだ。
しかし、他の生徒も教師も勝利を確信しているのかニヤニヤと笑みを浮かべている。

『大丈夫……？』
「問題ない。勝利への道筋（ルート）はもう揃ってる」

ルビの問いかけに幻夜は手札を確認し言い切る。
幻夜の手札は、各々？アステカの石像？？地獄の暴走召喚？？X―セイバーパロムロ？の3枚だ。
この手札とセットされた3枚のカードでどのような道筋が見えているのか？

「俺のターン、ドロー！」

そう言って幻夜はデッキからカードを引き抜く。
引いたカードを手札に加えた後、幻夜は手札から？X―セイバーパロムロ？を墓地に捨て、デュエルディスクを操作する。
「俺は手札を1枚墓地に捨て、罠カード？レインボー・ライフ？を発動！」

幻夜の場にセットされたカードが1枚起き上がる。
「効果によりこのターン、俺へのダメージは全て無効になり、その数値分ライフポイントを回復する。そして?巨大ネズミ?を反転召喚！」
幻夜の身を包むように虹が現れる。
そして幻夜の場に頭蓋骨を持った巨大なネズミが現れた。
巨大ネズミ　ＡＴＫ１４００
「そして手札から速攻魔法?サイクロン?を発動して?スキルドレイン?を破壊！」
凄まじい突風が起き、場の?スキルドレイン?は破壊された。
「さらに?アステカの石像?を召喚！」
アステカの石像　ＡＴＫ３００
「攻撃力３００を攻撃表示！?」
「やっぱりレッドはダメダメだな！」
?アステカの石像?効果の面で言えば1ターンＫＩＬＬも可能なカードだが……
「?巨大ネズミ?で1番攻撃力の高いモンスター、先生の?ゴブリン突撃部隊?に攻撃！　【ボーンヘッド】！」
幻夜の宣言に?巨大ネズミ?は手に持っている骨を振りかぶり投

げつける。
しかしゴブリン達はその骨を打ち返した。
打ち返された骨を受け？巨大ネズミ？は破壊される。
しかし？レインボーライフ？の効果でダメージ分ライフを回復した。

幻夜　ＬＰ４０００＋２９００＝６９００

「？巨大ネズミ？は戦闘によって破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の地属性モンスター１体を場に特殊召喚できる！　俺はデッキから？Ｘ―セイバーアクセル？を特殊召喚！」

Ｘ―セイバーアクセル　ＡＴＫ４００

幻夜の場にＸと刻まれた武器を手に持つモンスターが現れた。
さらに幻夜はデュエルディスクを操作する。

「そして罠カード発動！　？地霊術―「鉄」？！　自分の場の地属性モンスター１体を生け贄にし、墓地からそのモンスター以外のレベル４以下の地属性モンスター１体を特殊召喚する！　俺は？アステカの石像？を生け贄にし、墓地から？Ｘ―セイバーパロムロ？を特殊召喚！」

幻夜の場の石像が砕け、中からＸと刻まれた武器を手に持つトカゲのようなモンスターが現れた。

Ｘ―セイバーパロムロ　ＡＴＫ２００

「さらに速攻魔法？地獄の暴走召喚？を発動！相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力１５０

０以下のモンスター１体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる！　その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚し、その後相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。俺はデッキからパロムロを２体特殊召喚！」

Ｘ―セイバーパロムロ　ＡＴＫ２００

Ｘ―セイバーパロムロ　ＡＴＫ２００

幻夜の場にさらにトカゲのようなモンスターが現れた。

そして生徒・教師の場のモンスターはそれぞれ３体ずつになっている。

「パロムロで先生の場の？ゴブリン突撃部隊？に攻撃！　【Ｘ（クロス）ブレイク】！」

パロムロはゴブリン達に攻撃を仕掛けるも反撃を受け破壊された。

幻夜　ＬＰ６９００＋４１００＝１１０００

「アクセルの効果を発動！　『セイバー』と名のついたモンスターが戦闘破壊され墓地に送られたとき、デッキからカードを１枚ドローする！」

そう言って幻夜はデッキからカードを１枚引いた。

「さらにパロムロで同じモンスターに攻撃！　【Ｘブレイク２】！」

幻夜はさらに攻撃宣言をする。
そして2体目も破壊された。

幻夜　ＬＰ１１０００＋４１００＝１５１００

「そしてアクセルの効果でドロー！　そして最後のパロムロで同じモンスターに攻撃！　【Ｘブレイク３】！」

幻夜の宣言により最後のパロムロが攻撃をする。
そして最後のパロムロは再び破壊された。

幻夜　ＬＰ１５１００＋４１００＝１９２００

「墓地のパロムロの効果を発動！　自分の場の『セイバー』と名のついたモンスターが戦闘破壊された時、ライフを５００払い墓地からこのカードを特殊召喚する！」

幻夜　ＬＰ１９２００－１０００＝１８２００

Ｘ―セイバーパロムロ　ＡＴＫ２００

Ｘ―セイバーパロムロ　ＡＴＫ２００

最後のパロムロが破壊された時に生じた爆煙の中から先に破壊された2体が現れる。
？レインボーライフ？によってライフが回復し、パロムロは自己再生紛いのことを行う。
さらにアクセルの効果によりデッキからカードを1枚ドローする。

ここに無限ループが確立された。
その後、デッキが無くなるまで幻夜の攻撃は続いた。

最終的な場の状況。

幻夜　ＬＰ１４１６００
Ｘ―セイバーアクセル
手札３６

生徒・教師　ＬＰ４００００（合計１０人）
アックス・ドラゴニュート（９）　ゴブリン突撃部隊（３）　ジェネティック・ワーウルフ（６）　神獣王バルバロス（６）　ガンナー・ドラゴン（６）
愚鈍の斧（４体装備）　デーモンの斧（３体装備）　凶暴化の仮面（３体装備）

「デッキを無くしやがった……！？」
「何が目的なんだ！？」

幻夜の行動が理解できないのか生徒も教師も騒ぎ始める。
そんな中、幻夜は手札から５枚のカードを引き抜いた。

「これで……終わりだ。？封印されし者の右足？？封印されし者の左足？？封印されし者の右腕？？封印されし者の左腕？……そして？封印されしエクゾディア？。この５枚のカードが手札に揃ったことにより、俺はデュエルに勝利する！」

幻夜の宣言と共に背後に巨大なモンスターが現れた。
？封印されしエクゾディア？このカードほど特殊勝利カードとし

て有名なものはないはずだ。
そして、エクゾディアは巨大な火炎球を作り上げる。
「行け！　【怒りの業火　エクゾード・フレイム】！！」
幻夜の宣言にエクゾディアは火炎球を生徒と教師に向けて放った。
それと同時にデュエルにてライフが０になったことを知らせるブザーが鳴った。

ｓｉｄｅｏｕｔ
ｓｉｄｅ聖幻夜
「終わった、終わった……」

デュエル後、生徒も先生がも逃げるように走り去っていった。
にしても、上手く回ったな。
初手に１枚はパーツが来て事故るかと思ったが。
今回使用したデッキは【大地の進撃】。
いわゆる地属性、岩石族モンスターが中心のデッキだ。
まぁ、岩石族が今回あまり出番はなかったが。

「これで平和になればいいが……」
『たぶん無理じゃない？』
『あの３人がいるかぎり無理……』
『ｚｚｚ～……』

俺の呟きにラルとルビが答える。
分かってた、分かってたけども……
つーか、エルはまた寝てるのか。
そんなことを思いながら俺はレッド寮に帰った。

地の封印と多人数（後書き）

竜王「エクシーズ出そうかな？」

竜姫「まぁ、次までに決めましょ」

幻夜「久々にデュエルしたな……」

竜王「次はどうなるのやら？」

竜姫「それでは♪」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6622s/

遊戯王ＧＸ 《蒼き幻を従えし者》

2012年1月11日08時49分発行